寢て了つたあとを、勝手に奥に入つて行くといふことであつた。最早女中達や、世間や、泊り客などの氣兼ねをしてはゐないといふことであつた。昨夜も二階に材木の方の人達が泊つてゐて、その一人が何を言ふかと思ふと、『此頃は何うしたえ？　旦那は？　村上にべえ行つてゐるけえ？　夫ぢやお上さんにあゝいふのが出來るのも無理はねえな……』などと言つたといふことであつた。それをきいた時には、かれは暗い暗い心持になつた。身が地の底深く沈むやうな氣がした。

一層かれに堪へられなかつたのは、お留がそれを手柄顔に且つ腹立たしげに言ふことであつた。お留にしても、矢張かれの泊つて來るのを好いことゝは思つてゐなかつた。『旦那さ、何故、家をあけるんけえ？　だから、お上さん勝手な眞似をするだよ……。もう、あけちや駄目だよ』などと言つた。それがまた長兵衛には堪まらなく不愉快であつた。

『默つてろ！　默つてろ！　皆な、おら、知つてる！』

かういふ風に長兵衛は言つた。

そこに、娘のお金がやつて來た。

『お金！』

『え……』

娘は振向いた。

『お前、ちよつと此處に來な！』

『何に？』

父親の樣子もいつもと違つてゐるので、立つたまゝもじもじしてゐると、

『何うした？』

『何か用？』

『あ、ちよつときくことがあるんだ。好い兒だから、此處にお出で……』

お金はそれでも怖々ながら父親の傍に寄つて行つて坐つた。

『お前は父さんの子だな？』

『……』

默つてはゐたが、輕く點頭いて見せた。

『お前にきくから、何でもはつきりと言つておくれね？　ね？　好いかえ？　きつとだよ』

娘は父親の顏を見上げた。

『お前はお父さんが何處かに行くやうだつたら、いつでも父さんについて來るか？』

『何うして？』

『何うしてッて？　もし、此處が他人の家になつて、お前達や、おら達もゐられねえやうになつたと

して……、さういふ時には、お前は何うする？　俺について來るか。それともおつかアに？』

『……』

お金の稚ない身には父親の言つてゐることがはつきりとは飲み込めないらしかつた。默つて父親の顏を見詰めた。

『何うした？』

父親はまた繰返した。

四五

それでもお金は默つてゐた。

『默つてゐてはわからないな……。それぢや、父さが、お前を置いてひとりで何處かに行つて了つても好いか？』

『いけない……』

お金は强く頭を振つた。

『そんなら話さなくては駄目だぞ……。父さん、何處かに行くなら、お前一緒に來るか？』

『家は何うするの？』

『その時はもう家なんかないんだ。此處にもゐないんだ……。何處か遠くに行つて了ふんだ？』

『村上？』

お金はかねて聞嚙つて知つてゐるので、こんなことを訊いた。

『それは村上だか、庄內だか、それとも東京だか、何處だか、まだわからないだがな……？』

と、いきなり、お金は、

『東京？　東京なら行く……今でも……？』

長兵衞は娘心の無邪氣に動かされたといふやうに、暫し默つてその顏を見てゐたが、『東京にでも何處へでもつれて行つてやる……。父さんのあとについて來さへすれば……』

『それなら行く……』かうお金は言つたが、考へて、『そしてお母は？　直は？』

『父さんばかりさ』

『ぢや、おつかアも直もつれて行かねえの？　おらばかり……』

長兵衞は輕く點頭いて見せた。

『でも、おつかアも、直も伴れて行かないでも、ぢき歸つて來れば好いのねえ？』

『もう、一度出て行けば、もう此處へは歸つて來ねえんだよ』

『何うして？』

お金の幼ない心には、その理由がはつきりとはわからなかつた。

『もう、その時には、家も何もねえだでな……。歸つて來たつて、しやうがねえいんだ！』

『何うして？　家が無えの？』

お金はあたりを見廻した。

『その時には、この家も、この屋敷も、皆な賣つて行つて了ふだでな……。もう此處には歸つて來ねえつもりで出て行くだよ』

『それぢや、おつかアと直は、何うしちやうだよ……？』

『おつかアはもうお前の母ではなく、直はもうお前の弟ではなくなつて了ふだよ。さうなれば——』

『いやだ、おら、そけなこと？』

お金はびつくりしたやうに大きな聲を立てた。

『ぢや、父さん、ひとりで行つて了ふでな……それで好いか？　もう一生、父さんにも逢へねえだぞ！』

『……』

『父と暮すよりも、おつかアと直と三人でくらす方が好いか。そんなら、それとはつきり言つて呉れ……な、これ、お金、お前も、もう何もわからない子供ぢやねえ……。父とあのおつかアとのことも知つてゐるら？　仲のよくねえことも知つてゐるら？　あの巡査が父のゐない時には、始終來てゐることも知つてゐるら？　な、お金よく考へて呉れ。お前は矢張、おつかアと暮らすか。その方が好いか？』

『……』

娘のお金は默つて低頭いて了つた。

四六

お金は何う返事して好いかわからないといふやうに——悲しい黑い雲が自分の目の前に垂れ下がつて來たやうに、低頭勝ちに前垂の下のところを口のあたりに持つて行つて丸めて嚙んだ。眼には涙が滲み出して來てゐるに相違なかつた。

長兵衞にしても、これ以上、强ゐてきく氣にはなれなかつた。幼い、漸く娘になつたかならぬばかりの女の兒に、かうしたことを訊かなければならないその身が泌々と悲しまれた。溜息がひとり手に出て來た。

『……』

『父はそれで何うするの？　東京か村上へ行くの？』

暫くしてから、お金は顏を擧げてかう訊いた。

『いや、さうきめたわけでもないんだけどもな……。さういふ時にはと言つてきいて見たばかしさ……』

わざと淋しく笑つて見せた。

『そんなことを考へないで……。おつかアがわるければ、おらがいくらでも言ふだで、お父、そんなことを考へないでお呉れヤ？』

『それぢや、此處にゐたいのだな？』

『さうばかしぢやねえ……。皆なして……皆なして行くだら、東京でも、村上でも、何處でも行くだけども、おつかアと別れて……家をなくして行くなア、おら、いやだで……』お金はたうとう泣き出した。

長兵衛は腕を組んで深く考へた。默つてゐた。

『な、お父……。おつかアのわりいのは、おら、いくらでも言ふだで。な、な、お父……』

傍に寄つて來て、父親の顔を覗くやうにして、『おつかアのわりいのは、おらも知つてゐる……だから、好く言うだで、堪忍して……？　な？　そしてお父も、村上に行かずに、いつも家にゐてお呉れや、な？　な？　さうすれば、あの入江のおまはりだッて、家に入つて來はしねえで……？　だから、おら、何がつらいッて、お父が家にゐねえのが何よりつらいだよ……。學校から歸つて來て、何が

一番つらいッていへばお父がゐねえ時だ……。お父がゐねえいと、おら何うして好いか、わからなねえでな』

ある考へがふと長兵衛の胸に浮んで來た。

『お父がゐねえと、おつかア、酷めるか？』

『酷めやしねえけども、おつかア屹度、その時は機嫌がわるいだでな……。おら、何か言つても返事もしねえだよ』

『それで、おまはりがすぐ來るか？』

『知らねえ……』

お金はすぐ頭を振つた。

長兵衛はまた默り込んで了つた。

『な？　お父？』

お金は猶ほ父親の顔を覗くやうにした。

『お金！　お金！』

と、奥で母親の呼ぶ聲がした。

『な、お父？』

『よし、よし、今すぐさうするッていふではねえからな。あまり心配しねえでゐろ！　な、おつかア
にお父が、そんなことを言つたッていふことを話すでねえぞ！　好いか？　わかつた？　お父が皆な好
いやうにするで、安心してゐろな……好いか』

お金は輕く點頭いて見せた。

『お金！　お金！』

母親の呼ぶ聲は次第に高くなつて來た。お金は立つて行つた。

四七

その翌日であつた。長兵衛はお虎を奥の一室に呼んだ。

『何か用？』

お虎は室の入口のところに來て立つた。

『まア、此方へお出！』

『何うしたんです？』

夫の顔の色が常に違つてゐるのをお虎は見落さなかつた。

『ちよつと用があるんだよ！』

夫は眞面目だつた。

『今ちよつと、手放されない用があるんですがね？　それをしてからではいけませんか？』

『此方の方がもつと大切な用なんだから――』

で、爲方なしに、お虎は長兵衛の前に行つて坐つた。

『お前の了簡をきゝたいんだがね？』

『……』

お虎ははつとした。いよ〳〵それだなと思つた。默つて夫の顔を見た。

『え？』

『何ういふ……？』

『何ういふッて、お前は、この家のために、もう一度考へ直して見る氣はないかね……？』

『……？』

『俺の言ふことも、お前には、もうわかつてゐる筈だが――おら、お前を責めはしない。人間の堪へ
られることは、俺、何處までも堪へて見るつもりだ……。それはな、おらもわるかつた……俺もこれか
らは考へ直すつもりだが……何うだな？』

『……？』

お虎は默つてゐた。

『おらもいろいろに考へて見たゞ。もうとても駄目か。かうなるのもおらが運か？　おらが運のわるいのか？　爲方がねえだで、思ひ切つて、東京にでも行つて一働きするか。かうもおらは思つて見ただ。いや、さうする方が結句お前のためにも好いかも知れねえと思つただ。しかし、な、もう一度俺考へ直して見た。まだ今の中ならば、何うにかなる。昔のやうにすることは出來ねえにしても、この家を持ちこたへて行くくれるのことは出來る。さうすれば子供をてんでんばらばらにして泣かせないでも好い……。まア、かう考へたゞがな、おらは？』

流石にお虎もかう言はれては、返事も何も出來なかつた。唯、胸が迫つて來た。

『それとも、お前に意見があるかな……。あらば言つて貰ひたい……。おらも考へて見るだで…？』

『……』

『え？　何うだな』

『……』

『默つてゐてはわからない……。おらも今まではわるかつた。隨分勝手もした。しかし、これからは、あらためるつもりだ……。それはな、人間だで、さう言つても、ぴたりとあらためられるか何うか、それはわからないが、何うかして、それをあらためたいと思つてゐるだで、な、これ、何うだな？

意見があるなら、本當に正直にきかせて呉れ――何んな意見でも、わるくはきかねえで……？』

『私が……私が……』言葉がちぎれちぎれに、眼からは涙がぱらぱらとこぼれた。『私が、私がわる……わるかつた――』

お虎は胸にこみ上げて來る悲哀を何うすることも出來ないといふやうに、そのまゝ低頭いた顔を兩手で押へた。

四八

長兵衞の眼からも涙が流れ出して來た。それはお互ひに辛い思ひのまゝならない人生を嘆くやうにも、また一面では、かうして心を合せさへすれば、ぢき心も氣分もぴたりと合ふのに、それなのに互ひに背き合つてゐなければならなかつたのを慨くやうにも見えた。二人とも暫くは顔を上げやうとはしなかつた。

お虎は遂に顔を擧げた。そして言つた。

『何うか堪忍して下さいまし……私がわるう御座いました！』

『さうか……？　お前もわかつて呉れるのか？　それは嬉しい……』かう長兵衞は言つたが、感極つたやうに聲を立てゝ泣いた。

『本當にわるう御座いました。さういふ心持とは知らずに、勝手なことをして居りましたから……何うか、何うか、これからは心を入れ替えますから、堪忍して下さいまし！』

『いや、さう言つて呉れると、却てこの俺が耻かしい……。もう、何も言ふな、何も言ふな……。今までのことは、もうすつかり忘れて了ふで……』

『何うぞ堪忍して下さいまし』お虎は唯かう繰返した。

しかし暫らく經つた後には、二人は最早全く涙を收めてゐた。二人の心は近頃にめづらしいほど互ひに相接近してゐた。

二人の話はいつか生計の方へと移つて行つた。いつもに似合はず、長兵衛は、いろいろなことを話した。山林を賣つた自分の失敗も話せば、まだ殘つてゐる不動産のことなども詳しく話した。

『おらもな、本當に考へたゞよ。子供も何も捨てゝ了ふか？　何うしやうかッて。しかしな、おらは考へた。兎に角お前に相談して見やう。今なら、今なら、まだ何うかなるだ。お前も、俺も了簡を入れかへて、眞面目に稼業を勵みさへすれば、何うにかなるだでな……。家を潰して、一家離散せずにもすむだでな……。よくきいて呉れた、これでおらも安心した――』

『いゝえ、私こそ――』

『ぢや、もう一度、お前がこゝの家に來た時の心持になつて呉れ――おらも、その時の氣持になつて

な』

『本當にさうして下されば、私だッて、どんなに嬉しいか知れねえで――』

『俺もな、さつきまでは、何うなるかと思つてゐたゞよ。お前がきいてくれれば好し、さうでなければ、爲方がねえで、家を賣り放して、お金でもつれて、何處かに行かうと思つてゐた！』

『それを、お金にお言ひになつたんですッてね？』

『お金がお前に言つたか？』

『昨日の夜でした。めそめそ泣いてゐるから、何うしたんだッて言つてきいたら、默つてゐる！　そして泣いてゐる！　氣になるで、段々きいて見たら、父さんが怒つてゐる。おつかア、何うかもとのおつかアになつてくれッて、かういふだで、何うしてそんなことを言ふのかと猶ほきいて見ると、これこれッて話して泣くだよ。……それから、そんなことはないから安心してゐよつて、やうやくすかして寢かせただが、今朝も學校から歸つた時、眼を赤く泣き腫らしてゐたゞよ』

『さうか――そんなことを言つたか？　本當に子供は可哀相だでな……。子供のことを考へると、何んな辛抱でもしなけりやならねえな』長兵衛の眼にはまた涙が見えて來た。

四九

『これから、本當に生れ返つた氣になつて働きます！』

かうお虎が言ふのに對して、長兵衞は、『もう今までの樣な心持ではゐられない……。ぐづぐづしてゐれば、身の破滅だからな……』と言つた。尠くとも一度はかうして二人は心を合はせた。

『おらは、何んなにこのことについて考へたか知れない……。もうとても駄目かと思つた。とても、俺達の生活はもとへ戻すことは出來ないと思つた……』かう長兵衞は附け加へた。

長兵衞は野の方へと出て行つた。そこに、直が學校の方から破れた雜囊を下げて歸つて來た。

長兵衞は傍に寄つて行つた。

『姉ちやんは？』

『知らねえ――』

『まだ歸つて來ねえか？』

『もう、歸つて來る――』

かう言つたが、さうして父親に話してゐるのを他の友達に見られるのが、きまりがわるいといふやうに、ばたばたと走つて向うに行つて了つた。

學校の生徒達は三々五々集つたり離れたりして歸つて來た。途中で取組み合つたり、追懸けたり、遁げたり、叫聲を擧げたりしてゐるものもあつた。畦道の方へと走つて入つて行くものもあれば、三四人

かたまつて、靜かに歩いて來るものもあつた。かれ等は皆な無邪氣に、父母のゐる家庭に向つて歸つて行くのであつた。そしておやつに何か貰ふことを樂しみにしてゐるのであつた。長兵衞はその小さな群の中にも立派に人生が展げられてあるやうな氣がした。かれ等は何んなことがあらうが、何んな紛糾がその家庭にあらうが、そんなことには頓着せずに、かうして無邪氣に樂げに歸つて行くのであつた。否、さうしてゐるのも時の間で、かれ等はやがて大きくなり、若者になり、娘になつて、そしてやはり、この山の中の古い驛にかれ等の世を送るのであつた。それを思ふと、かれは不思議な氣がした。新たに、人生のことを考へなければならないやうな氣がした。

向うから女の生徒が一かたまりになつてやつて來たと思ふと、ふとその中に、娘のお金が、他の生徒達よりも背が高く、頻りに何か傍の友達と話し合ひつゝ、此方に父親が見てゐるとも知らずに、靜かに歩いて來るのを見出した。

一番先に、荒物屋の娘がそれと知つて、そこにお金の父親が立つてゐるのを知つて、ちよつと挨拶して、そして一生懸命に何か話してゐるお金にそれと耳打した。

お金は此方を見た。きまりがわるさうに顏を赤くした。生徒達は皆な挨拶した。

『……』

お金は何か言ひたさうにしたけれども、しかも何も言はずに、そのまゝ皆と一緒にかれの立つてゐる

傍を通りすぎた。長兵衞はその時の後姿を遠くなるまで見送つた。

兎に角かれは働らかなければならないと思つた。眞面目に働らかなければならないと思つた。他郷に出ることなどは考へずに、この廢驛の土とひとつになるまでこゝにゐて働かなければならないと思つた。尠くともそれが運命だ。かれの運命だ……。さうして一家團欒して樂く暮すことをつとめなければならなかつた。ふと、村上の女のことが浮かんで來たが、かれはすぐそれを打ち消した。

五〇

それで一時は治つて行つたのであつた。長兵衞も成るたけは家を明けないやうにすると同時に上さんの方でも次第に入江巡査から離れて行くやうにした。それに、一家に取つて最も仕合せであつたことは、その年の冬の初めに、入江巡査の受持の區域が變つて、小國の駐在詰になつたことであつた。

何でもその時には、お虎は涙を流したといふことであつた。ある家のかげの壁のところで二人はこつそり立話をしてゐたといふことであつた。否、いろいろな噂はそれからそれへと傳へられた。それに由ると、その時までにも、お虎と入江巡査との關係は決して斷たれたのではなく、太田屋の家の中までこそ男は入つて行かなかつたけれども、何處かでこつそり會つてゐたには相違ないといふ話であつた。一方また長兵衞の方でも、さう以前のやうに公然（おほぴら）に出かけては行かなくなつたけれども、何かと用事にか

こつけて、村上に行つて泊つて來ないこともないではなかつた。『あの夫婦のことは何が何だかわからない！』こんなことを村の人達が言つたことも度々あつた。

しかし、入江巡査の此處からゐなくなつたといふことは、何よりも一番有效にさうした噂を靜めた。『上さんだつて、さういつまで思ひを殘してゐもしめいや？　それに長兵衞さんだツて、この頃は家におちついてるだでな……。それはな、男のこんだで、時には村上に行くだらうが、それはまア爲方がねえや！』かういふ風に村の人達も段々思ふやうになつて行つた。

それに、長兵衞にしても、お虎にしても、今迄とは違つて、山中の廢驛に唯一つ殘つてゐる昔からの旅舍の主婦として、また主人としてよく働いた。お虎が風呂の下を焚きつけてゐる此方で長兵衞が薪を割つたりしてゐるのを村の人々は常に見かけた。『お上さん、此頃は大分仲が好くなつたやうぢやねえか？　去年あたりとは、丸で違ふぜ！』などと馴染の旅客は言つた。

貞介はある時分家の上さんに訊いた。

『此頃は、大分、仲が好いッていふが、本當かな？』

『さア……』

『わからねえかね？——』

『わからねえがな……よくは？　でも、此頃は喧嘩をしねえな、もとはよくやつたでな。毎夜のやう

だつたがな……。それだけでも仲が好くなつたと言へば言ふだなア……』

『村上へ行くか？　まだ？』

『それは用があるで、行くには行くがな？』

『女は何うしたな？』

『よくわからねえけども……そこでその姿を見かけたつていふものはあるだな……』

『矢張、思ひ切れねえいかな！　あゝ深くなつちやアな……？』

『でも、お互ひに嫉妬喧嘩をしねえところを見ると、うまく行つてゐるんだと見えるな……。お互ひに、ぼろせい出さなけりや好いやな？』

『でも、上さんは、もう思ひ切つたべ？』

『思ひ切つたべな、もう——』

分家の主婦は意味ありさうに大きく笑つた。

『まだ、思ひ切らねんか？』

『それは、もう思ひ切るにも切らねえにも、男はゐねえでな？』

『でもな——』

『さういふ深いことは、お互ひ同士でなくつては、わかんねえだべ？』かう分家の主婦は要領を得ない言ひ方をした。

五一

それからまた月日が經つた。尠くとも二年は經つた。この間にはいろいろなことがあつた。民有林と國有林との悶着で村長は失職して、今度は貞介が無理やりにその位置に置かれた。汽車はもう海岸路を通つた。トンネルからトンネルへとその轟音は傳つて、をりをり黑い煤烟が碧い海の上に落ちた。勝木には停車場が出來て、そこから鑛山へ通ずるトロッコが谷に沿つて長く通じ、その一條はわかれて北中から小國の奥の山林地方の方へと通じた。山奥の木材が頻に運び出された。

S鑛山の騷動は、あの時きりであとは全く鎭靜した。しかし、そのために、兩坑は一時廢坑にされて了はなければならなかつた。事務長は、その時の打撲傷がもとで半年ほどして死んだ。社長も、それに懲りたとでも言ふのか、それともまた別に考へることでもあつたのか、その事業を庄内の豪農Tに讓つて、今は纔かに少し許りの株をそこに持つてゐるにとゞまるやうになつた。その時、煽動家の張本だと言はれた西山だの原だのは、今は事務の方へ來て、何方かと言へば、資本家側の方に屬するものゝ一人になつてゐた。あの時から比べると、鑛山の規模もぐつと小さくなつて、坑夫も百名ぐらゐに減つて了つてゐた。

時には村の集會の席などでその話が出た。

『もう大丈夫かな？』

『大丈夫とも……今度の社長は旨いでな……。矢張何と行つても、恩と威と兩方でやらなけりや駄目だよ……』

『今度の社長は、そんなにこは持てがするかな？』

『前の社長とは、段が違ふな？　パキパキしてるらアな……。何をヤリ出すかわからねえやうなところがあらア。それに、代議士としても中央で活躍してゐる方なんだから、何うしたツて人望があらア。前の社長の根が土百姓とは違うでな……』

『それはさうだな』

『さう言へば、お駒が東京にゐるツて言ふぢやないか？』

『知らない――』

『そんなことはないだらう。鑛山では皆な知つてるぜ……？』

『さうかな？　何うしてゐるんだ？』

『矢張、秋公と一緒にゐるさうだ。電車の事務員か何かに秋公はなつてゐるさうだ……？』

『へえ？』

『それで、夫婦で喧嘩もせずにゐるのかヤ……？』かう傍から突如に訊いたものがあつた。それは外でもなかつた。長兵衛であつた。

『さうだとよ。えらい、いゝお上さん振をしてるとよ。大きな丸髷になんか結つて……。丸で見違へるやうになつたと……。人間といふものは、決心ひとつで、何んなにでもなれるもんだな？　こんな山ん中にゐれば、いつまで經つたつて人の玩弄だのに――人間は思ひきりが肝心だな！』その話を持ち出した男は、かう言つて長兵衛の方を見た。

長兵衛は默つてゐた。それきり口もきかなかつた。

それからそれへと種々な話がつゞいた。秋公の母親の死んだ話も出れば、村上から女を伴れて歸つて來てゐる若い男の話も出た。かと思ふと、村の刈草――春がめぐつて來て、山から刈草をしなければならない時が已に來てゐた――日割の不公平なことなども出て皆なガヤガヤと喧しく話した。

五二

『いや、秋公の話なら、もつと詳しいことを知つてゐるがね？　これも困りもんさ――』

かうそこにゐた村會議員の一人の長瀨が言つた。

『おらも少しはきいた――』

他の一人が合せた。

『それはな、東京に出て行つて、働いて暮す方がのんきで、樂で、その上面白くつて好いからな……。一度、都會の空氣に染みたものは、もうこんな山の中に歸つて來る氣もしねえからな――』

『それは本當だ！』

また他の一人が合はせた。

『秋公のことだツて、もう少し早く、せめて遁げて行つた年ぐらゐにわかりさへすれば、無理にでも引張つて來られたんだけどもな。わかつた時は、もうお袋は死んで居たし、東京で何一つ困らずにやつて行けるやうになつてゐたで何うすることも出來なかつたゞ。それでもな、お袋が死んだことを初めてその時きいたで、えらく悲しんで泣いたさうだ……。でもな、おやぢには未練はねえだで、財産なんかには目もくれねえやうになつてゐたさうだ――』

『えれいな！　あいつ、小さい時はそんなに出來の好い方ではなかつたがな――』

長兵衛の隣にゐた肥つた古(ふるし)の庄屋だツたといふ人の子息が言つた。

『おらも、こんな山の中にゐるのはヤメにするかな……。馬鹿々々しい、一生、こんなに働いてべいゐて……？』

かう向うの方にゐる一人が言ふと、長瀨はそれに向つて、

『だから、困るよなア……。皆な誰だツて、さう思つてゐるで。誰でも彼でも、東京へ出て、一旗擧げたいと思はねえものはねえんだでな。さう思はないものは、嬶だの子供だのに縛られてな、何うにもかうにも手足の出なくなつた奴ばかりさ……。まア、おらとか、庄屋さまとか村上さとかいふものばかりさ……。實際、な、それも無理はねえだよ。東京へ行けヤ、腕次第で、どんなでも豪くなれるんだからな。あの小國の植村さ見ねえな。東京に行つたばかりで、あんねえに成功したぢやねえか。今ぢや百萬長者だツて言ふぢやねえか？』

『皆なこれも、學校が出來たり、新聞が入つて來たりして、世間のことが若いものにすぐ響くやうになつたで、それでさうなつただな。昔のやうに、女子供だけで足留めしておくわけには行かねえでな……。それを思ふと、おらが小せい時分などは、おとなしいもんだつたな、皆な……。嬶持つて、田地の少しも宛がへば、それでおとなしくしてゐたもんだ……。世が變つたな！』

髮の白い、齒の全くなくなつた一座の中で一番老いた百姓はかう慨嘆するやうに言つた。

『でも、そんなにして東京へばかり出て行くのは好いこつちやないな……。さういふ風に出て行かれちや、村も何も立行きやしねえ！』

『さうとも……現に、小國の此方の志津あたりでは、若い者が東京さ行くのがはやりものゝやうになつて、田をするものもなくつて困つてゐるツて言ふぢやねえか。あゝいふ風になつても困るな……。そ

れやな、成功とか、金とかいふことも好いかも知れねえけども、自分の生れた土地といふことも考へて見ないぢやな！　俺のやうにかうして碌でなしに村に踏留まつてゐるものもねえでは困るでな……』

『さうとも、さうともな……』

老いた百姓はかう言つて、鉈豆のやうにたゝき潰した烟管に火をつけて、すぱすぱ吸つた。

五三

長兵衛は默つてゐたけれども、それが村の問題ばかりでなく、自分の問題であることを思はずにゐられなかつた。

『何うもしやうがねえな。さういふ時勢になつて來たゞで？』

かう老いた百姓は言つた。

『これを推て進んで行けば、何うなるかわからねえな。村は野原になつて了ふより他しやうがあんめい……』

『本當だ……』

『いくらわかつてゐたッて駄目だからな……。さうすれば、村が潰れるッていふことがわかつてゐたッて、利得の行く方に若い者は引張られるでな。今には、志津と同じやうになつて了ふのが眼に見えてゐる！』

長兵衛には村のわるくなつたのがはつきりと見えた。二三年前までには、それでもまだ村に仕事があつた。金の取れる仕事があつた。現に、かれが村長をしてゐる時分には、山林の方にも、鑛山の方にも、または開墾の方にも、つとめて新しい仕事の多くなるやうに骨を折つた。そして村の若者をその生れた土地に留めることについて力を盡した。しかし、それでも、若者は皆な都會へ！　都會へ！　と向つて出て行つて了つたのである。

『とても、この時勢といふものにはかなはんな！』

深い溜息をつくやうにして長兵衛は言つた。

『困りもんさな』

『まア、しやうがねえ！　なるやうにならせるより他にしやうがねえな』

これは今の村長の唯一の參謀と言はれる片山といふ男だつた。

『何うも、片山さんがそれぢや困るなア』

半ば笑ひながらではあつたが、かう他の一人が言つた。

『さうだな、もうすこし積極的にやつて貰はねえぢやな……。庄内境の山林は小國に取られた——こいつは何うも今の村長さんの責任ぢやねえけども、大島池の方は是非、此方に取るやうに骨折つて貰は

ねえぢや、何うすることも出來ねえでな――』

『それは骨は折つてゐるぢやがな……』片山は考へるやうにした。

『山林もさうぢやが、開墾の方ももう少し骨を折らねえぢアなア？』

『でも、まア、開墾は言はゞまア内部のことぢやで……。内輪でそれは何うにでもなるが、山林の方はさうは行かねえ。外交だでな。旨く行かねえいと、すつかり駄目になつて了うでな』

『まア、一つこれは、みつちり村長さんに骨を折つて貰うだ』

かう老いた百姓は言つた。

長兵衛はさうした話からは全く離れて――緣側の方へ出て柱に凭り掛る樣にしてゐたが、佗しい、佗しい何とも言はれない佗しい心持がかれの全身をゆすぶり動かした。かれは二年間全く忍耐して生活して來た。人一倍勞働もした。村のためにも盡した。家庭のためにも盡した。隣近所のためにも盡した。村の若者達のためにも盡した。妻のためにも子のためにも盡した。そしてその結果は？　その獲物は？　妻は依然としてもとの不貞の妻ではないか。またかれは依然として昔のまゝのかれではないか。否、益益わるくなりつゝあるではないか。

『もう、とても駄目だ！』かうかれは思はずにはゐられなかつた。

五四

かれの方にも女に對する種々の變遷があつたと同じやうに、お虎の方にも男に對する心の細かな消長があつたらしかつた。しかし二人はあの時以來、さうした飈風に面しても、常に深く忍耐して、決して自ら恣にするやうなことをしなかつた。二人は互にその心の奥の奥の一部を自分で持つてゐるだけで、互にそれを表面にあらはさうとはしなかつた。長兵衛は村上に行くには行つても、こつそりと眼に立たぬやうにして行つた。成るたけ妻に知れないやうに行つた。お虎はお虎で、相手が向うに行つてからといふものは、一時全くその關係が絶たれたと言つても好かつた。二人は全く生活を改造することに就いて努力した。

ある時、肥つたUが『此間はひどく圓滿になつたね！』と言つてひやかした。その時、かれは『さうかね？　さう見えるかね？』と言つてさびしく笑つた。

『だつて、見たところ、圓滿ぢやないか、喧嘩もしないぢやないか？』

『うむ、喧嘩はしないな』

『まア、喧嘩をしなけれりや、圓滿と言はなけりやならない――』

その言葉を長兵衛は長い間考へた。そして世間といふものは、うはつ面なものだと思つた。喧嘩さへ

しなければ――一緒に畠でも耕してゐさへすれば、それで圓滿な夫婦だと思つてゐるのであつた。かれは思はず溜息をついた。

かれはあの時すぐお留に暇をやつたことを思ひ起した。そして家の内には、妻とかれと二人しかゐないやうにして――女中にも年頃のは使はないやうにして、そして心と體とを合せやうとしたのであつた。しかしそれが出來たか？　却てあべこべの結果を呈しはしなかつたか。お互にその夫がありその妻があるがために、思ふまゝの男に、または女に遠ざからなければならない悲しみを感じはしなかつたか。否、その男なり女なりが、かれ等の間に常に幅をして横はつてゐるために、心を合はせやうとしても、また體を合せやうとしても、竟にぴつたりと合ふことが出來なくはありはしなかつたか。否、その反動として、互ひに互ひを憎むやうな心が無意識に萠して來はしなかつたか。

かれは昨年の秋頃、ある人の話に、お留が湯田川の遊廓に女郎になつてゐるといふことを聞いて、何うしてもその戀心を禁めることが出來ずに、誰にも言はずにこつそりそこに出かけて行つたことを思ひ起した。そこは庄内でも有名な溫泉のあるところで、北中からは、十里以上も離れてゐたが、そんなことには頓着せずに、峠を二つも三つも越して、その日の中にそこに行き着いたことを思ひ起した。ところが、最早お留はそこにゐずに、一月ほど前に湯の濱の遊廓に鞍替をしたといふことをきいて、がつかりして茶屋に上つて酒を飲む元氣もなしに、すぐすぐ宿屋に歸つて來たことを思ひ起した。否、そればかりではなかつた。かれはあくる日、その湯の濱へと出かけて行つた。そして湯田川で聞いて行つたその遊廓のある女郎屋の一室にお留を見た時には涙が出て、涙が出て爲方がなかつたことを思ひ起した。女は始めはびつくりしたといふやうにじつと此方を見てゐたが、『まア、太田屋の旦那――』かう言つて突伏して了つたことを思ひ起した。

五五

その時ほど心を動かされたことはなかつた。いつそこのまゝ宅になどに歸らずに、女を伴れ出して何處かに行つて了はうかと思つた。この深い情――それに對してその身は何を酬ひたか。破れた草鞋のやうに平氣でそれを捨てゝ了ひはしなかつたか。不幸な女が何ういふ眼に逢ふかなどといふことは少しも考へずにそのまゝ暇をやつて了つたではないか。そしてそのために女は悲慘などん底に落されて了つたではないか。

『何うしてこんなところに來たの？』

かうその時お留は訊いた。

『何うしてツて、お前が湯田川にゐるといふことを人が話したから……』

『誰が――？』

『村の人が？……』

『村の誰が――？』

『誰だつて好いぢやないか』

『忠藏だらう。あの男、人をだまして、あんな奴はありやしない……』いかにもくやしさうにしてお留は言つた。いや、それを話したのは、忠藏ではない。他の人だと言つてきかせても、お留は何うしてもそれを本當にしなかつた。忠藏とはかなりに深く契つたらしく、湯田川から此處に鞍替をするやうになつたのも、そのためであるらしかつた。

それに、お留の心は夥しく荒んでゐた。傷痍を體中に負つて、やけになつてゐるやうなところもあつた。もはや無邪氣な田舍女ではなかつた。男の心の移り易いことも、女の男のためにいつも玩弄にされてゐることも、何も彼もよく知つてゐた。顏を合せた時には、流石になつかしさうに涙を流したけれども、暫くすると（またあなたは私を弄びに來たんですか？　それはもう眞平ですよ）といふやうな皮肉な態度を見せた。いくらさうでないといふことを言つてきかせても、容易にそれを信じやうとしなかつた。『村上に行くでせう？、まだ？』などとお留は云つた。

しかし次第にかれの心はお留に飲み込めて行つた。

『夫で、何うなの？　お上さんは？』

『同じことだよ……』

『矢張、あの巡査――』

『そんなことは詳しくは知らねえ……。もういやだ……。そんなことにやきもきするのは！　何うなと勝手にするが好いと思つてゐるだで――』

『何處にゐる？　あの巡査？』

『知らねえ……』

『小國かな？』

『小國には、もうゐめい……』

『さうかな……。さう言へば、あの巡査、一度俺がとここにも來たことがある！』

『此處に？』

長兵衞は暗い心持にならずにゐられなかつた。

『いゝえ、湯田川にゐる時分！』

『ひとりで？』

お留は點頭いて見せた。

『お前、客に取つたか？』

『いゝえ』頭を振つた。

『取つたんだらう……？　取つたんなら、本當に言つて呉れろよ』

『本當に斷つただよ。なんぼ、おらでもそんなことは出來ねえでな……。體がわりいッて言つて斷つて貰つたゞ。朋輩が出たつけ！』

『本當か？』

『本當とも——』

『あゝ、厭だ、厭だ……。そんなことを考へると、かうしてはゐられねえ氣持がする』長兵衛はかう暗い顔をして言つた。

五六

お留は悲しい境涯にゐた。半はやけであつた。何うにでもなれ！　といふやうな調子であつた。忠藏のためにその身の負つた借金はかなり重く、此方に來てから、何うにも彼うにもならないやうないやな狀態になつてゐた。それに今までたよりにしてゐた、向うでも出來ないながらもかの女のことを親身に世話して呉れた姉すらも、二人の子供を殘して流行感冒で死んで行つて了つたといふことであつた。今では天にも地にもかの女の頼りになるものはなかつた。『でも、死なずにゐるのが、不思議だと思ふことがありますよ。矢張、人間は死ぬのがいやだと見えますね』などと平氣で笑ひながらお留は言つた。

『さうかな……。それほどお前は悲慘だつたのかな？』長兵衛は慨嘆するやうに言つて、『それを……それを、おらは玩弄具にしたんだ。そんなに悲しいお前を、何といふおらだ。何といふ此身だ——。何うか堪忍して呉れろや……。な、な……知らなかつたんだから——』

『飛んでもねえ？　旦那！』

『本當だ……。今度湯田川に來る時だッてさうだ。そんな悲しいお前とは知らずに、お前に逢ひたいためにな、それを詳しく言へば、お前を玩弄具にすると言ふのは本當ではないが、賣物買物のお前だからといふやうなつもりで、かうしてやつて來たんだ！　人間は何處まであさましいんだらう？　何處まで汚ないのだらう？　それでゐて、自分のことは、棚にあげて知らずにゐるとは？』

『旦那、そんなことは仰しやらずに……？　私には旦那が來て下すつたことがうれしいんですから！』お留がかう遮つた。

『でもな。つくづく考へると、悲しくなる。おらだつて、何うかして人間らしくしたい。子供を捨てたり、家を捨てたりするやうなことはしたくないと思つて、そのために思ひ返せないところをも思ひ返して、お前ともわかれた。村上の方だつて、あれから成るたけ行かないやうにした。……それから二年經つた——それなのに、それなのに……』涙は急霰のやうにかれの頰を下つた。お留は何う言つて好い

かわからないといふやうに唯默つた。

『おらがわりいのだ！』

暫くして、かう長兵衞は心から感じたやうにして言つた。

『そんなことはないだよ』

『いや、さうだ――皆な俺が身から出た錆だ……。誰を恨むことはない……』

『だつて、お上さんだつてわりい……。たしかにわりい！』

『それは皆おらがわりいからだ……』かう言つたが、深く慨嘆するやうにして『何うしたら好いのかなア！』

『……』

『もう、今になつては、どうすることも出來なくなつたんだなア！』

お留はしかし何うすることも出來なかつた。『お上さんを出して了つたら好いでせう？』かうさつき言つたけれども、さう簡單に事を解決して了ふことは出來さうにはお留にも思はれなかつた。それに、その二年の間に、夫婦の仲は一層わるくなつたらしかつた。最早二人は本當のことを互ひに言ふことが出來なくなつたらしかつた。喧嘩さへすることが出來なくなつたらしかつた。お留はそれをその身の悲慘な境涯に比べて考へずにはゐられなかつた。

五七

『夫でお前は何うする氣だね？』

『何うッて別に……。何うせ、おらのやうなものは、かういふのがきめだでな。かうしてつらいつとめでも何でもしてゐて、そして年の明けるのを待つより他にしやうがねえだよ』

『それで、世話でも見てやらうッていふお客もないのかね？』

『それはあるだよ』お留は顏を上げて、『でもな、そんなものあてになんねえ！』

『何うして？』

『だつて、お前さ、そんなことを一々取上げて、賴りにしたり何んかしてゐたら、それこそ一生、こから出られねえでな？』

『何うしやう？』

『お客なんて、女を騙すことは知つてゐるけども、本當に世話なんかして呉れるものなんかあるもんか？』

『さう言つて了へば、さうだらうけども、そこは矢張、此方の思ひやうにあるのぢやないかな……。本當に思つてやれば、向うだつて――？』

半ば言ひかけたのを強く遮るやうにして、

『駄目、駄目！』

『さうかな？』

『だつて、さういふつもりで、何遍となく私は男に頼つて見たんですもの……。でも、皆な駄目だッた。こつちの借金が増すばかりだもの……』

『さうかなア！』長兵衛は慨嘆した。

『だで、おら、もう、そんなことは考へねえだよ。おら、これから、此處で一生懸命に地道に捗ぐだよ。さうして、年が明けたらな、故郷にでも歸るだよ。それより他には——』お留は泣いた。

『でもな、その中には、運が向いて來るだでな……』かう言ひかけた長兵衛の眼からも涙が落ちさうにした。慰めやうにも慰めることが出來ないやうな氣がした。これから五年なり六年なりつとめあげて、さて、それからかの女の運命は？　かの女の成行は？　そこにはとても運命が明るい顔を見せてゐさうにも見えなかつた。お留は欷歔げた。

『まア、さう泣いたッてしやうがねえ。何うせ、世の中は辛いものだ。誰だつて辛くないものはねえいだ！　だからな、辛抱するだな……。俺も、これからは本當にお前のことを考へてやるだでな？』

『難有う——』

かう言つたが、『村上に行くかね。このごろ……？』

『滅多に行かねえ』

『でも、少しは行くだね？』

『行つたつてな、もう、もとのやうぢやねえよ。もう、つくづくさうしたことがいやになつたで。……』

『本當けえ？』

『うそなんか言ふもんか』

『何うだかな』

矢張、この人だッて何を言ふかわからないといふやうなさびしい失望の色がお留の顔にあらはれて來た。

で、そこに一夜泊つて、あくる日の正午頃に別れて來たことを長兵衛は頭にくり返した。もうその時はお留は泣顔を見せてはゐなかつた。却つていくらかはしやぐやうにしてゐた。『ぢや、またひまがあつたら來て下さいね！』かうした言葉も普通の客に對する普通のお世辭に過ぎなかつたことをかれは思ひ起した。

五八

いざ別れるといふ時には、涙を見せるのがいやとでも思つたのか、階子の下まで下りて來ずに、そのまゝすうと向ふに行つて了つたことを思ひ起した。發つて來る少し前に、『ぢや、また來るからね？』と言ふと、返事はせずに默つてゐたが、やがて、『でも、もう、遠いところだでな……。もうお目にかゝれるか何うかわからない……。御機嫌よく御丈夫でいらつしやいまし……』かう言つたことを思ひ起した。しかも、お虎に對しては、好意を持つたらしい言葉は始めから終まで一言も言はなかつた。(あゝいふお上さんを持つたのが貴方の運がわるいのだ……。すべてのことは皆なそこから來てゐる……) さうとはつきり言はなかつたけれども、それに近いことを度々言つたことを長兵衛は思ひ起した。かれはその時、金は澤山持つてゐはしなかつたけれども——それをやつて了へば、乘合馬車にも乘れずに、てくてく村まで歩かなければならなかつたけれども、しかも、『これは少しばかしだけども、小づかひにおし！また入るやうなことがあつたら、遠慮なく言つておよこし！　出來ることはしてあげるから』と言つて、五圓札一枚やると、『これはいらない！』と言つて二度も三度も押しもどすのを無理に置いて來たことを思ひ起した。あゝいふ女でさへ、あゝした人情があるのに、あゝした理解があるのに、お虎は？　お虎は？　かう思ふと子供のためにのみ犧牲になつて忍耐してゐては、この身の魂が亡びて了ふやうな

心地がするのであつた。

かれがお留に話した時——何うももとの巡査に逢つてゐるらしいといふ話をした時、『何うも、さうでせうね？　お上さんは惚れてゐたでな……。しかし、あの入江といふ人がわるですからな、お上さんも、今にえらい目に逢ふのは目に見えてゐるだよ』と言つた。その（惚れてゐた）が、ぐつと胸を衝いたことを長兵衛は思ひ起した。

さうかと言つて、かれはお虎が何ういふ風にして男と逢つてゐるかを知らうとはしなかつた。知りたくないことはなかつたけれど、否むしろ、をりをりはそれを知りたい、詳しく知りたいといふ烈しい衝動に驅られるのであるけれども、しかもそれを敢てしなかつたのは、さうすれば、益々自分がつらくなることを知つてゐるからであつた。針で刺されたやうな、または刄で斬られたやうな痛さを渾身に受けなければならないからであつた。それに、お虎の方にしても、此頃では非常に逢ふことが上手になつた。決してもとのやうに露骨にはやらなかつた。何んなに逢ひたくてもこれはいけないと思へば、じつと耐へてゐるやうになつた。また成るだけ村の人に目にかゝらぬやうに、何處か勝木か、でなければ、近所の山の中あたりでこつそり男に逢ふらしかつた。かれはそれと知つてゐても、問題にすることに勞れた。（夫婦と言つても、何うせ名ばかりだ。一つ床に寢るといふこともないのだ……。知らん顔をしてゐれば好いのだ。その方が面倒臭くなくつて好い……）段々かういふ風になつて行つた。しかし男から

たよりがあつたとか、何處かで運好く逢ふといふ時には、いくら隱さうとしても隱しおほせないやうな喜悅が見えた。『また逢つて來やがつたな！』かういつも長兵衞は思つた。時にはかれは全く失望して、（誰か大きな手でこれを粉微塵に打壞して呉れるものはないか？　さうしたら何んなに生々とするだらう！）などゝ思つた。

五九

ある時、お虎とかういふ話をしたことを思ひ起した。

『二人はいつまでかうしてゐたッてしやうがないね？』

『さうなら、好いやうにしておくれや……』

『おらの勝手にするわけには行かねえが、お前、いつまでもかうしてゐるつもりか？　何うだな？』

お前さんだッて、隨分勝手なことをしてゐるではないか。そんなことを言ふなら、私にだつて言ふことがある、澤山あるといふ顏の表情をした。

『こんなにしてゐては、しやうがないからな』

『私は何うなつたつて好いんですからね』お虎の答へはいかにも强情であつた。しかしその時は客が來たか何かで、そのまゝその話は他に外れて了つたけれども、さうした話はそれからも度々出た。

『もう、おらなんか世を捨てただ。とても本當に考へては生きてゐられねえ！』ある時には、あべこべにお虎はこんなことを言つた。

『さうかや……。お前なんかでもさういふ氣になるかや――』

『子供せい、ゐねえけりや、おらなんか、今時分は、こんなところにはゐはしねえけどな……』

その時はお虎はぷッぷッしてゐた。

『さうかな……。おらだッて、さうだ、子供せいゐねえけりや……』

『子供を捨てる藪はあるけど、身を捨てる藪はねえッてな……。こんなにしてゐちや命が亡びて了ふだな……』

つけつけ言ひながら、お虎は庭の方へと行つて了つた。

また、ある時にはこんな話をした。

『お前さ、お留のとこへ行つたつてな？　本當かや？　本當なら、あきれたもんだな？』

『そんなこと何うでも好いや――』

『ぢや、本當に行つたゞな……。あきれたもんだな……？　それではお前さ、いつか言つたことが反古になつて了つたぢやないか？』

『あんなことは、もう、とうに反古になつてゐらア。お前だッて――』長兵衞はかう言つたけれど

も、それに深く入つて行くことを厭つた。

『さうけえ？　反古けえ？　そんならおらにも考へがあるだよ』

『馬鹿――』

この上爭つたら喧嘩になると思つたので、長兵衛はついと向うの方へ行つて了つた。しかもお虎はそれを、お留のところに行つてゐて、その弱點に觸られたためだと思つた。

いつまでもそのことを問題にしやうとした。

『まア、よせ――そんなこと――』

『本當にあきれたもんだ。こゝから湯の濱まで、あんなすべたに逢ひたいために出かけて行くとは――愛憎もこそもつきはてた――』

『……？』

長兵衛は默つてゐた。相手にしたつてしやうがないと思つた。

『村上へだつて、お前さ、あの時から、隨分行つたぢやねえか？　今だツて、あの女ときれてはゐねえ！　金だツて、えらくつぎ込んだツて言ふぢやねえか。抱えが三人もゐるツていふぢやねえか。おら今まで默つてゐたけども……もうこらえられなくなつた』お虎はこんなことを言つて口汚く罵つた。

六〇

種々にかれは考へて見た。出來ることならば、何うかして圓滿な解決を得たいと思つた。しかしさうした努力は、いつもきまつて失敗に終つたことをかれは思はずにはゐられなかつた。

これが所謂性とか、性質とか、星とかいふものから起つて來る、根强い、根本的な、人間の力では何うすることも出來ない兩性の悲劇のやうにかれには思へた。その結果か、それともまた他に理由があつたのか、それは何うだかわからないけれども、兎に角一時かれは全く消極的になつて、これはもう自分の力では何うすることも出來ないといふやうな調子で日を送つたことがあつた。その時には、神か、佛かに縋つて慰安を求めるより他に爲方がないやうな氣がした。かれは勝木までわざわざ出かけて行つて、今まで念頭にも置いてゐないやうな寺を訪ねた。――そこには、普通と變つてゐるので評判が高い僧が住んでゐた。

その僧は五十四五で、まださう老いたといふほどでもなかつたが、かれの話す一伍一什をフムフムと點頭いてきいた後で、

『それで、お前さん、何うだな？、夜のことは？』

突如にかう訊ねた。

『夜のことゝ申すと……』

『……』

僧は眞面目に言つた。

『さういふことは、もう、何年にも……。さつきも話した通りで御座いますから』長兵衛の頭は思はず下つた。

『それはいかんぞ――』

かう僧は言つて、『それが、何うかならんかな?』

『何うとは?』

『昔のやうではなくつても――たまにでも好いでな……。それが出來ると出來ないとでは、大變に違ふでな』

『よくわかります……よくわかります』長兵衛は流石に變りものと世間で評判される僧だけあると思つた。『しかし……さつきお話したやうなわけで――?』

『駄目かな?』

『さういふ氣にはなれませんで……』

『それは困つたな……。それが一番わりいだな……。お前さんが道樂をしやうと、女を持たうと、そ

れが出來れば、何でもないんぢやがな……。さうぢやらう。それが出來ないぢやらう。何方からも手を出す氣にはならないぢやらう? それはわしにもよくわかる……』

僧は手を拱いて考へて、『もう一度、それをもとに戻すことは出來んかな?』

『……?』

長兵衛は何う答へて好いかわからないやうな氣がした。

『何にせ! 心のことぢやでな……。お互に別々に深く深く掘つて了つたで、何うすることも出來んぢやらうな?』

『仰しやいます通りで御座います。これまでにも、隨分、もとに戻さう戻さうと苦心は致しましたので御座いますけども――』

『困つたな……』

また僧は手を拱いた。

『さういふことよりも、佛の力で、何うか救けていたゞくやうなことが出來ますまいか――?』

『佛のカツて……それはむづかしいな。佛のカといふことはな、皆、自分自分の心のことぢやでな。心さへ何うにかなれば、佛の力も何もないぢやでな』

『心? 心? それは私の心では御座いますまい?』

『いや、お主の心ぢや――』

かう僧は強い聲で言つた。

六一

『それは何うしても出來ないかな?』

『……』

長兵衛は默つてゐた。

『つまり、心がそこまで行つたのぢや。それをあとに戻すことは容易でない。それはお前にもよくわかる。しかし心ぢや、さういふ風になつて行つた心ぢや。容易ではないが、それがあとに戻らないといふことはない筈だ――』

『それはさうですな』

『つまり、今のお前の立つてゐるところは、そのわかれ目ぢや。すぐにもどすか、さうでなければ、快刀を揮つてそれを破つて了ふぢや。その二つしかない。この二つの何方かを取らねばならない。それがお前の今の立場ぢや。それなのに、その何方にも行くことが出來ないで、今までのやうにぐづぐづしてゐれば、魂が腐つて了ふばかりぢや。何うにも彼うにもならなくなつて了ふぢや』

『本當に仰しやる通りです。今までゞさへ、體が、魂がくさるやうな心持がしたゞでな……』

『つまり、佛者に言はせると、それは地獄の奈落ぢや。水と火との中ぢや。しかもそれが燒かれも溺れもせずに、その苦しい中をもがき廻らなければならぬのぢや』

『本當です、本當です……』かう長兵衛は早口に言つた。實際、その通りであつた。燒かれるなら燒かれるで好い。溺れるなら溺れるで好い。しかしそれは燒かれるのでも溺れるのでもなかつた。燒かれず溺れずにその火と水の中を輾轉反側しなければならないのであつた。長兵衛はそれを繰返して考へた。

『それが佛者の言ふ劫ぢや……』

僧はかう言つて、じつと鋭く長兵衛の顏を見詰めた。

『何うかその劫を佛の力でのがれることが出來ないでせうかな?』

『それは出來ない。何故といふのに、それは心ぢやで、お前自身の心ぢやで……。わかつたか。わかるまいな。だから、あとに戻せとかういふのぢや……』

『何うしたら、あとに戻るだか?』長兵衛はかう訊くより他爲方がなかつた。

僧の言ふところに由ると、それは來た道――心がそこまで行くやうになつた路を細かに考へて見るより他に爲方がないといふことであつた。つまり曲るべきところでないところを曲つて來た。また通るべきところでない路を通つて來た。從つて細い枝路から枝路へと行くやうになつて了つた。崖が崖につゞ

いた。淵が淵につゞいた。それでもまだ間違つたことを知らずに——否、間違つたことに氣がついてゐても、それでも何うにかなるだらう、なるだらうと思つていよいよ遠く出て來て了つた。終には何うすることも出來なくなつた。右を見れば深い海である。左を見れば高い山である。前にはひろいひろい野がある。それは行つても行つても盡きないものである……。で、何うして好いかわからなくなつた時には、もうあとに引戻したくつても引戻すことが出來なくなつて了つてゐるのである！　來た路をたどつて歸つて行きたいにも、その路がわからなくなつて了つてゐるのである！『しかし何うすることも出來ない。矢張あとにもどるより他にしやうがないではないか。世間の人は、さういふ時に佛が出て救つて呉れるやうに思つてゐるが、それは間違ぢや。自分の心より他に佛などがあるものか。だから、自分でやるより外爲方がない。何うだ……わかつたか』かう僧は聲を勵まして言つた。

六二

『もし、それが、あとにもどることが、とても出來ねえとしたら、そしたら何うしたら好いでせうか？』長兵衞はあらためて眞面目に訊いた。

『さうぢやな……。その路に戻ることが出來ないとするとぢやな？』僧はちよつと考へるやうにして、『それが出來なければ、止むを得ないな。私は勸めはせん。決して勸めはせんけれども、すつかり

打壞して了ふぢやな』

『すつかり打壞すとすると、つまり何ういふことに？』

『つまりかうぢや。上さんも、他の女も、子供も何も彼も、皆な捨てゝ了ふぢや。そしてひとりになるぢや——』

『遁世ですな？』

『いや、遁世ぢやない……。まアきかつしやい。兎に角ひとりになるぢや。本當に自分ひとりになるぢや。私のやうに頭顱を丸めなくつても好いからひとりになる。そして考へて見る。三年も經てばひとり手に自分の行く路がわかつて來る……。しかし、これはお前の境涯を打壞すについて唯一の上策ぢや。これが出來れば、一番好いが、これは恐らくは出來まい。餘程しつかりした人間でも、これは容易には出來ないぢやで——。さて、これが出來ないとして、その次には、今までのことをすつかり斷ち切つて了ふぢや。村上の女なら女にきめて、あとはすつかり思ひ切つて了ふぢや。そしてその新しく入つて行つた境涯に身も心も入れて了ふぢや。これが第二の策ぢや。しかし第一の策に比べると、ぐつと羈絆が多いで、苦勞も多い。先づ子供のことがかなりに痛い鞭になつてお前の身を打つに違ひない。しかし、そんなことに頓着しては駄目ぢや。新しき生活以外のものにはすべて目を閉るぢや。薄情と言はれやうが、人非人と言はれやうが、冷酷と言はれやうが、そんなことには頓着しないぢや。さういふこと

よりも自分の新しい路を切開くことが大切だといふ風にして、目もくれぬやうにするぢや。しかし、それが出來るか何うぢや。出來ればきつと新しい路がひらける……。つまり、一度失敗した境涯を二度やつて見る。今度は失敗しないやうにやつて見るといふことになるのぢや。しかしこれも決して樂ぢやないな……。それに、これをやるには、今までのやうに、村に落附いてはゐられない……。結局、村を去つて、何處かに行かなければならない？』

『わかりました。よくわかりました……。それで、三番目は？　三番目の策は？』

『それは下策ぢや。つまり、今の境涯のまゝにして、進みもせず、退きもせずにゐることぢや。自滅を待つてゐることぢや。これが一番下策ぢや。しかしこれが一番樂には樂ぢや。世間には、さういふ下策に甘んじて、自分で自分の身を、魂を亡して行つてゐるものはいくらもある。情けないことぢや。悲しいことぢや。しかし何うもならんなアー』かう僧は溜息をついたが『もう、これで、わかつたらう？何うぢや？』

『よくわかりました』

『あとに戻る氣はないか？』

『考へて見ます！』

『打壊すなら、上策を取つて、ひとりになれ、ひとりになれ！　さうすれば、淨い路がお前の前にひらけて來る』かう言つた僧の顔は一種壯嚴なかゞやきを帶びてゐるのを長兵衛は見た。

六三

長兵衛の頭には、その僧の言つた言葉が長い間はつきりと印象されて殘つてゐた。成ほどその通りであつた。それより他に、かれの出て行く道はないらしかつた。かれは思ひ惑つた。實際、その身が何うすることも出來ない嶮しい細い道に入つて來てゐることをかれは考へずには居られなかつた。

二年ほど前に、何うかしてもとに戻りたいと思つて、熱心に努力したことをかれは思ひ出した。その時、戻ればまだ戻れないことはないのであつた。現に、その時は一生懸命になつて戻るつもりであつた。妻ともつとめて一緒にものをするやうに心懸けた。一緒に食事もすれば、一緒に床にも寢た。成るべく村上の方へも行かないやうにした。

しかしそれはとても長く續かなかつた。とても元へかへすことが出來なかつた。かれ等は來た路を忘れた。何うすれば、あとに戻つて行くことが出來るかを忘れた。で、かれはあらゆるものを捨てゝ了はうかと思つた。かれはそのことについて十日も考へた。しかしこれも容易に實行は出來なかつた。

かれは村上の女の許に行つた。そしてそれとなしに話して見た。

『さうね』

かう女は言つた。しかし、初めのやうに進んでそれに贊成はしなかつた。女は女で、この二三年の間に、僅かではあるが、ある地盤を築きかけてゐた。抱えも三人ぐらゐゐた。

『でも、此頃は、お上さんはおとなしいんぢやないの？』

『それはおとなしいがね……』

『ぢや、今のまゝにしてゐる方がお互のために好くはないかしら？　此方へ來たり何かすれば事が大きくなつて、却て面倒ぢやない？』

『それはさうだけども……もう、とてもあいつとは一緒にはゐられないやうな氣がするんだ』

『勝手ね？　貴方も？　此の前には、家の方が大切だなんて言つて、私の方は捨てたやうにして置きながら……。何うしてまたそんなことになつたの？』

『何うしても駄目なんだ……』

『それで、何うしやうッて言ふの？』女は一歩を進めて訊いた。

『何うしやうつて、別に何でもないのさ……。いつか言つたやうにしやうかッて言ふのさ？』

『今になつて、そんなことを言ふの？　それはね、私の方は別に困りはしないけども、それでは此の間中言つてゐたことが反古になつて了ふぢやないの？　家が潰れて了ふぢやないの？』

『それは爲方がない――』

『ぢや、もう、すつかり、あつちをたゝんで來やうといふの？』

『まア、さういふつもりに考へて見たんだけども』

長兵衛は長々と僧の言つた話をそこに持出した。

『だつて、そんな坊主の言つたことなんか――？』

『でも――』

『それはね、さうする方が貴方には好いかも知れないけども……。今ぢや、私、ちよつと困るわ。あの時なら、その方が好かつたんだけども――しかし、もう少し考へさせて下さいな。私だつて、それが出來ないつていふんでもないから』長兵衛の顏の暗い表情になつて行くのを見て、女はかう靜かに言ひ直した。

六四

『それでは、何うしても、さういふ風にしない方が好いッて言ふのかね？』

決答を促すといふやうな調子で長兵衛は訊いた。

『さういふわけではありませんけどもね。……その方が都合が好くはないかと思ふのよ』

『ぢや、さうしたいとおらが言へばするッていふのかね？』

『私にももう少し考へさせて頂戴――折角、私もこれまでに土臺をかためたんだから？』

『ぢや、これからもひとりでやりたいつて言ふんだね？』

『だつて、貴方がさうしろつて言つたんぢやありませんか』

『それはさうだけども――』

『でも、それがいけないつていふのではないのよ。あまり急な話だから、ちよつと考へさせて下さいと言つたのよ』

何うも女の態度がかれにはあやしまれた。さうした言葉のかげには、屹度、何かがあるに相違なかつた。さつき見たあの若い男か、それとも平生よく出入してゐる小林といふ男か。それともまた平林の豪農の手が未だに切れずにつゞいてゐて、そのなかにかうした土臺も出來て行つたのではないか。しかし、かれはさうした嫉妬――考へれば考へるほど際限のないさうした嫉妬を手で押し拂うやうにした。その嫉妬の辛さを考へると今でも頭が混亂しさうになつた。

『でも……それには？』

『何か他に障りになるものがあるだらうつていふの？……そんな事はない……それは本當にないわ』

『でも、平林……』

『まだ、あんなことを言つてゐるの？　さう思ふなら、誰にでもきいて御覽なさいな。すぐわかるぢ

やないの？』

『だつて、お前ひとりで……？』

『私ひとりで、これだけ土臺をつくつたのはおかしいツて言ふの？　さう――？　でもそんなことはないわ。抱妓があたつたので、それで、こんなになつたんですもの……』

『……？』

『疑はれるのが一番きらひさ！』女はいくらか腹を立てたといふやうにして『これだけ堅くしてゐるのに、誰だつて、私の堅いのは知つてゐるのに、それなのに、そんな風に思はれるのは、一番腹が立つわ。疑はしいと思つたら、幾日でも此處にゐて御覽なさいな』

『いや、さういふわけぢやない。唯、お前があゝいふ風に言ふから、それでさういふ風に考へたんだ……。それなら、それで好い――』

『それで、お上さんは何うしたの？』

『別に變りはない……』

『もう、そんなわるいことはしてゐやしないんでせう？』

『何うだかわからない』

『何うして？　一緒にゐるんぢやないの？　一緒にゐて、それでわからないといふことはないでせ

う？　そんな話はないわ』

『だつて、女なんか、何をしてゐるか、わかるもんぢやない――』

『そんなことはないと思ふわ。女だつて、男と同じだわ。堅くしやうと思へば、いくらだツて出來るわ』女は自分を辯護するやうにかう言つたが、『本當に、もうそんなことはないんでせう？』

『何うでも好いよ、もう……』

長兵衞は呻くやうに言つた。

六五

しかし長兵衞は女にさうした男があるか否かをはつきり究める氣にはならなかつた。そんなことはもう何うでも好かつた。不如意――何處に行つても不如意でないものゝない自分の生活がつくづくと悲觀された。しかしかれは昔のやうに激しはしなかつた。また腹を立てもしなかつた。唯、深い深い孤獨のさびしさがかれに迫つた。

『何うでも好いさ。そんなことは――？　出來なければ出來なくつたツて構ひはしねえだよ』

さびしくかれは笑つた。

『でも、考へて見ますわ……』女はじつと長兵衞の顏を見詰めて、『怒つてゐらつしやるの？』

『いや――』

長兵衞は頭を振つた。

『だつて、變ね？』

『……』

『私はさういふつもりで言つたんぢやありませんからね？　わるく思はないで下さいね。本當に、あなたがさういふつもりなら、私も考へて見ますから？』

『……』

長兵衞は何か言ふにすら堪へないやうな氣がした。何も彼も打ち壞された。そしてその打壞された廢址の中にかれはぼんやり立つてゐるのであつた。

それでもかれはいつものやうにそこで一夜泊つた。そして輕い心持で三味線を女に彈かせた。唄などもうたつた。『よくしかし人間といふものは、あきずにこんなところにあそびに來るもんだね？　いつも同じことをして歸るんだけども……』などと言つた。丁度それは秋から冬にならうとする頃であつた。窓の外にある銀杏は黃葉し、それに夕日が美しくかゞやきわたつた。

『人間といふものは、何うにもならないもんだな――』

あゝる朝、ぼんやり長火鉢のところで頰杖をついて、何か深く考へるやうにしてゐた長兵衞はだしぬ

けにこんなことを言つた。

『何うして？』

『何うしてつて？』言ひかけて、また長い間考へて『何うもさうだ。思ふやうになると思ふのが間違つてゐるのだ……。誰だッて皆なひとりなんだ……。さうだ。たしかにさうだ。あの勝木の寺の和尚の言つた通りだ』あとの一句は自分で自分に言ふやうにして言つた。

『勝木の寺の和尚ッて？』

女は訊いた。

『いや、何でもない——』

女は流石に氣になるといふやうに、『何か心配でもあるの？』

『いや——』

『あるならあるッて言つて下さいよ、隱して置いてはいやですよ。兎に角、その話は、私もゆつくり考へて見るつもりなんだから——』

『何にもない』

『でも、昨日から今日は、餘程變ね？　いやに悄氣てゐるのね。いつもとは丸で違つてゐるのね？』

『さうかな』

長兵衛はかう言つただけだッた。深い深い孤獨がかれの心を領した。底の底に落ちて行つたやうな氣がした。たとへて言つて見れば、それは辛うじて縋つてゐた一握の蔓も切れて了つて、身はずんと無限際の奈落の底に落ちて行つたやうなものだつた。

六六

『ぢや、また來るでな』かう言つて長兵衛は女の家を出た。別に變つたこともなかつた。しかし、その一時間ほど前に、女とこんな話をした。

『それでも、よく長いことやつて來たもんだな——』

『本當ですね……。あの時、私はまだ十九でしたものね。もう丸十五年になりますよ。來年の二月で……』

『さうだね、もうさうなるね』

慨然として『年月はすぐ經つて行つて了ふね。あの時分は、おらもまだ盛だつたな……。金もつかつたさ。兎に角、この村上の廓では、北中の旦那で通つたものだつたな？』

『本當ね……』女も流石にその時分が思ひ出されるといふやうにして『それにしても、あの私の前に貴方が關係していらしつた女がありましたねえ、何ッて言ひましたつけね？』

『房子かね？』

『あゝ、さうさう、房子さんでしたね。あの人、新潟に歸つてから幸福でゐるさうですね』

『さうかね？』

『何でも小間物屋の上さんか何かになつてゐるさうですよ。此間、ちよつと、勝子さんがさう言つてゐた――』

『おらのやうなものにくつついてゐない方が幸福だつたな？』

『そんなことはないでせうけどもね。これも皆な運ですからね。さうしたいからッてさうなつて行くもんぢやないし……さうかと言つて、運さへ向いて來りやひとり手に何うかなつて行きますしね？』

『お前なんかも、運の向いた時に、向うに行つて了ふ方が好かつた――』

かう意味ありげに長兵衛が言ふと、

『だつて、私なんかには、運なんか向いて來たことなんか一度だッてありやしませんもの……』

『平林は？』

『あれだッて、運が向いて來たッていふわけぢやありませんもの……』

長兵衛は默つてゐたが、暫くしてから、『かうして今までやつて來たのも、緣には緣だね？』

『さうですとも、緣でもなけりや、たうに何うにかなつて了つたにきまつてゐますもの……。この社會で、十年の上もつゞいてゐるのも、めづらしい方よ』

『それはさうだらうな』

『貴方は年を取つたつて仰しやるけれど、私だッて、年を取りましたよ。もう欲が出ましたもの……』

『さう言へば、隨分長い間だね。いろ〳〵なことがあつたね。この土地にだつて昔の姐さんで殘つてゐるのは〆太さんだけぢやないか。照子も音吉も定子も、その他、あの時分の好い姐さんは皆何處かに行つて了つたぢやないか』

『私のやうなものでも、今ぢやこの土地の委員ですものね？』

『本當だよ。經つて見ると、年月といふものは早いもんだ……。おらだちのゐなくなるのもわけはねえ――』

『そんなことはないけれども……』そこに抱鼓の一二三が入つて來たので、そのまゝその話はやめになつて了つた。

長兵衛が暇を告げて出て來るとあとから女は忘れて來た煙草入を持つて驅けて來た。『ぢや、丈夫でゐな……』もう一度かう長兵衛は言つた。そしてそのまゝすたすた歩いて行つた。その後姿がいかにもさびしさうに女の眼に映つた。

六七

尠くともかれの心には、今までに經驗しなかつた痛切な感じ――絶望と言つて好いか、憤激と言つて好いか、それともまた空虛と言つて好いかわからないやうな感じが全身を地の底深く突き落した。もはや生きてゐる效もないやうな氣持が冷やかにかれの魂を繞つて行つた。

しかし女がかれにつらかつたわけではなかつた。いづれ考へて見ると言つた。昨夜は昨夜で、男の機嫌を取るために女は全力を盡した。情をも見せた。しかしそれが男の喜悅とはならずに、悲哀となつた。かれはそこに人間の冷やかさと薄情とを感じた。どうせ駄目なものであるといふことを痛感した。此方でばかりで思つてゐたとて――力にしてゐたとて、いざとなれば、皆向うに遠ざかつて行つて了ふのであることを痛感した。かれは誰も人のゐないさびしい曠野に唯ひとり立つてゐるやうな氣がした。

かれはいつものやうに、村上から鹽野町まで行く乘合馬車を呼留めて乘つた。馬車には知つてゐる顏が二人ほど乘つてゐた。『おや、北中の旦那？　今、歸りか？』その一人は村上の吳服問屋の爺であつたが、かう言つて馴々しく聲をかけた。他の一人は狹斜街で多少かれのことを知つてゐる貞といふ男であつた。

『此頃はしばらくお目にかゝりませんでしたな――』

かう吳服屋の爺は言つた。

『ヤー』

『ちつともいらつしやいませんではありませんか？』

これは貞といふ男だ。

『ヤーもう村上に來る用事もないでな』

『そんなことは御座いますまい――』

『いや――』

何方かと言へば、話し好きで、人に逢つたりすると、此方の方から餘計に話かけるといふ風であつたが、今日は何うしてもさういふ氣にはなれなかつた。わるい男に逢つたとも思はなかつたけれども、何となく貞と話をするのが億劫なやうな氣がした。それを知らずに、貞は頻に話かけた。そんな話を持出さなくつても好いといふやうな內輪の話まで話かけた。

貞の話では、此頃の村上の狹斜街の景氣は大したもので、抱妓が一月に二三百圓かせぐのは何でもないから、金の二三千も出して、抱妓の三四人も置けば、忽ち大きな金儲けが出來るなどと話した。それとはつきりは言はないけれども、女の內に置いてある抱妓も非常によく賣れるといふことであつた。しかし、そんな話にも、かれは相槌を打たうとはしなかつた。

いかにも悄氣切つてゐるので、

『何うかなさいましたか？』

『いや――』

『でも、今日はいつもと違つて、何か考へてゐらつしやるやうだから――』

『いや、そんなこともないが――』長兵衛は益々孤獨のひしと身に迫つて來るのを感じた。かうした男にまで自分は馬鹿にされてゐるやうな氣がした。

馬車は凸凹した路を頻に動搖しながら走つた。御者臺に近いところにゐた客は、頻りに村上鹽野町間の自動車の話を御者としてゐたが、『さうか、二臺ともパンクしちやつた……。そいつは困つたな？　何しろ、この路では、自動車も好いが、あぶなくつて乘つてゐられねえでな……』などと言つた。

六八

『さう言へば、Sでは、また同盟罷工が起つてゐるッていふぢやねえか？』

『鑛山けえ？』

『さうよ……。何でも、今度は大分大袈裟だッていふ話だよ。村上からも、巡査が行つたぜ！』

『矢張、あそこも此方の管轄になつてゐますかな？』吳服屋の爺はかう傍から口を挿れた。

『いや、大部分は山形縣ですけども』かう言つて客は此方を向いて、『南の方の坑が少し新潟縣の方にかゝつてゐますでな……。何でも五六十名は行つたやうですよ』

『今朝ですか？』

貞も傍から訊いた。

『さうです、さつき、警察の前を通ると、大勢出かけるところだつたから、何處へ行くッて言つたら、その話でした――』

『さうさう、そんなことを言つてゐたな』かう御者も合せた。

『また血を見ねえぢや治まるめい？』

『さア――』

『何うしてあゝだかな、あそこは？　今度は大分好ささうだつたがな？　社長の評判もよかつたがな？』

『あの山はあれで儲かる山だでな』客は說明するやうに、『損をする山でもいけねえが、儲かる山でもいけねえ……。あれで、あの鑛山、思ひの外好い石が出るで、資本家達は福々だアな。それを、勞働者側でもよく知つてゐるで、それで、默つてゐねえだよ』

『さうかな、あの山、儲かりヤすかな？』吳服屋の爺はいくらか疑問を挾んだやうにして言つて、『北

中の旦那なんか、よく知つてゐるでせうな？』

『いや、何にも知らねえ』長兵衛はそれどころではなかつた。

『何でも巡査達の話では』客はまたつゞけた。『大分、わるくなつてゐるらしいぜ！　新發田の大隊に出動を命ずることになりはしないかなんて言つてゐたよ。まさか、それほどまでにもならないだらうけれども、容易には鎭まりさうにもないッていふことだつた……。庄内の方からも、巡査は澤山に入つて行つたつていふこんだ』

『騒いだッて、しやうがねえ！　その間に捗いだ方が好かんべいにな？』御者は鞭を馬に加へながら言つた。馬は一散に走り出した。

『何うも、あゝいふことも流行もんでな……。何うもしやうがねえ！　わるく煽動するものが東京からドシ〴〵入り込んで來るッていふでないか？』吳服屋の爺が言ふと、客はそれに反對の意見を持つてゐるらしく、

『でもな、大分、さういふ氣分になつて來ただよ。現に鑛山ばかりぢやねえ。小作と地主の中などでも、段々さういふことになつて來たぜ！　しかし、好いこんだよ。さういふ風に下のものが目がさめて來るといふことは？　今まで、あんまり金持が贅澤をやつてゐただで……。これからは、金持も樂ぢやねえでな？』

『本當だ！』

後の方にゐる車掌が應じた。しかし貞も、吳服屋の爺も、長兵衛も皆な默り合つてゐた。（さういふことに心を集めてゐるものはまだ仕合せだ。兎に角、まだ絶望はしてゐない。何うかして好い世の中にしたいと思つてゐる！　それに比べたなら、自分のこの絶望は？　孤獨は？　寂しさは？）長兵衛はかう思つてじつとしてゐた。馬車は長い橋へとかゝつて行つた。古い板橋はガタガタと鳴つて軋つた。

六九

默つて聞いてゐた長兵衛には、S鑛山の騒動がはつきりと見えた。またあの悲慘な狀態が繰返されてゐるのであらう。食ふものもなしに、皆な一ところに集つて騒いでゐるのであらう。あの山道をあの群集がまた集つて通つて行つてゐるのだらう。かう思ふと、何うして、かう人間の世の中には、悲しい、辛いことが多いのだらうと思はれた。いつそ死んで了つた方が好いといふやうな氣がした。

かれはもう四十七だ。これまでにもかれはいろいろな境涯を經て來てゐる。本當にいろいろな境涯で、自分でも詳しく思ひ出すことは出來ないくらゐである。そこには辛いこともあれば、あさましいこともあつた。何うして切りぬけて來たかと思ふやうなこともあつた。しかし、昨日まではそれが何等かの意味を持つてかれの前にあらはれて來てゐた。闘爭も唯あるがためにするばかりではないと思つて來

た。終極のある點に達するためのあるあらはれであると思つて來た。そのため、忍耐も出來た。辛抱も出來た。苦しいのをも苦しいと思はずに經過して來ることが出來た。しかし今は最早さう思ふことは出來なくなつた。何も彼もゼロだ。何も彼も空だ。何も彼も虛無だ……。しかしさうかと言つて、さういふ風に考へたからと言つて、それに對して一種の反抗を感ずるでもなかつた。灰色に似た絶望が全くかれの魂を包んで了つた。いつもなら、そのSの鑛山の話をきけば、『困つたもんだな——』とか、『資本家達がわるいんだ……もう少し勞働者を劬つてやらなければならないのだ——』とか言つて、何等か話の相槌を打つのが例であるのに、今日はさういふ心持にすらなることは出來なかつた。唯、何方が好いんだかわるいんだかわからなかつたけれども、さうした悲慘な事實がこの世にあるといふことだけが——それだけがかれに深い一種の絶望を誘つた。何も彼も、長い橋も、美しい川水も、遠くの方にかゞやく午後の日の光りも、村落も、街道も、松並木も、すべて悲慘な影を帶びてゐるやうな氣がした。

吳服屋の爺は訊いた。

『葡萄のTさんは、此頃、お宅にゐやしやうか？』

『ゐるべ……』

素氣なく長兵衞は答へた。

『此間、溫海の方へ行つてゐるつていふ話だつたが、もう歸りやしたな？』

『とうに歸つた——』

『ぢや、ひとつ近い中に行つて見なけりやなんねえ』

『何か儲け口かね？』

貞が口を挿れた。

『いんにや——この頃はもう儲け口なんかありやしねえ。かう不景氣ぢや、こちとらもストライキでもおつぱじめなけりやならない位だが、ストライキをやつたつて、矢張、旨い儲も出て來ねえでな！』

爺はこんなことを言つて、齒を出して、のんきに笑つた。

鹽野町はやがて見え出して來た。と、五六年前の雪の日に、收稅吏の加藤と一緒に此處にやつて來た時のことが長兵衞には歷々として思ひ出されて來た。それにしても、あの男は何うしたか？　あの後、村上にも新潟にも留つてゐずに、あのまゝ東京に出て行つたと言ふが今は何うしてゐるか？　もう立派になつてゐるか？　それともまた何處かで同じ樣な收稅吏をやつてゐるか？

七〇

更にその消息は知らぬけれど、今では豪くなつてゐるに相違ないやうに思はれた。或ひは高官になつて、何不足なく暮してゐるのではないか。または贅澤な生活をしてあの頃には知らなかつた歡樂の巷に

も浸つてゐるのではないか。否、さういふことはないにしても、自分とは違つて、生きた人生の渦の中に生效ある生活を送つてゐるに相違ないやうな氣がした。徒らに年月は過ぎ去つた。あの時分に決心して、東京にでも出かけて行く氣力を持つてゐたならば、假令思つたやうに成功することは出來ないにしても、今のやうな消極的な、さびしい、腐つた心の境涯には落ちることはなかつたであらうに……。しかし今はもう遲い、あまりに遲い、何うにもならない、思ふだけ徒勞である。かうかれは考へた。

あの時から比べると、其身も老いた。世の中もいつ變るともなく變つて行きつゝあつた。現にこの鹽野町などでも外形は變つてゐないけれども、矢張同じやうに町のところどころに畠があつたり、空地があつたり、林があつたりするけれども、しかも內部は種々な變遷があるのであつた。あの時分の町長――かれと遊び友達であつた町長は死んだ。警察署長は丸で知らない若い人になつた。否、町でも一番勢力家であつた野村傳兵衞も死んでそして旣にその子息の時代となつた。かれがいつも泊つたり何かする宿屋でも、勝氣の婆さんは死んで、その頃はまだ來たばかりであつた赤い根掛けの若い細君の指揮のもとに一家が動くやうになつた。

何も彼も流れ去つた。流れてゐるとは見えずにいつとなしに流れ去つた。知らない間に流れ去つた。そして飜つて見ると、元の岸はもう元の岸ではなく、自分も矢張遠く流されて來てゐるのであつた。それを思ふと、かれは眼の前がひとり手に暗くなつて行くやうな氣がした。

氣が附くと、馬車はその宿屋の前に來てゐた。吳服屋の爺も、貞公も、客も皆下りた。かれはこの町にちよつと用事があるので、都合に依つたら一夜泊つて行つても好いと思ひながら、おそくなつた晝飯を食ふつもりで二階に上つた。と、そこに上から下りて來る若い上さんとぱつたり顏を合はせた。

『おや、北中の旦那！』

かう若い上さんは挨拶した。

『大將ゐるかね？』

『今日はちよつと村上に行つてゐますてな――』

『昨夜歸らなかつたかね？』

『え……』

若い上さんは笑つて下りて行つた。

いつも通される六疊の一室――そこからは、下に松だの石燈籠だのある中庭が見えてゐたが、不思議にも、さつきの收稅吏の加藤のことがまた思ひ出されて來てゐた。あの時もこの一室だつた。こゝで一緒に酒など酌み交した。いろいろ戲談などを言つた。今でもはつきりと覺えてゐる――かれはその時、『だつて、君なんかまだ若い。これからだ。世間にはいろいろなことがある。君などはいくら考へて困つたところで、考へきれないことが澤山にある。ぴつくりするやうなことがある……。人間といふものは、

心の持方に由つて、何うなるかわからんもんだでな……本當に何うなるかわからん？』かう醉つて言つたことを忘れはしなかつた。何も彼も流れた。いち早く流れ去つた。かれは默然としてそこに坐つた。

七一

かれはその日、そこに出て來た女中とこんな話しをした。

『いつも來て世話になるね？』

『いゝえ……』

『もうしかし、これからは、さう度々やつて來ないかも知れねえな？』

『何うしてだな？』

女中はちよつと顔を擧げて長兵衞を見た。

『何うしてッて言ふこともねえが――わけッていふこともねえがな？　もう、今までのやうには來ねえかも知れねい……』

『そんなこと言はねえで、いつも來て泊つて下さいな』

『お前さ、隨分、長くゐるな？　此處に？　もう十年になるな？』長兵衞はお元と呼ばれた今年三十一になる女中頭をじつと見詰めて、『よくあきねえな……。何しろ、おらが村上に來始める時分からゐるんだからな？　よくあきねえな……』

『あきたッて何うしたッて、しやうがねえぢやないの？　誰も世話して呉れるものはねえだでな？此處にくつついてゐるより他しやうがねえだよ』

『あの頃はまだ若かつた……二十ぐらゐだッたでな？』

『旦那だッて、さうだつたよ。元氣だつたな？　あの頃は？　戯談べい言つてゐて、からかつて、しやうがねえ旦那だと思つたがな？』

『あの猿屋の男は、何うしたね？』

と、お元は唾棄するやうな調子で、

『あんなもの……？』

『だつて、一時は隨分深くなつてゐたぢやないか？』

『ほんの一時せ――』突放すやうにお元は笑つた。

『捨てられたんか？』

『捨てたんだよ――』

『まア、それは何方でも好いが、矢張、男に苦勞してゐるんだね？』

『旦那だッて、さうだんべ？　おら、きいたから、よく知つてる！　旦那のやうな親切な男はねえん

だッて言ふから！――』

『……』

長兵衛は痛いところに觸られたやうに、そのまゝ默つて了つた。暫くしてから話をかへて、

『今度の若い上さんは何うだね？　やさしいかね？』

『これ？』小指を出して見せて、

『やさしいどころか？　何にもわかりやしねえでな？　大きなお上さんが生きてゐる時分の方が、何んなに好かつたか知れやしねえよ』

『それに、若旦那はおとなしくしてゐるかね？』

『何うして――何うして』お元は否定するやうにして、『今日だつて、村上に行つてゐやしねえ！――』

『深間が出來たんか？』

『何うだか？……そんなことは旦那なんかの方が詳しく知つてゐべいな？』

『何故？』

『何故ッて？　今日だッて、旦那は村上から歸つて來たんでねえか？』

『でも、毎日のやうに、村上に行つてゐるといふんでもないんだらう？』

『若旦那かね？』

『さうせ……。時々出かけて行くくらゐなもんだらう？』

『でも、此頃は隨分度々出かけて行くやうだな？　お上さん、ひとりでゐることが多いやうだ――』

『やくかね？』

『お上さんけえ……？　それは女だから、妬くにはきまつてゐるけど――』お元はかう言つて言葉をやめた。

七二

『矢張あゝいふところは面白いと見えるだな？』

笑ひながらお元は言つた。

『それは何うしたッてさうだな……。でも若い中だ……』

『もう、旦那なんか面白くねえかな？』

『いつまでやつたッて同じことだでな……。際限がないだで、いくら此方で情を見せたところで、それが向うには通じない。本當に通じない。本當に通じないでな？』

『そんなことはあんめいに？』

『いや本當だ……。それは、おらがやつて來たことだからうそはねえ。本當のことだ』

『さうかなア』

お元は深く感じたやうにして、

『ぢや、いくら此方で本當の心を見せても、向うには通じないッて言ふのかねえ？』

『さうだ――ほかの人も皆なさうだらう？　少くとも、おらはさうだつた……』

『さうかな。それぢや、おらばかりぢやないかな』

思はずかう自分を顧みるといふやうにしてお元は言つた。

『お前もさういふことがあつたのかね？』

『あつたとも』思ひ出したやうに『さうかな？　それぢや男でも、女でも、いくら眞心をつくしてもそれが向うには通らねえんだな？』

『通るものもあるかもしれねえ、しかしおら駄目だつた』

『そんなことはねえだらう？』

『いや本當だ……。おら、今日といふ今日はつくづく失望した。もうおら、山の中に歸つてひとりぼつちでゐるなけりやならねえだよ』

『でも――』

『いや、おらは、そのまさかにほだされて、一度は此方の心が通ずることがあるだらう。何んなに無

情なものでも、兎に角、同じ人間だ。同じ血が流れてゐるのだ。かう思つて、おら、眞心をつくしただアよ。この身の及ぶだけの眞心をつくしただアよ。でも無駄だつた。何うにもならなかつた――お前さ、よくきいて呉れ、かういふおらのやうな人間は、この世の中に生きてる效もないだで、な、な、さうは思はねえか？　お前さは……？』いつもに似合はず心細さうにかう言つて、そして眼に一杯涙をためてゐるのをお元は見た。

『そんなことはねえけど――』

『まア、これでおしまひだ……。おらがこゝに來るのも、今日きりだんべ？　長い間世話をかけた？』

『何うして、そんなことを言ふだ』

『だつて、本當なんだもの。放蕩もののおしまひな、皆かうだ。かう云つてゐるにきまつてゐるのだな。お前さ、お前さんもよく見ておいて、男をだまさねえやうにしなせい。女にだまされた男ぐれる慘めなものはないだでな？　そら、このおら見ていなもんだで』盃を取つて、一杯ぐつと呷つて、『好い見せしめだな？』

『旦那、何うかしてるな？　今日は？』

『何うもしてねえ、いつもと同じことだ……矢張、北中の長兵衛だ……。女のために人からはうつけものと言はれ、馬鹿と言はれ、阿呆と言はれ、果は狂人と言はれた北中の長兵衛だよ……。放蕩者は、

皆かうなつて了ふだよ。目がさめた時にはもう何うにもならなくなつてゐるだ』

七三

『まア、そんなことを言ふもんぢやありませんよ』

『でも、本當だ……』

『だつて、旦那は村上では豪い方だつて言はれてゐるつていふぢやありませんか？』

『豪い方だか、何だかわかつたもんぢやない……。もう、これからは山の中に入つたきり出て來ないんだ！』

『まア、そんなことを言はずに……』お元は酌をした。

『さう言へば、こゝの若旦那はいくつになる？』

『もう三十二か三でせう？』

『これからだな、辛い世の中のことがわかつて來るのは？』ふと考へて、『村上では何處で遊ぶんだね？』

『知りませんよ』

『そんなことはないんだらう？　知つてゐるんだらう？』

『私なんか知るわけがないぢやありませんか？』

その時、奥で「元ちやん！』と呼ぶ聲がしたので、お元はそのまゝ下に下りて行つた。

下には若い上さんが焦燥してゐた。

『何うしたんだえ？　お前？』

『だつて、北中の旦那が何うしても放さないんですもの……』

『いくら放さないつて、此方にだつて用があるぢやないか？　六番に御膳を出したかえ？』

お元はそのまゝそつちへ行つた。

それから暫く經つた。六番の夕飯も出せば、十一番の酒の相手もした。やがて下りて來ると、そこにお若といふ若い此間來たばかりの女中がゐて、

『姐さ……』

『何だね？　お前？』

『だつて、二階の三番のお客さん怖いんだもの——』

『三番？』

『さう——肥つた、鬚の生えた？』

『北中の旦那？』

『さうでせう？　屹度……、姐さんを呼んでお出でッて、何うしても言ふことをきかないんだもの——』

『醉つてゐて？』

『あ、隨分、醉つてゐるらしい……』

『困つたのね……？　今日は、北中の旦那、餘程何うかしてるのよ』

『姐さ、行つて頂戴！』

『私だッて、用があらアね。これから八番の御飯になるんだもの……。放つて置けば好い』

で、帳場に來ると、若い上さんは、

『何うかしたの？』

『いゝえ、何でもないんですよ。何か、きつと、村上の馴染と喧嘩でもして來たんですよ。いやに、沈んで考へ込んでゐたんですけれどもね……？』

『おとなしい旦那なのにね、いつもは——』

『何アに、放つて置けば好いんですよ。その中、寢て了ひますよ』

しかし二階の三番からは、頻りに手の鳴る音がした。醉つて管を卷いてゐるらしく、頻りに何か言つてゐる氣勢がした。そしてその呼聲は絶えてはまた續いた。

『姐さ、行つて下さいよ』

『しやうがないね、本當に……。ぢや、お前さ、八番の方を見てお呉れ——好いかえ？』かう言つてお元は二階へと上つて行つた。やがて室に入つたかの女の眼には、いたく醉つて半ば疊の上に倒れかけてゐる長兵衛の姿が映つた。

その三

一

今はおそらく、以前の葡萄のさまはいくらも殘つてゐないであらう。葡萄の驛舍も、北中の村落もすつかり零落して了つたから。もう、もとの面影は見たくも見られなくなつて了つたから——夫に、あの同盟罷業で喧しかつたあのS鑛山が、すつかり廢滅して了つたことがこの近所での大きな事實だ。つまり資本家側も勞働者側も互に鎬を削りすぎたので、それで共倒れになつて了つたのであつた。今はそこに行く路すらもなくなつて了つた。すつかりもとの草藪になつて了つた。何でも今から五年ほど前にそこを訪問したものがあつて、その人の話しであつたが、もうすつかり廢坑になつて了つてゐたといふことであつた。その人は話した。『いや、もう、すつかり駄目でさ——。何しろ、あの大きな路、車でも何でも通つた路がすつかり草藪になつて、まごまごすると分らなくなつて了ふんですからな……。それにしても、びつくりしましたよ。人間の努力なんて、何でもないもんですね。小さなもんですね。どんなに立派に築き上げたものでも、三年放つて置けば、全く元の自然に——草藪になつて了ふもんですね？　そら、あそこに事務所がありましたね。あそこらは夫でもまだいくらか原形を存してゐる方でけれども、それでも草が一杯に人の肩をかくすくらゐに繁つてゐました……。あそこの建物ですか。それは皆なその時燒けて了つたんでせう？　そんなものは一つも殘つてゐはしませんでした。それから西坑の方に行つて見ましたが、それでも坑のあとは殘つてゐますね。それから、坑の出口のところに、小さな長屋が二軒殘つてゐました。それから、あの社長達の殺されたところにも行つて見ました。あそこには碑が立つてゐるが、あれも、もう五六年もあのまゝ放つて置けば、屹度倒れて地に委して了ひますな……。あそこに行つて、つくづく人間變遷の早いのに感じましたよ……。何だか、かうしてうかうかと暮してはゐられないやうな氣がしましたよ……』かう感慨深くその人は話したが、それからまた五年の月日は經つて行つたのであつた。もう今では鑛山の話をするものすら滅多にはないといふやうになつて了つた。

それからまた長い年月が經つた。その間には、種々な事件が起り、多くの人達が死に、變遷が變遷に續き、推移が推移に續いた。日に日に新しい墓が築かれて行つた。『かうして人間の世は經つて行つて了ふのだな？　善いも惡いも、悲しいことも喜ばしいことも、一度すぎ去つて了つては、あとには何も殘さなくなつて了ふのだな？』かうした慨嘆が一方で繰返されると同時に、一方では、『何アに、何だッて構ふものか、何うせ、死んだことには何もないのだ！　何も殘らないのだ！』かういふヤケに近い言葉も取交された。しかし時の移つて行くさまは、さうしたものよりは大きく且つ力づよかつた。皆な經過

して行つて了つた。

その中には、いろいろな心があつたらう。戀の未練もあつたらう。親子の愛情の絆もあつたらう。志を齎して死んで行く悲しさもあつたらう。不慮の災禍にぽつくり死んで行つたものもあるだらう。さうかと思ふと、死ぬにも死ねず、生きるにも生きられず、全く地獄のやうな一生を送つたものもあつたらう。それは實に、千變萬化であつたに相違なかつた。しかし、さうしたものも、何も彼もすぎ去つた。山の外に流れ去る溪流と共にとこしへに過ぎ去つた。

二

從つて北中から海岸の勝木に出る路――S鑛山からのトロッコやら山奥から木材を運び出すためのレイルやらを持つてゐた路も、すつかり荒廢して了つた。今では人通りも滅多にないばかりか、草が到るところに繁つて、その跡さへもはつきりとはわからなくなつた。そこを通る人達は皆な山裾についてゐる昔の細い道を傳つて行つた。

この十年の間に、葡萄峠の山の中の村落はすつかり衰へて了つた。汽車との連絡も今では十分とは言へず、居民も次第に離散して行つて、今はそこに一軒、かしこに一軒といふ風に細い煙を立てゝゐるやうな光景を呈した。『葡萄も北中も小國もすつかり駄目になつて了つたな！　それに今ぢやあそこに行かなけりやならねえ用事もなくなつた……。何うしてあゝ急に衰へて了つたか。矢張、汽車を寒川に取られて了つた爲めかな？　それを思ふと、あの時、村長をしてゐた長兵衛といふ男の豪かつたのがわかるな？　あれにもつと金力を擧げてやらせりやよかつたんだ……。惜しいことをした――』こんなことを他鄕の人達は言つた。

貞介ももう死んで了つた。長兵衛のあとに村長になつた分家の主人も、ある年の流行感冒が肺炎になつて、一週間目に死んで行つて了つた。肥つたNは、S鑛山の潰れた翌年に、たうとうこの土地に――とても見込のないこの土地に愛憎をつかして、田地家屋を賣拂つて、庄内の方へと出て行つたが、今では北海道の方に行つて、一廉の農夫になつてゐるといふことであつた。竹屋の婆もあの二三年後に村の墓地の中に埋められて了つた。

それでも何うかすると、竹屋のお駒の話が上さん達の口に上ることがないでもなかつた。雪の深く降り積つた夜などには、火燵の周圍に集つた上さん達の話の種となつた。『さうかや、そんなに好くなつつや……。運だな。あの娘ッて此處にゐれば、何うにもならねえだのになア……』

『本當だとも、今ぢや金も出來たつていふぢやねえか？』

『成金だとさ……。立派な家のお上さんだとさ。女中なんかも澤山にゐるんだッて――』

こんな話をした。しかもかれ等にはいつまでも運といふものは向いて來さうにも思はれなかつた。

唯、年月ばかりが經つた。さびしい艱難な年月ばかりが經つた。しかし、さうしてあとに殘つた人達は——いつまでも故郷の土にかじりついてゐる人達は、何方かと言へば、何にも出來ない、他郷に出ても何うすることも出來ないやうな人達であつた。兎にも角にも故郷にゐさへすれば、祖先からの土地を耕してゐさへすれば、困りながらも貧しい生活をしながらも、何うにか彼うにかその日その日を安らかに生きてゐられるといふやうな人達があとに殘つた。從つてかれ等は何の野心とても持つてゐなかつた。また、村の衰へて行くのを認めながらも、それについて別に恢復策を考へやうともしなかつた。かれ等は唯成るに任せた。衰へて行くものを、何うも爲方がないといふやうに、唯、自分達の田地を耕すことにのみ骨を折つた。實際、かれ等に取つてはさうして行くより他爲方がなかつたのであつた。今は若いものの酒を飲むやうな店とてもなかつた。若い者もあくせくと田や畠を耕した。

三

秋の終りの頃、庄内の方からこの山の中に入つて來た一人の旅客があつた。それは二三日前に官用があつて酒田にやつて來た中央政府の上官であつた。かれはそこで演説などをして三日を費した。かれは縣の屬官に訊いて見た。

『今は何うなつてゐます？　葡萄の山の中は？』

『さア、別に變つたことは御座いますまい……？』

『行つたことはありませんか？』

『もう十年も前です、行つたのは？　あそこも汽車に外れてから、すつかり衰へた山村になつて了ひました』

『もうあそこを通る旅客などもありますまいな？』

『何しろ、汽車で通つて了ひますからな。それもS鑛山がある中はそこまで入つて行くものも少しはありましたけれども、あの山も潰れて了ひましたからな……』

『さうですか、あの山もすつかり駄目になつて了ひましたか？』

『え、もう、やめてから、七八年になります——』

『それぢや、あの山の中もすつかり衰へて了つたわけですな！』

感慨深いやうに、かうその東京から來た上官は言つた。

縣の屬官は訊いた。

『貴方はあんな山の中を御存じですか？』

『え……』

上官は笑つた。

『いらしつたことが御座いますか？』

『さう――もう二十年にもなりますな。あそこで大雪に逢つて三日も四日も出て來ることが出來ないで困つたことがありました！』

『さやうですか。それではよく御存じですな――。何しろ、あそこは有名な雪の多いところですから――』

『歸りは、出來るなら、あそこを通つて行つて見たいと思ふんですけども――』

『汽車で勝木まで行つて、あれから入れば、わけはありませんな？』

『いや、さうでなしに……』上官は打消すやうにして、『庄内から溫海の方を通つて歩いて行つて見たいと思ふんですが、路はそんなにひどくはありますまい？』

『さア――』

縣の屬官もはつきりとはその返事が出來なかつた。『もう一人、Yと言つて、そつちの方のことに詳しいものがありましたが、それがゐれば、お伴させて好いので御座いますけども、此間、大島池の方へ出張するッて申してをりましたから、何う致しましたか。ゐますか、何うしましたか』こんなことをその屬官は言つたが、それでもいざ、本當にその山の中に入つて行くといふことになると、別な屬官ではあつたけれども、湯田川から溫海の方までわざわざ見送に出て來て呉れた。しかしかれは、成るだけさういふ款待からも離れたいと思つた。かれはもつと送つて行くからといふのを强ゐて辭した。

『これから先は、ひとりでゆつくり歩いて見たいんですから――自分ひとりで、つまりは昔の書生になつたつもりで歩いて見たいんですから』かう言つて、郡の境まで來て貰つてそして別れた。かれはひとりになつて始めてほつとした。昔にかへつたやうな氣がした。かれは峠から峠へとつゞいたやうな路を、または谷から谷へと添つて廻つて行つてゐるやうな路を靜かに歩いた。

四

それは久しい前に其處にやつて來て、一週間も雪にふりこめられた收稅吏の加藤であつた。かれはあれから東京に出て行つたことや、伯父の世話で高等の學校に入ることが出來て、それから次第に新しい立身出世の道が開けて行つたことや、今では農商務の好いところに勤めてゐて、豐かに生活してゐることや、其他いろいろなことを思ひ起した。かれの頭髪は既に半ば白く、年は五十に近くなつてゐた。

世の中といふものは不思議なものだ。何も彼も時といふものの中に沒して行つて了つた。艱難も、悲劇も――とてもこのまゝでは生きてゐられないやうに思つたほどの悲劇も、經つて行つて了つて見れば、何でもないものだッた。夢見たいなものだッた。何うしてあんなに辛く悲しく思つたらうと思ふやうなものだッた。かれは二度も三度も自から死んで了はうと思つたことがあつたことを思ひ起した。し

かし、あの時死ななかつたがために、かうして生きてゐて、再びこの山の中にやつて來ることが出來た。かう思ふと、何となく嬉しかつた。兎に角かれは長い人生をこれまで無事に通つて來たのであつた。

かれはいろいろなものを見た。またいろいろなことを經驗した。恐ろしい惡魔に出逢つたこともあれば、ひとり手に頭の下がるやうな神に出逢つたこともあつた。欲といふものゝ恐ろしいことも知れば、罪のないものの理由なしに虐げられることをも知つた。實際、かれの通つて來た世間は雜多紛々であつた。善いもわるいもなかつた。また場合に由つては、何れが善いのか、何れがわるいのか全く判斷に苦しむやうなことがあつた。またかれは隅の方に引込んでゐないがために――出しやばつて行つたがために殞さなくも好い命を殞した人達を見た。また、かれは何の理由もなしに、一かたまりに運命の柵に繫がれて、そして慘めに死んで行つた人達を見た。實際、世間は綱渡りであつた。危ない綱渡りであつた。その綱が切れれば、否、その綱が切れなくともその細い綱から足を滑らせれば、忽ち深い深い谷底に墜ちて了はなければならないのであつた。かれは靜かに歩きながら思つた。(よくそれでも自分は此處までやつて來た。落ちもせずにやつて來た。もうその綱の三分の二は何うやら彼うやらわたつて來た。あとは一分だけしか殘つてゐない。それに、この殘つた一分は前の二分よりももつとぐつと渡り好い。もうわけなく渡れるであらう。無難にわたれるであらう?)こんなことを考へながらかれは歩いた。

(たとへて見れば、今は人生の行路にちよつと立つて休んでゐるやうなものだ……。暫しそのつらい世間、混雜した世間、脅威の多い世間、危險の多い世間から離れた。それは丁度川の水がしばし淀んでそしてさゝやかな音を立てゝゐるやうなものである……。そのさゝやかな音の靜けさ！　美しさ！)それは自分の脚の下に美しい谷川の日に輝いて流れてゐるのを目にした。

(あれだ！　あれだ！　あの美しい靜な谷川だ！　自分の今のこの心は、この心の境涯は?)

こんなことを思ひながら、加藤はじつとそこに立盡した。もはやそこは深い山の中だッた。路は細く折れ曲つて峠の方へとついて行つてゐた。

五

峠まで行く路もひどく荒れてゐた。昔歩いた時には、木材を載せた車力が何臺も連なつて通つたり、庄内から村上の方へ出て行く旅客が着莫蓙を動かして通つて行つたりしたものだが、今はさうしたさまは何處にも見出すことが出來なかつた。路には草が生え、ところどころ穴になつてゐるやうなところがあり、ある場所などは、路が半分絶壁に落ち込んで崩れてゐるところなどがあつた。(すつかり荒れて了つたな！)かうかれも思はずにゐられなかつた。

これでは峠の茶屋――かれがいつでも眼の前に描き出して想像してゐたそのなつかしい峠の茶屋もあ

るかないかわからなかつた。十に八九はなささうに思はれた。それにしても思ひ出されるのは、その時分のことであつた。かれはそこを何遍となく通つた。春にも越えれば、夏にも越えた。そこには莞爾した婆さんと爺さんとがゐた。いかにも仲が好ささうだッた。小さな七歳ばかりの男の兒の孫がゐて、それが老いた二人の此世での唯一の樂みであるやうに見えた。そしてその孫の父母は老夫婦のとめるのをもきかず、世間並の空想と希望とを抱いて東京へと出て行つてゐるといふことであつた。『なアに、これせい、大きくなりや、息子や嫁は歸つて來なくつたッて好いだよ。ちつとべいある田地は、これに讓るでな！』こんなことを言つてその婆さんは樂さうに笑つた。その男の兒も、かれが休んで、茶を飲んで、谷から雲の卷き起つたりするのを眺めてゐると、傍にやつて來て、そこに置いてある鞄だの、ステッキだのを物珍らしさうに眺めたり、また時には、何か物の言ひたげに其處に立つて此方を見てゐたりした。田舍育ちで、汚ない子だッたけれども、それでも眼のぱつちりした愛らしい子だッた。ある時は、『おぢさんと東京に行かうか。父がゐるぜ！』ついこんなことを言ふともなしに言つた。いかにもめづらしさうに――東京とは何んなところだらうといふやうに、眼を光らしてじつと此方を見詰めた。しかしあとで婆さんに言はれた。何うか、東京に行かないか？　といふことだけは言つて下さるなと返す返すも言はれた。それにしてもあの時分はのんきだつた。まだ妻もなかつた、子もなかつた、家庭もなかつた。『加藤君は獨身だから、旅に出てゐたッて好いぢやないか？　な、賴むから今年も葡萄に行つて呉

れ！』かう同僚から賴まれて、そしてそれを別に厭とも思はず、却つて旅が出來るのが面白いといふやうにしてこの山の中に入つて來た。それはまだ昨日のやうに思つてゐるのに――。

あの時、婆さんは六十ぐらゐだッた。あれから二十年――長いには長い年月であつたけれども、ことに由れば、あの婆さんはまだ生きてゐるかも知れなかつた。爺さんの方はとてもむづかしかつたけれども、婆さんはまだ八十になつたかならないくらゐであるから、ひよつとすれば生きてゐる。そしてあの孫が二十七八になつてゐる。そしてもう若い上さんが出來てゐる。派手ではなくとも赤い手絡などを大きな丸髷にかけてゐる……。さうした峠の茶屋の光景をかれは何遍頭の中に描いて見たか知れなかつた。もう行つて名告つて見たところで、忘れてゐるに相違ないと思つたけれども、それでもかれにはその峠の茶屋がなつかしかつた。しかし、今はあるか、何うか？　こんなに荒れて了つては？　こんなに人通りも何もなくなつて了つては？

六

果してかれの思つた通りであつた。峠には何もなかつた。

かれは唯そこに草の深く繁つてゐるのを見た。篠竹の低い藪を成してゐるのを見た。松の生えてゐるのを見た。もし、そこに、小高いところがなかつたならば――山畠の跡のやうなところがなかつたなら

ば、かれはその峠の茶屋のあつたところをすら完全に見出すことが出來なかつたであらう。かれは何とも言はれない氣がした。そこに行つてかれの立つた時には、下の叢からバタバタとけたゝましい羽音がして雉子が飛び出して行つた。

そこから見た眺めは、しかし元のまゝであつた。山の形も、水の流れもすべてそのまゝであつた。人事がいかに移り替はつて行かうとも、また時がいかに多くの人間の生きたあとを土に埋めて經つて行かうとも、そんなことには頓着せずに、全く頓着せずに、ひとりさびしくそこに聳えたり流れたりしてゐるのであつた。かれはじつと立盡した。かれは年少で、頰が紅に、情熱にもえて、そこに立つてゐたのは、まだ昨日のやうな氣がしてゐるのに、その間に既に二十年の月日が經たうとは？　さうした希望も戀も功名も何も彼もなくなつて、頭髪は半ばは白く、かうしてこゝに立つてゐやうとは？　かれは刹那卽ち永遠――永遠卽ち刹那といふ氣持をまざまざとそこに見出したやうな氣がした。

かれは暫し立つて眺めてから、そこらをあちこちと歩き出した。かれは何うかして茶屋のあつたあたり、婆さんの腰を曲げて火を燃してゐた土竈のあたりをそのまゝさがし出したいと思つたのであつた。しかし草が深く、藪が人の肩の上までも延びてゐるので、その望みは容易に達せられやうとも思へなかつた。大抵、そこいらといふあたりで滿足しなければならなかつた。

かれは少くともそこに三四十分はゐたであらう。日の光の美しく溪流にかゞやくのを眺め、山の谷合

から雲の團をなして浮き上るのを眺め、遠くを通つて行く荷車の音のあたりに響くのを聞きながら――。しかし、それも際限がなかつた。いつまで立つてゐても際限がなかつた。これがもし、婆さんでも生きてゐたといふのならば――否、婆さんでなくとも、その幼なかつた孫でも生きてゐるといふならば、話も盡きずにあつたであらうけれども、二十年の年月を互に心置きなく話したであらうけれども、跡では？　跡ばかりでは？

かれはやがてそこを下りて行つた。

そこを下りてからのかれの希望は、誰か逢ふものがあつたならば、女であらうが男であらうが、一番先にその峠の茶屋のことをきいて見やうといふことであつた。兎に角に、その老夫婦のことが知りたかつた。その孫のことが知りたかつた。その峠の茶屋の荒廢した歷史が知りたかつた。

しかし暫く來ても、かれは誰にも逢はなかつた。唯、草藪と凸凹した路とが續いた。山畠さへ容易にあらはれて來なかつた。(こゝらは皆な畠だつた筈だがな……それとも覺え違ひかしら？　たしかに麥や何かの畠になつてゐたと思ふがな！)こんなことを思ひながら、かれは藪の中や、低い穉樹の林の中を歩いて行つた。ひよつくり林の中で向うから馬を引いて來る男に出逢つた。

かれは近寄つて行つた。そして訊いた。

『變なことをきくけども……此處等はこれで荒れちやつたのかね？』

七

『さうだな、えらく荒れたな！』訊かれた男は、じろじろとかれの方を見て、何遍も見て、『お前さ、此處等の衆ぢやねえやうだな？』

『さうだ、こゝらのものぢやないが――何うしてこんなに荒れたんだね？　丸で昔とは違つちやつたが――』

『何處だね？　お前さ？』

『東京だがね……？　一度、もう餘程前に、此處に來たことがあるんだ……』

『東京かねえ？　東京から來たんかね？』單にその東京といふことがめづらしいといふやうにかうたまげたやうに言つて、そしてまたじろじろとかれの方を見た。

『何うして、かうひどくなつて了つたんだね？』

『さアな』

男にはその返事は出來なかつた。

『この峠の上に、爺さん婆さんのゐる茶屋があつたつけが、いつそれはなくなつたね？』

『さアな』

その返事も出來なかつた。

『お前、知らないのかね？』

『知んねえな……。その峠の上さ茶屋があつたッていふのけえ？』

『お前、この近所のものではないのかね？』

『いや、このぢき下のもんだけども……』

『それぢや知らないわけはないがな？　爺さんと婆さんとが孫と一緒に茶屋を出してゐた……』

『いつのこんだな？　それは？』

『もう昔には昔だ……』加藤は思ひ出したやうにして、『もう二十年も前のことだけども！』

『二十年！　それぢや、おら、知らねえわけだ……。おら、こゝに來てから、まだ八年しきやなんねえでな……』

『お、それぢや、昔から此處にゐるんぢやないのか？　八年前に、何處からか此處に移住して來たのかえ？』それでわかつたといふやうにして加藤は頭を振つた。まだ昨日のやうにしか思つてゐないのに、もう峠の茶屋の時代は、遠くに遠くになつて了つてゐるのであつた。浦島が子でもあるやうな氣がした。

つれになつた男は、かれと一緒に暫くの間歩いて行つた。

かれは問うた。

『ぢや、村のことは、詳しく知つてはゐないんだね？』

『知らねえな――おらが此處に來ない前のことは？』

『何處から移住して來たんだね？』

『おらか？』

加藤の方をもう一度じろじろと見て、『おらはS鑛山で働いてゐたものだがな……』

『あの鑛山は何うしたね？』罷業騷ぎの後暴動が起つて、社長が殺されたことなどは新聞で知つてゐたが、そのあとのことについては、加藤はまだ知らなかつた。

『つぶれたな……』

『潰れた？　それぢやもうすつかりやめちやつたのかね？』

『やめたにも何にも……。あとはもう草藪だアな』

『さうかな』

感慨無量と言つたやうにして加藤は言つた。かれもその鑛山のことを少しは知つてゐた。稅のことで、三四度もその山の中に入つて行つたことがあつた。

八

『さうかえ、あの鑛山にゐたのかえ？……』かう言つたが、暫く考へて、『矢張、あゝいふ鑛山で働いてゐるよりも、百姓になつて了ふ方が好いかね？』

『百姓の方が好いな』

『でも、百姓は儲けがあるめい――』

『儲けはねえ……。それに、出來不出來があるで、樂ッていふわけには行かねえけども、兎に角安心だでな……？　他が何うだらうが、自分さへ野らを耕してさへすれば好いだでな……。他のために、食へなくなるやうなことはねえだでな……』

『それはさうだらうな』

加藤は考へながら歩いた。『百姓の方が本當には本當だな――』

『それは本當とも……。おら、鑛山にゐる時分には、隨分苦しんだゞよ。おら、嬶に子供が三人ゐるだが――その時分は餓鬼は小さかつたで、親子五人、食ふや食はずにゐたことも度々あつただア。何しろ、鑛山では同盟罷工をやるで、食ふものがなくつたつて、働かずに我慢してゐなくつちやなんねえ、皆のために我慢してゐなくつちやなんねえ、つまり働くことさへ自分の一了簡では出來ねえだよ。それ

で、おら、つくづく考へたゞ。これはいけねえ、働いて食ふものをさがすのは、鳥、獸でもやつてゐる。それであるのに、働くことすら勝手に出來ねえ！　それはな、皆のためだで、爲方がねえといへば爲方がねえだが、何うもおらが腑に落ちねえ。で、これはいけねえ！　とおらは思つた。こんなことをしてゐちや、親子五人他のために餓えて死んで了はにやならねえ！　これはいけねえ、それで、おら、思ひ立つたゞ。あの鑛山やめになつた時に、仲間に誘はれたけれども他に行かずに、そのまゝ此處に來て百姓になつたゞ……。初めの三四年はそれでもえらかつた。とてもこれは體がつゞかねえと思つた。しかし五年目からはよくなつたゞよ。それに、餓鬼は大きくなるしな……。どんどん手助けをして呉れるだよ。今ぢや極樂だアな！』

『ふむ、面白い……。よく決心して百姓になつたな――』

加藤は深く深く感心したやうにして言つた。

『今ぢや、おらもよくあの時思ひ切つたと思ふだよ……』

『そこまで來なけりや本當でないんだ……。それで始めて、種々な問題が解けるんだ。……』かう言つた加藤の胸には、此頃世の中で問題にしてゐる勞資のことなどがはつきりと浮かんで來た。つゞいて昔から此の山の中に住んでゐる頽廢した百姓達のことが思ひ出されて來た。人間は時々原始に戻らなければならないのであつた。原始の狀態を考へて見て、そして始めて勞資の爭議も解決することが出來る

のであつた。つまりこの百姓などはそれではないか。働くことさへ自由にならない、そしてそのために餓えてゐなければならない……そんな馬鹿な不自然なことはない――さういふ突詰めたところまで行つて、そしてそこから新しい生活が始まつたのではないか。文化といふことも、そこまで行かなければ駄目だ……。そこまで戻つて行かなければ駄目だ……。こんな考へがひとり手に加藤の胸に上つて來た。

百姓は並んで歩きながら、

『それは慘めだ……。ストライキなんてそれは慘めだ。餓えて死んで行くものが澤山あつたでな？　それから思ふと、今は極樂だな……。おめいさ、何でも、人間は自分でやんねえぢや駄目だな！』

九

『よくそれでも思ひきつてさういふ決心が出來たな？』

加藤は繰返した。

『でも、さうするより他爲方がなかつたでな……。これは、百姓に限る。自分で自分の田や畠を耕して食ふに限る。それで旨く行かねえで、親子餓えて死ぬ分にや、これは何うもしやうがねえ！　しかしな他のために働くことも働けねえで、立派な體を持つてゐながら、餓えて死んだではあまり情ねえだで！』

『本當だとも……。勞働問題だツてそこまで考へて呉れゝば好いんだがなア！』

『それに、おら、社長が殺されたのを見た時には、變な氣がしたゞ。大勢は興奮してゐるだで、平生憎んでゐる奴が殺されたつていふんで、萬歳！　を叫んだけどもな、おら、何うしても、それを言ふ氣にはなれなかつたゞ。社長だつて、同じ人間ぢやねえか。同じ人間の血が流れてゐるぢやねえか。女房もあれば、子供もあるぢやねえか。さう思ふと、おら、無闇に騒げなくなつただ……。それなんかも、百姓になつた原因の一つだな……』

『遠くかね？』

加藤は訊いた。

『おらがゐるとこかね？　何アに、すぐそこせ！　そら、向うに、畠や田が見えんべ、そら、若い男が麥を蒔いてゐる。あれがおらの息子だアな……』

『ぢや、あの向うに見える家がお前の家かね？』

『さうだ……。あれがおらの小屋だ……。何うにかしてもう少し大きくしていと思ふだけどもな…』

そこは斜阪になつてゐて、半ば萱原薄原であつた。小松の繁つた疎らな林なども雜つてゐた。影が明るくさし渡つてゐた。

『それぢや、こゝを開墾したんだね？』

『さうだよ』

百姓は笑つて見せた。

『よくやつたね？　これだけやるのは、中々大變だ――』

『それはな、始めは樂ぢやなかつたゞ。何遍かやめやうかと思つたゞ。しかしな、人間といふものは腰さへ落附けりや何でも出來るもんだと思つてな……。向うの村なんかでは、好い田地を持つてゐて、肥料も澤山入つてゐて、それで年々百姓が田地を捨てゝ東京へ出て行くだが、それから思ふと、おらなんかよくやつたもんだと思ふな――心ひとつだな！　人間は？』

『たしかにさうだ！　了簡ひとつだ。北中あたりの百姓は、私もよく知つてゐるが、仕事をするのが、もういやになつてゐるのだ。祖先以來、怠惰がかれ等の血に深く喰ひ込んでゐるんだ。だからかう荒れたんだらう？』

『お前さの言ふ通りだ……。代々やつてゐる百姓はな、もう本當に爲事しねえだよ。馬鹿くせい、こんなに骨を折つて！　牛か馬のやうに働いて、それで、何一つ面白いこともねえ……。かう思つてゐるだ。だからおらなどの了簡とはわけが違ふだ。おらの百姓になつたのは、心からさう思つて、さうでなくつては、餓えて死ぬといふ段取まで行つて、それでなつたんだけども、あの百姓達のは、代々やつて來たから、爲方なしにやるツていふだでな……。何うしたつて了簡が違ふだ。おらなんかのは、辛いとか、あきたとか、苦しいとか、つまらねえとか言つてゐられねえんだからな……そこが違ふだよ』

『うむ、面白い！』加藤は益々その話に心を誘はれて行つた。

一〇

次第にその小屋は近くなつた。その傍には馬小屋などもあつた。家の前には井戸があり、小さな流れがあつて、そこで上さんらしい女が鍋を洗つてゐた。

『何うだな？　寄つて行かつしやらんか？　これがおらが家だで』

その男は立留まつた。

『でもおそくなるといかんでな——』

加藤は躊躇した。

『なアに、北中までには、もう今日は樂に行けるな！　もう、此處からでは、一里半ぐれゐなものだでな』

『それはさうだけども——』

『まア、寄つて、茶でも飲んで行かつせ！』

達つて勸めるので、加藤もその氣になつて、その小屋の方へと行つた。井戸にゐた上さんは、始めはじろじろと此方を見てゐたが、やがて立つてそして挨拶した。百姓は小屋へとかれを案内した。

成ほど慘めな小屋であつた。これでよくあの冬の深雪が凌げると思はれた。しかしその小屋の小さく低いのに引かへて、畠はよく耕されてあつた。無論、五年前には大半荒蕪地であつたらしく、それを兎に角これまでにするには、並大抵の努力ではなかつたに相違なかつた。肥料溜などもそこ〻に出來てゐた。

『水田もあるかね？』

『それで苦勞したゞな。始めは水田などはなかつたゞが、何うしても、それをつくらねえでは損だ……。何うしても米は水田だ……。で、骨を折つて、水を引いて來たよ。十町、もつと引いて來ただ、水を。それで、今では少しは水田があらア』

『えらい努力だな——』

『でもな、その辛抱を考へると、おらでも、よくやつて來たと思ふぞな……。初めの年の冬なんかと來ては、それは慘めなもんだつた——』

『さうだつたらうな——何しろ、此處等の雪では？』

『丸で三月は、この小屋の中に埋まつてゐたやうなもんだ……。それもな、今のやうに、不十分ながら燃料の設備でも出來てゐればだが、丸でそんなことは知らなかつたでな……。もう、これはとても助からねえ！　一家此處で死ぬだと決心したゞよ。しかし、天道人を殺さずツてな。難有いもんだよ。ま

つとうにせいしてゐれば、死ぬやうなことはねえだな――』

茶を汲んで出して呉れたのをも餘所に、加藤は家の周圍を、周圍の努力の跡を、否、むしろ人間の決心の結果を見て歩いた。深い感激に打たれずにはかれはゐられないやうな氣がした。これを實行したものは、それほどえらいこととも何とも思つてゐないけれども――むしろ必要にせまられて全力を盡してやつたことに過ぎなかつたけれども、しかも加藤が見た世間の、都會のあらゆる事業よりも、もつと眞劍な人間の心がそこに横はつてゐるのをかれは見遁すことが出來なかつた。かれは畠の中の細い徑――そこにもその努力のあとのあらはれてゐる細い徑を通つて、水田のある方まで行つて見た。『はゝア向うの谷から水を取つたんだね？　これは大變だ……』

かれは思はずかう叫んだ。

百姓の男はじつとしてそこに立つてゐた。その皺くちやな顔には眞面目な艱難のあとがそれと刻まれて、いかな自然の壓迫にも驚かないやうな一種のおちつきがはつきりと見えてゐた。午後の日影が明るくあたりにさし添つてゐた。

一一

そこでかれは不思議なことを耳にした。

かれはその小屋の中で、その百姓の男の話を聞いてゐたが――いろいろとこれまでにした努力と苦心の話などをきいてゐたが、ふと思ひついたやうに、

『北中に、太田屋ツていふ旅籠屋はまだあるかね？』

かうかれは訊いて見た。

『太田屋？』

百姓の男は考へるやうにしてゐたが、『さういふ旅籠屋はあつたかな？　何うだつたかな？』

『でも昔からやつてゐる、舊い家だけれど――』

『今ぢや、麻屋ツていふのが一軒あるツきりだと思ふがな？』

『ぢや、つぶれたかな？』

『太田屋？　きいたやうにもきいたやうだが――』

『その麻屋ツていふのは、何處にあるんだね？　追分のやうになつてゐるところにあるんぢやないかね？』

『いや、違ふな。あそこいらまでは行かねえ中だ……。まだずつと手前だ……』考へて、『北中もえらく變つたでな……。俺が此處に來てからでも、隨分變つたでな！　古い家で殘つてゐるものなんか、もう何軒もねえツていふ話だ……』

『ぢや、もうあの追分のところには、旅籠屋はないんだな？』

『ねえな……』

『でも、人家はないことはないだらう？　あの追分あたりに？』

『あるにはあるが、もうすつかりさびれた！』百姓の男は、かう言つたが、何か考へてゐるやうに——考へ出さうとしても、記憶がぼんやりしてゐて考へ出せないといふやうにしてゐたが、此時、ふと、向うの流しのところで物を洗つてゐた上さんが此方を向いて、

『そら、あそこが太田屋つて言つたんぢやねえかね？』

『何處？』

『そら、いろんなことがあつた、何でも上さんや子供なんか殺したり何かしたことのあつた？』

『あれは違ふだんべい？　あれは太田屋ツて言ひやしめい？……しかし、太田屋ツて言つたかな？』百姓の男は考へ込んだ。

『でも、お客様の言ふのは、あの追分の角の家ツていふんぢやねえのかね？……それなら、あそこがその家だよ。上さんも殺し、その上さんの情夫だッた男も殺し、あげくに子供まで殺して自分も死んで行つたのは、あの家だよ』上さんはかう話した。

『さうかな——あれは丸で違ふ話だと思ふがな？』

『たしか、あの家が太田屋ッていふ旅籠屋だつたときいてゐたやうな氣がするけれどもな……』

『いつのことだね？　それは？』

かう加藤は上さんに問うた。

『まだ、鑛山にゐる頃だで、十二三年も前のことだんべかな……。何でも、その時分、大騒ぎで、何も可愛がつてゐた女の兒まで殺さなくつたつて好いなんて皆なで評判したことがあつたゞ。たしか、太田屋と言つたと思ふだが？』

『いや、あれは違ふ！　旅籠屋ぢやない。もつと好いところの、土地でもきこえた家のことだ……いやあれとは違ふ！』かう百姓の男は言つた。

一二

『あれが太田屋と言つたやうだつたけども……』

上さんは猶ほ言つた。しかし、その間には年月が既にかなりに長く經つてゐた。その名も、その事件も、その所在地もはつきりとは思ひ出せないほど經つてゐた。

『いや、あれは違ふ！』

かう百姓の男は否定した。

しかしその話に由ると、其事件は一時山中の悲慘な出來事として到るところへと傳へられたとのことであつた。S鑛山の西坑の長屋にまでも、それがいろいろに噂されて傳へられたといふことであつた。嬶が男と嬶曳してゐるところに踏み込んで行つて、男を斧で一擊に殺し、慌てゝ遁け出した嬶を後からまた一擊に殺したといふことであつた。しかしそれだけなら悲慘と言つてもまだ例のないことではなかつたけれども、何でも、その事件では、二人の血を見て、忽ちに狂人にでもなつたのか、すぐその足で無邪氣な二人の子供――一人は女の兒で、平生非常に可愛がつてゐたのであつたが――を擊ち殺したといふ話であつた。

『まア、何ていふ血だつたらう？　その慘めなことゝ言つたら？』かうその時は誰も彼も話した。

『太田屋ッて言つたか、何ッて言つたか知らねえけども、何しろ、あの追分のところにある家には家だぞな！』

かうつゞけて上さんは言つた。

『さうかな？　あそこの角の家だつたかな？』

『おら、ちやんと見て來た人にきいたでな』

『さうかな？』百姓の男は考へるやうにして、『あの時は評判だつたが、何しろ、もう十年以上にもなるでな……。一時、えらい評判だつたがな……。さうだつたかな？　何でも、その爺は道樂者だつた筈

だが？』

『さうだよ。たしかに、太田屋だよ』

段々その記憶がはつきりしたといふやうに上さんは言つた。

しかし、さうした話は、別に加藤を動かさうとはしなかつた。北中に行つて、それとはつきり聞き糺した上でなければ、何が何だかわからなかつた。また、かれの考へでは、あの太田屋の主人とも言はれるものが、さうした狂人染みた行爲をしやうなどゝは何うしても想像も出來なかつた。それに、八年前に此處に移住したといふかれ等に、その前のことがはつきりわかりやう筈はないと思つた。加藤は訊いた。

『それで、その麻屋ッていふ旅籠屋はあるんだね？』

『それはあります』

『ちよつとした旅籠屋かね？』

『いゝ宿屋でさ……。縣廳の役人なんがが來ても、皆なあそこに泊つて行くだでな？』

『ヤ、有難う……。ぢや、今夜はひとつそこに泊るんだな？』

加藤はかう言つて立上つた。

『まア、好いだんべ。もう少し休んで行かつせいな？』

『有難う！　そろ〳〵行かう。まだ二里近くあるでな』

『さうかヤ』

百姓の男も立つて出て來た。

『まア、眞面目に働くだ……。かうしてひとりで働いてゐる分には、誰も何とも言ふものもないからな？』加藤は言つた。

『有難う……。それぢや、大事に行きなせいよ』

で、加藤は靜かにそこを出て行つた。

一三

暫く行つて加藤は振返つて見ると、その小屋のあるところには、夕陽が斜にさしわたつて、紅葉した林が赤く染まつたやうになつて見えてゐた。百姓の男はまだそこに立つて此方を見てゐた。

かれは深く考へずにはゐられなかつた。かうした原始的な生活、それと相對してあの騷がしい都會の集團の生活があるのであつた。何方が幸福であらうか。また何方が本當であらうか。それは容易にはわからなかつた。或は都會の人達の方の生活が、かうした生活よりも、より一層苦しいかも知れなかつた。またより一層さびしく孤獨であるかも知れなかつた。しかし、何方が好いかは、それは別として

も、これだけはたしかであつた。虛僞や、策略や、陷穽や、二枚舌や、不誠實や、さういふもののないことだけは確であつた。かれは二十年前に此處に來た時とは榮達もしてゐるし、金錢にも不自由はなくなつてゐるし、家庭も圓滿だし、子供等も丈夫で學問好きだし——先づ先づ不足のない身分にはなつてゐるけれども、それでもこの山の中の靜かな生活の方が好くはないか、本意ではないか、靜かではないかと思つた。

都會のあの騷がしさ、あの賑はしさ、あの仰々しさを餘所に、山は靜かに夕日に立つてゐるのであつた。川は潺湲と音を立てゝ流れてゐるのであつた。これでも人生であつた。あの小屋の百姓夫婦にも、矢張意味ある人生があるのであつた。かう思ふと、二十年間、かれのやつて來た努力も、さう大して大きな意味を持たなくなつて來たやうな氣がした。

社會の集團の中に交つてゐては自分の本當の勞働さへ出來ないといふその言葉、その百姓の言つた言葉が、はつきりとまた胸に浮んで來た。實際、社會にゐては、さうしたS鑛山のやうなところでなくても、避くべからずに集團の抑制を、支配を受けなければならないのは事實であつた。現に、かれなぞでも、そのために本當に働くことは出來なかつたかも知れなかつた。無意識に——否、意識してゐても、その社會的心理のために、社會に都合の好いやうに、言はゞ迎合して世をわたつて來た形はないではなかつた。そのために持つてゐる自分を本當に出すことが出來ずにやつて來た形はないではなかつた。

否、ある場合に於ては、樂にこの世の中をわたるために、自己を捨てゝ、社會に媚びて來たことすら、全くないとは言はれないやうな氣がした。

かれには何方が好いのかわからなくなつた。社會的に迎合するのが好いのか。皆のために自分を犧牲にして、社會のために働くのが好いのか。それともまたあの百姓のやうに本當の勞働をするために孤獨を選んだのが好いのか。しかしその答へはかれには容易にやつて來なかつた。夫は何方が好いときめて了ふべきものではなくて、何方でも好いのではないか。場合に由つて、孤獨が好い場合もあり、集團が好い場合もあるのではないか。兩方とも好いのではないか。こんなことを思ひながらかれは歩いた。

いつかかれは林の中へと入つて行つた。野も、畠も、小屋も、またさつき越えて來た峠も、全くかくれて見えなくなつて了つた。何うも二十年前と今とでは路が丸で違つてゐるやうな氣がした。それと言ふのも、林が林でなくなつたり、野が野でなくなつたり、村が村でなくなつたりしてゐるためであつた。かれは夕日を帶びながらさびしく歩いた。

一四

小さな峠をもう一つ越すと、薄暮の靜かな空氣の中に、そのなつかしい北中の村があらはれ出した。ところどころに散ばつてゐる藁葺屋根――それも以前にかれが見たのとは違つて、いやに山中の部落のやうになつて了つた藁葺屋根から、夕炊の烟がほそぼそと上つて、その末が縷のやうに夕暮の靄の中に雜つて行つてゐるさまが、何とも言はれないさびしさをかれの心に誘つた。かれは思はず足をとゞめて、じつとあたりを眺めた。

何といふさびしさだらう？　また何といふ荒れやうだらう？　その時分には、まだそれでも宿場らしい感じが殘つてゐた。昔の旅行家の通つて行つたあとなどもそれと指さゝれた。大きな家屋などもそここゝにあつた。しかし今は？　この夕靄に包まれた今は？

かれはやがてその荒れ果てた村の中へと入つて行つた。しかもところどころにぽつつりぽつつり灯はついてゐるけれども、話聲も笑ひ聲も何處からもきこえて來なかつた。野から歸つて來る車の音もなければ、人の通りすがつて行く氣勢もなかつた。人家も蓬の枯れたやうに一軒二軒と減つた。今では昔こが町並であつたとは想像することも出來ないやうになつてゐた。

學校の方に入つて行く路の角のところへとやつて來た時、向うから中年の百姓がやつて來た。

『此處では、旅籠屋は何ッていふのが好いのかね？』

加藤はかう訊ねた。

『麻屋だんべな？』

『太田屋ッていふのは、もうないのかね？』

『とうに潰れたゞよ』

『あそこの人達は？』

百姓はじろじろとかれの顔を見てゐたが、

『もうゐねえだよ』

『何處かへ行つて了つたのかね？』

『……』

その返事はせずに、『廐屋はすぐそこだが……。北中には、今ではそこつきり宿屋はねえだでな。今夜は其處に行つてとまらつしやい！』かう言つてすたすたと向うに行つて了つた。

かれは狐につままれたやうな氣がした。かれは靜かに歩いた。

また、村の人らしい男があとからやつて來た。

『もとは、學校はこの向うのところにあつたが、今はもうないのかね？』

かれは突如（だしぬけ）に訊いた。

『もう、とうにねえだよ……』

『もうなくなつたのかね？』

『葡萄の方に引けちやつたゞよ』

『ぢや、もう、北中には、小學校もなくなつたんだね？』

『さうだ……。何うせ、人が少くなつて了つたでな——』

『いつだね？　學校のなくなつたのは？』

『もう十年前だんべ……。それに燒けたでな？』

『火事かね？』

『さうだ、燒けてから、もう建たねえだよ……。何しろ、貧乏な村になつて了つたでな』

『ふん、さうかな。丸で變つちやつたな……』

こんなことを言ひながら、かれはその村の人と竝んで歩いた。

一五

小さな宿屋であつたけれども、それでも室などは小綺麗してゐた。それに、何處から見ても役人らしいかれの扮裝や風采は、山の中の旅舍の主人主婦の頭を下げさせるに十分であつた。かれは裏の田圃に面した此の家で一番好い八疊の一室へと通された。

障子を明けると、水田を隔てゝ茫と夕靄に包まれてゐる山嶺の起伏が見られた。

それにしても、此處は何處になつてゐるのであらうか？　かれはかう思つて考へた。あそこが學校に曲

る路であるとすれば、それから七八軒此方に、穴山といふ大きな百姓があつた筈だ。それはまだあるかしら？　それともそんなものはもうなくなつて了つたのかしら？　或はこの家がその一部分ではないのかしら？　しかしそれにしてはあたりがあまりにさびしかつた。向う側はすつかり畠になつて了つてゐた。

茶を持つて來たのは、十五六の小娘であつた。

『北中はさびしくなつたね？』

しかし娘にはそれがわからなかつたといふやうに、

『え？』ときゝ直した。さうした村の變遷などは、これまで一度もその娘の若い頭には上らなかつたらしかつた。

『丸で變つちやつたからさ！』

『……』

娘はそれでも默つてゐた。何う答へて好いかわからなかつたのであつた。

『あの追分はまだ餘程先だね？』

『え？』

『そら、勝木の方に行くところがあるだらう？　海岸の勝木の方へ？』

『あ、あそこか？　あそこなら、そこから、もうすぐだ……』

これだけ答へるにも、娘の顔は眞赤になつた。

『此處等に、穴山ッていふ大きな金持の百姓があつたつけが、知らないかね？』

『おらがことだな！』

辛うじて答へたといふやうにして小娘は答へた。

『さうか。お前の家が、此處が穴山ッていふのかえ？　さうかえ？　何うも此處等だと思つた……。』

でも、もつと大きな家だと思つたがな？』

『お父が半分賣つちやつたで……』

『さうかえ、お父が賣つた……？　それぢやこの宿屋はお前の母さんがやつてゐるのかえ？』

『兄さんと、母と……』

『此處に、白髮の品の好い年寄がゐたがな……？』

『祖父だ……おらが八歳の時、死んだゞ』

『お父は？』

『お父は東京に行つただ……』

『いつ？』

『もうずつと前、おらが生れたそのつぎの年に！』

『それで歸つて來ないのか？』

『死んだか、生きたか、わかんねえだ……。そして、祖父がこの宿屋を始めた……』

娘の話は極めて輪廓的ではあつたけれども、それでも、その父親が女のために、妻子を捨て、老人を捨て、家庭を捨て、祖先代々の田地をも半ば金にして、そのまゝ行方不明になつたことだけはそれとわかつた。否、そのあとをその老祖父とこの娘の母親とが整理して、兎に角かうした宿屋をすることになつたことなどもそれと推せられた。

一六

やがて案内されて行つた風呂場には、湯氣が白くこもつてゐたけれども、それでも、その窓から、茫としたあたりが微に眺められた。戸外には薄月があるらしく、山の輪廓をはつきりと夜空に描いてゐるのがそれと指された。

『お加減はいかゞですかな？』

顔は見えなかつたけれども、若々しい女の聲が外からきこえた。

『上等だ……』

ざぶりと溢れるやうな、多い、綺麗な湯に浸りながらかうかれは言つた。いかにも心持が好かつた。

今日の一日の輕い疲勞もこれですつかり治つて、のんきに一夜をこの山の中に眠ることが出來ると思ふと、あらゆる世間の煩累を遁れて、再び昔の學生時代にもどつて來たやうな氣がした。

外では竈に火を焚いてゐるらしく、パチパチと薪のはねる音がした。そつと覗いてみると、そこには井戸があつたり、溝があつたりして、今、若い女が汲んでこぼした水がザッと月の光に照らされてゐるのがかゞやくやうになつて見えた。裏は中庭になつてゐるらしかつた。

『お粂！　お粂！』

と呼ぶ聲がした。それは年老いた女の聲だッた。『はい！』といふ若々しい聲がしたが、そのまゝ向うに行く女の足音がした。覗いて見ても、もうそこには誰の姿も見えなかつた。

かれは湯に浸りながら、遠い遠い昔を頭に浮べた。それは他でもなかつた。あの太田屋の二階の六疊から、長い階梯を下りて、風呂場の方へよく下りて來たことであつた。あの時分はまだ若かつた。希望に滿ちてゐた。功名を趁ふ心に滿たされてゐた。今に見て居れ！　世間を驚かすやうなことをしてやるから――こんな風にばかり考へてゐた。それから二十年！　それは村も變つた。あたりのさまも變つた。住んでゐる人達もその十の八つは異つたものになつて了つてゐる！　しかし、それよりもこの自分の方が一層多く變りはしなかつたか？　かうした靜かな心は？　かうした衰へた心は？　もはや功名も希望もなく、唯、靜かに昔を思ひたいばかりのこの心は？

今になつても、この人生はかれにはわからなかつた。何れが眞相だか、何處までが本當で何處までが影であるかわからなかつた。しかしかういふことだけは考へられた。刻々ごとに、それが人生であつたといふことは考へられた。つまり二十年前の事實はそのまゝで好い、また二十年後の事實、それもそのまゝで好い……。それだけはたしかであつた。しかし、それが何ういふ風に本當の人生に雜り入つてゐるのか。他人の上に混り合つてゐるのか。それはかれにもわからなかつた。

それにしても、こゝの主人――さつき小娘が言つたこゝの主人の顏をかれは知つてゐるやうに考へずにはゐられなかつた。それは大きな鐵の丸い火鉢を前にして坐つてゐたむつつりとした三十七八の男だつた。今ゐれば、何うしても、もう五十一二だ……。たしか耳のところに大きな瘤があつた筈だ……。あの男がさういふことをしたのか。女を伴れて行方不明になつたのか？　かう思ふと不思議な氣がした。人間といふものゝ運命の慘めさがはつきりと眼前にあらはれて見えるやうな氣がした。

かれは冷たくなつた體を湯の中に沈めた。じつと燒けた鐵砲の音がした。

一七

夕飯の膳の給仕には、始め來た小娘でなしに、風呂の加減を外から聞いた二十三四の女中がやつて來た。加藤は酒を一本つけて貰つておうと、落附いた氣分で、盃に酌をして貰つた。

『姐さん、この土地かね？』

『いゝえ……』

女中は笑を含みながら言つた。

『何處だえ？』

『勝木です……』

『あゝ、勝木かえ？　ぢや、近いんだね？　あそこで生れたのかえ？』

『え……』かう言つたが酌をしながら、

『旦那、御存じかね？』

『よく知てるよ……。あの村役場のあるあたりかえ？』

『もつと海岸の方……』

『では寒川に行く路の方だね？』

『よく知つてるね、旦那？　此方にゐたことがあるんけえ？』

『勝木のものだもの……』

『嘘べい？』

女中は笑つた。

『嘘なことはありやしないよ。そこで生れたんだよ』

『嘘！』

『なら、何でもきいて御覽！　よく知つてゐるから――』

それに誘はれて、女中は二つ三つ問ひを出した。それを客は皆知つてゐた。かの女の知らないことをも知つてゐた。かの女が十歳の時に大暴動をやつたそのS鑛山のことなどは、中でもことに詳しかつた。

『旦那はそれぢや鑛山にゐたんだね？……。さうだ、さうだ、それに違ひねえ。それでそこいらのことをよく知つてゐるんだ？』

『そんなことはないよ。本當に、あそこで生れたんだ……』

『嘘、嘘――』

『さうかな、何うしても、さうは見えないかな？』かう言つたが、ふとかれは太田屋のことを思ひ出した。かれは訊いた。『さう言へば、話は違ふが、もと、そこに、その勝木に行く追分のところに、太田屋ッていふ宿屋があつたね？』

『え……』

『あそこは、何うなつてゐるかね？　すつかりなくなつたのかね。畠になつて了つたのかね？』

女中はその返事はせずに、『旦那さ、知らねえかね？』

『何を？』

『太田屋のことを？』

さつき百姓の小屋で上さんの言つたことを思ひ出して、『それぢや本當なのかね？　何でも、女房から子供から、すつかり殺したといふことは――？』

『本當だがな、旦那さ……。おらまだ小せい頃だから、そんなことよく知らねえけども、えらい騷ぎだつたッてな？　やれ巡査がくる、裁判所の人が來る、丸で村がひつくりかへるやうな騷ぎだつたとな？』

『さうかな？　それぢや矢張本當だつたのかな。あの長兵衞ッていふこゝの村長なんかもしたことのある人だぜ？』

『何でもさういふ話だ……。おらまだ七八歳の頃だつたで、よく知らねえけども、お祖母が北中のもんで、丁度その時、近所にゐたッてな、よく知つてるッてな、いつでも話して呉れただよ』

『ふむ――さうかな』加藤は深く撲たれずにはゐられなかつた。

一八

『それで、その情夫つていふのは、何ういふ人だつたね？』

加藤は問うた。

『何でも巡査だつたつていふことですよ。何でも長くこの北中の駐在所につとめてゐた人だつてな……。皆よく知つてゐますよ』

『ぢや、あれだ！　私も知つてゐる——』かう加藤は獨語のやうに言つた。

『何でも話では——おらが祖母からきいた話では、その太田屋の旦那だッていふ人が、好い男で、それに器量人で、村のためにもいろいろ盡した人だつたッて？　で、村上の方にも始終行くで、あそこに馴染が出來て、何でもお金をえらく出して圍つて置いたゞ？』

『知つてゐる！　知つてゐる！』

加藤はかう點頭いて見せた。

『旦那さも知つてゐるか？　それで身代をな、すつかりわるくしちやつたで、いくらか自暴になつてゐただらうッて言ふだよ。でなけりや、あんな無慘な眞似はしねえだらうッてな……。何にせ、子供が二人ゐたのを、それまで殺して了つたでな？』

『女の兒と男の兒と？』

『さうだッてな……。中でもな、女の兒の方は、不斷非常に可愛がつてゐたんだつて……。その女の兒のために、上さんのわるいことも見て見ぬ振をしてゐたんだつて……。それが、さういふことになつ

たんで、誰でもびつくりしないものはなかつたッてな？』

『何うしてそんなことをやつたかな？　血を見て、狂つて了つたのかな？』

『此處のお袋さ、その時行つたで……。此の家は太田屋の親類になるでな？　何でも此處のお袋さと從弟同士ぢやないかしら？　何んでもよく知つてゐるで、きいて見ると好いだよ』

『さうかな』

加藤は酒も何も旨くなくなつて了つたやうな氣がした。暫く默つて考へてゐたが、酌をして貰ひながら、『何ういふ場合だつたかな？』

『何でもな、話では、太田屋の旦那さんがな、外から歸つて來た時、運わるく、男が來てゐて、奥で寢てたゞな？』

『それでは、晝間かね？』

『午後の四時頃だつたつていふことだよ……。それで、それを見て、赫となつたらしいな……。一番先に上さんを殺し、巡査は少し手向ひしたらしいが、此方は刃物を持つてゐるので、逃げるところを後から切つ放したらしいでな……何でも、男は緣側に大の字なりになつて斃れてゐたつていふんだよ。その時は、もう太田屋の旦那、氣がふれてゐたんだな……。丁度そこに學校から歸つて來てゐた姉弟をすぐその刀で斬つて了つたさうだで……あゝ、もう、いやだ……考へるのもいやだ……』女中は顔を蹙め

るやうにして見せた。

『それで、太田屋は？』

『すぐ自分で咽喉をついて死んぢやつただよ……。それや、えらい騒ぎだつたつて、室中丸で血の海のやうだつたつて……。おらの祖母は、丁度その前の家にゐて、何か太田屋で變な唸聲がきこえるッて誰かゞ飛び出して行つたそのすぐあとから行つたで、すつかり見ちやつたッてな。あんな恐ろしいことはなかつたッてな？　死ぬまで話してゐただよ！』

一九

『それぢや皆な死んで了つたんだから、何うすることも出來ないつていふわけだね？』

『本當ですよ。だから祖母なんか、いつも言つてゐました……。人間には、いつ何ういふことがあるんだか、わからねえ！　かうして生きてゐても、いつさういふことが天から降つて來るかわからねえつて言つてゐました……』

加藤が起した茶椀を赤い丸い盆に受けながら、『もう、旦那、好いんですか？　御酒は？』

『もう澤山だ――何だか、その話をきいて氣持がわるくなつた。僕はあの太田屋の旦那をよく知つてゐるんだからね？　いつも行つてはあそこの二階に泊つたんだからな……。上さんだッてそんなわるい

人ぢやなかつたけどもな……』女中の出した茶椀を受け取りながら、『丸で思ひがけないことだな……。まだ、生きてゐるとばかり思つてゐたな――』加藤の眼の前には、雪の深い葡萄を越して、鹽野町に行つて、そこで別れた時のことがはつきりと浮び上つて來た。

『ふむ――世の中ッてわからんもんだな。本當に無常だな……』

かう言ひながら、かれは膳の上の箸を取つた。暫く二人は默つた。

『それで、あとは何うしたね？』

かうかれが再び問うたのは、飯を食ひ、茶を飲んで了つてからであつた。

『そのまゝだな……』

『そのまゝッて、家は潰れて了つたんだらう？』

『まだ、あります……』

『家が？』

『え』

『誰か買つて住んでゐるかね？』

『いゝえ』

『それぢや空家になつてゐるのかね？』

女中は點頭いて、『誰も手を着けるものがねえでな……。それに、壞すには、金がかゝるで、そのまゝ立ぐされになつてゐるだアよ』

『うむ……』

加藤は不思議な氣がした。

『それでもな、一度壞しかけたことがあつたがな！　何うも無氣味で、無氣味でしやうがねえッてな……。何でもあそこに入ると、體中がぞつとするッて？　一時は女の兒の泣き聲が夜中にきこえるなんて言つてゐたゞ』

『それぢや丸で怪談だね？』かれは笑はずにはゐられなかつた。

『でも、本當に、さうだもの……。今でも夜は、おら、あそこを通つたことはねえ？』

『でも、誰か親類のものが監督はしてゐるんだね？』

『それは前の分家でやつてゐるだがね……。あそこでも、手がつけられねえで、困つてゐるだんべ。あそこでも、主が死んだでな？』

『あの太田屋の向うの、顏の長い、丈の高い男が？』

『よく知つてゐるな、旦那さ？』

『だつて、度々此の山の中にはやつて來たんだもの……。こゝの年を取つた方の上さんも、名乘つた

ら、覺えてゐるかも知れない……。何しろ、こんな半白にはなつたにはなつたけれども……』かう言つて加藤は笑つた。

『あとで、年を取つたお上さんにきいて御覽なせい？』女中はかう言つて膳をお櫃の上に乘せて出て行つた。

二〇

年取つた上さんは、おそくなつてからやつて來た。加藤の眼には全く知らない、髮の白い、齒の拔けた六十近い婆さんが映つた。何處にもその時分の顏は殘つてゐなかつた。たしかにかれは見たことがあるに違ひないのであるが――その行方不明になつたといふ若主人と一緒に店にゐたに相違ないのであつたが、しかも何處にもさうした記憶は殘つてゐなかつた。

上さんもじろじろとかれの顏を見た。

『覺えてゐないかな？　お上さんは？　僕がまだ二十七八で、よく稅を取りにやつて來たもんだがな？』

『稅を取りにね？』

上さんは考へ込んだ。

『いつも太田屋に泊つてゐて……何でも三年、四年は來たと思ふがな――一番おしまひの時には、大雪に逢つて、四日も五日も此處から出られなくなつて困つたことなどがあつたがな？』

『さうかな――』猶ほ上さんは考へるやうにして、『それでは、あの村上の方から來た若いお役人だつたかな――？』

『さうだよ』

『あの鼠色の帽子をかぶつた――服を着て、鞄を下げた――』

『さう、さう――』

加藤はなつかしさうにして笑つた。

『顏はもう覺えてゐねえ……。すつかりお變んなすつたで……。しかしな、さういふ程の若いお役人が來たことは知つてるだ……』

『遠い昔だからな』

『もう、二十年にもなるかな？』

かう言つて上さんはまたじつと加藤の顏を眺めた。

『こゝいらは、えらく荒れちやつたね？　丸であの時分とは變つて了つたね？』

『え、え。もう、しやうがねえでさ……。氣のきいたものは皆な他へ出て行つて了つてな……。おらがのやうなものばかりが、何うにもかうにもしやうがねえだで、殘つてゐるだよ』皺くちやな顏に笑を見せて、『それでも、まア、貴方さは、立派になんなすつて結構ぢやな……？』

『いや――』

『二十年の間、一度も此處に來たことはねえのかね？』

『ないのだよ』

『それぢや一層變つて見えべいな……。今は何處だな？』

『東京から來たんだ……』

『さうかな、東京かな……。羨ましいぢやな……。何しろ、あの時分とは、丸でひどくなつて了つたでな？』

『何だか、北中ぢやない、別のところに來たやうな氣がしたよ、さつき入つて來た時は――？　此の家だつて、もつと大きな、黑い塀が長く廻してあつたと思ふんだがな……。此處のところは隱居のゐるところか何かと思つてゐるのに、そこが宿屋になつてゐるので不思議な氣がしたね』

『さうだな。あの時分は、店の入り口が向うだつたでな……。あの時分のことを考へると、いろいろなことがあつたな。北中にも料理屋なんか五軒七軒もあつた頃だでな――』

『さう言へば、太田屋はえらいことになつたんだつてな？』

やがて加藤は話を其方へと持つて行つた。

二

『ほんになア！』

上さんはかう調子を合せた。

『何うして、そんなことになつたんですかなア。僕は、北中に來たら、是非逢つて、無論まだ旅籠屋をしてゐることゝ思つてゐたですから、いろいろ昔の話をしたいと思つてやつて來たんですが――』

『ほんに、何うして、あんねえなことをしたゞかなア！』

上さんは今更その慘劇を思ひ出したくないといふやうに見えた。

『矢張、くわつと來て、見さかひがなくなつたんですかな？』

『やけも餘程手傳つてゐたゞな……。何しろ、あとでわかつたことだが、家の方ももうひどくなつてゐたでな？　焦々してゐたところに、あのことがあつたで、赫となつたゞな』

『さうですかな。家の方もわるくなつてゐたのかな？』

『何せ、田地でも、山林でも皆抵當にして金を借りてたでな。二人の子供を殺したのも、さういふ困つたところに殘して置くのも慘めだと思つて、手にかけたらしいで？』

『ふむ』

加藤は頭を振つた。

『そんなに困つてゐたかな？　それも村の爲に運動したり、何かしてつかつたんだらうけども――』

『いや、村上の女につぎ込んだゞよ。深間がゐたでな――』

『でも……』

『いや、これもあとでわかつただが、たしか、薫とか言つた女だが、それにあら方、身代をつぎ込んだゞな？　そしておしまひには、につちもさつちも行かなくなつただな。何でも、その十日ほど前に、一家を賣拂つて、女房も離緣して、女の兒一人だけを伴れて、何處かに行くと言つてゐたらしい……。そして、その何處かに行くといふのは、村上の女の許に行くつもりだつたらしい……。つまりな、そんなことは皆あとからわかつて來たことだけども、家を賣拂つた金を持つて、村上の女の許に入り込むつもりだつたぢやな！　ところが、それが旨く行かなかつたぢや。何でも女にえらく愛憎つかしを言はれて、失望して歸つて來たぢやよ。そこに運わるく、出會したゞでな？』

『そんなことがあつたのかね？』

『何でも、村上から歸つて來て、すぐだつたさうだ。何でもな、午後の三時頃だつたらうッていふことだがな……。歸つて來る時が、もう頭が何うかしてゐたんぢや……。そこに、運わるく巡査が來てた

だ。それもな、お客さん、その巡査はその二年ほど前に、そのために此土地にゐられなくなつて、小國の方へ行つてゐたゞよ。それはな、その間にも、時々何處かで逢つてゐたッていふことだつたけども、まア上さんは辛抱してゐただよ。太田屋が村上さへよして了へば、自分もやめるくらゐには思つてゐたかも知れねえよ。何しろ、もう年も年だし、わかい娘ッ子ぢやなし、そんなにいつまでも男でもねえだでな……。ところがな、それも運だな。あの日、久し振りで、その巡査が來たッていふだ。何でも午前に來て、酒など飲んでゐたッていふんだ……。太田屋が村上に行つてゐるのを上さんはちやんと知つてゐるでな。それに、さう早く歸つて來るとも思つてゐなかつたらしいでな。何でな、巡査と二人でいちやついてゐたのを、午前に見たものがあるだよ……。そこに、そら、歸つて來た！　むしやくしやしながら歸つて來た！』

三

『その時、おらはな、勝手で芋の皮をむいてゐたゞよ』と年取つた上さんは話しつゞけた。『と、そこへ、あそこの前の分家の上さんと役場の男とが飛込んで來て、大變だ！　大變だ！　と言ふから、何だと思つたら、太田屋が大變だ！　つて言ふぢやねえか。そして上さんも役場の男もがた〳〵震へてゐるだでな。おら、火事でもぶつ始まつたのかと思つただよ。ところが、それどころぢやない、長さんが

人殺しをしてゐるッていふで、慌てゝ飛び出して行つたゞよ……。さうするとお前さん、何うだつたと思ひなさる！　そら、あそこの園爐裏のあるところがあんべい。あそこで子供が二人とも死んでゐる！　男の兒が仰向けに、お金の方は横に倒れて死んでゐる！　そして、すぐその向うに、長さが咽喉に長い刀を突さして、そして倒れてゐるぢやねえか？　おら、たまげたにも何にも……。何が何だか始めはわからなかつたですよ。さうすると、分家の上さんが、また袖を引張る。そしておらを奥に伴れて行くだよ……。まア、何と言つて好いだか、おら、一生の中で、あんな恐しいものを見たことはねえ！　そこら、丸で血だらけ！　襖にも、疊にも血が一杯飛び散つて、その中に、太田屋の上さんは突伏しに肩から切られて倒れてゐるし、緣側のところには、あの巡査が斧で突殺されてゐるではないかね？　お前さん、あんなすごいことをおらは見たことはねえだよ』

『ふむ――』

かう默頭いた加藤は、眼の前にその慘劇を見るやうな氣がした。

『それでもまだ、おら、何が何だかわからなかつた。何うしてそんなに皆なが殺されてゐるんだかわからなかつた……。それがすつかりおらがに飲み込めたのは、餘程あとになつてからだよ……。今はな、もう年月が經つたで、それほどには思はなくなつたけれども、その當座は、それが眼先にちらついて、飯も咽喉に通らないで困つたがな――』

『さうでせうともな――』

加藤はかう言つて考へて、『あの人が何うしてそんなことをしましたかね？　隨分、物のよくわかつた人でしたがねえ？』

『その子供を殺したのが氣が知れねえ！　何の罪もない子供まで殺すッていふことはない。そこが、血を見て氣が變になつたんだらうッて、皆な言ふんだけれども、それがな、それ可哀想だと思ふだよ』

『子供を二人殘したッて、却て可哀想だとさう思つたらしいでな……。少しでも、考へ直せば、そんな慘たらしいこともしなかつただらうけども、すぐさう思つて、そしてすぐ殺して了つただな……。大騒ぎだつたぜな！』流石にその時のことが思ひ出されるといふやうにして、年を取つた上さんはつゞけて話した。

『どんなに不仕合せでも、生かしておけば好かつたのに――さうすれば、親の菩提を弔ふといふこともあつたのに、皆な、一家殘らず死に絶えて了つたでな、何うにもならねだよ』

『巡査ッて、あのよくあの圍爐裏のところに來て、酒を飲んでゐた男かね？』

加藤は訊いた。

『さうだんべな……。丈の低い、顔の丸い、よくおかしな、洒落のめしたやうなことを言ふ人だつた？』

『それぢや、さうだ……』加藤はその巡査の姿を思ひ浮かべるやうにした。

二三

『それで、あとは何うしました？』暫くした後で加藤が訊いた。

『さういふ風に皆な死んで了つたでな……。何うにもならない。困つたが、皆な相談の上でな、分家の小さいのにあとをつがせることにしただよ』

『ぢや、その人があとをやつてゐるんですね？』

『姓はな、ついだがな、家には、あの宅と宅地きり何もねえで、何うにもならない。そしてその男の兒は、今年二十五になるだが、東京さ、修業に行つてゐる――まアこれでも歸つて來たら、家を潰すなり何うなりするだらうがな。それまでは誰も手をつけねえだよ』

『それで、太田屋がなくなつたので、この家で宿屋をするやうなわけになつたんですな？』

『まア、さうだな……。いろいろなこともあつたがな？』かの女達の悲劇をも暗にその言葉の中にこめるやうにして、『生きてゐるといろんなことがあるだな、お客さん！　この世は苦の娑婆ッていふが、本當だな、もし――』

加藤も誘はれずにはゐられなかつた。

『本當だ……。太田屋だつて、そんなにわるい人ぢやなかつた。村の爲めに、爲めにとばかり考へてゐたやうな人だツた。でもな、あの人の一番の打擊は、汽車の停車場を寒川の方に取られて了つたことだな……。あれから自暴になつたぢやないかな？』

『さうだ、さうだ、本當にお客さんの言はつしやる通りだ……。あれから、わるく他に外れるやうになつたゞな……』

『あれさへ成功すれば、あの人だつて、そんなことにはならなかつたらうし、村だつて、かう荒れて、衰へて了はなかつたらうに……？　私、よく知つてゐるけども、もう少し村の人が眞劍になつて、そら貞介といふ人や、あとで村長になつた人や、さういふ人が力を入れゝば、此方を汽車が通るやうにならないことはなかつたんだけども——』

『さうも行かなかつたぢやな、お客さん？　あれで、太田屋がな、もう少し信用があれば、何うにかなつたらうけども、あの人は働きものではあつたが、信用はなかつたでな？』

『いや、それはさうかもしれないが、もう一段上に立つ人に、太つ膽な、ものゝわかる人がゐて、あゝいふ太田屋のやうな腕のきくものに、十分に爲事をやらせれば好かつたんだ……。さうすれば、あの停車場だツて、此方に取れたんだ……』かう言つて考へて、『しかしな、世間といふものは旨くは行かないもんだ……。一つの間違ひで、十桁も百桁も違つて了ふでな……。何うもしやうがない。自然には

敵ふものはないでな……。しかしな、かうしてあの人の話をしやうとは思はなかつた。東京にゐても、かういふ風には私は想像してゐなかつたから……。葡萄や北中は、ぐつと開けてよくなつたと思つてゐたから——それでも、な、お上さん、十二三年も經つたあとで、かうして話してゐるんだから、あの人もよろこんでゐるだらう？』

『さうだともな』

上さんも感慨深いやうにして涙を浮かべて言つた。かうした話もかうした一夜も、また時の間に過ぎ去つて了ふのではないかといふ氣が、はつきりと強く加藤の胸を掠めて通つて行つた。

二四

その夜は加藤は遲くまで眠られなかつた。始めは太田屋のことが、その慘劇が、その愛してゐた女の兒まで手に懸けて死んで行つた形が、いくら振拂つても離れずに纏れついて來てゐたが、次第にそれは自分の生活の上へと落ちて來た。

さうした變遷が、悲劇が、盛衰がこの山の中に起つて居る間に、かれはかれの忙しい、目まぐるしい都會生活を過て來たのであつた。片時も休むことなく、片時も靜かに物を考へる暇とてもない都會生活を……。そこには、政治の世界もある。資本家の世界もある。勞働者の世界もある。これを縱にして

は、個々に男女の縺れもあれば歡樂の色濃いシインもある。電車も自動車も忙しく走つてゐる。黄い埃塵も張つてゐる。そしてその瞬間にも世は移りつゝ、動きつゝ、變りつゝあるのである。新しい大きな建物は日に日に築かれると共に、昔の古いものは日に日に破壞されて行きつゝあるのである。そして人はその新しく建てられたものにのみ目を注いで、古く壞れて行くものには目を呉れやうともしないのである。そして戀も、事業も、名譽も、富貴も、皆その人生の大波の中に沒却されて行つて了ふのである。そして忽ちにしてその姿も見えなくなつて了ふのである。(さう思へば、その太田屋の悲劇だとて、それほど悲しむには當らない。女の兒にしても、可哀相ではあるが、これとてそれだけの命と思へば、もつと早く、生れて一年も經たないのに死んで行つて了ふものもないではない。かうして此處にゐる自分だつて、いつこの世の中から亡くなつて了ふかわからない……)こんな想像がそれからそれへと湧き出して來て、容易に盡きやうとはしなかつた。

さつき、床をのべに女中が來た時、『えらく風が出て來たね。これからは寒くなるばかりだね』かうかれは言つたが、その風は凄じく屋根の角や軒や庇に當つて、樹の梢といふ梢を鳴らして行つた。そしてその轟音の中には、遠く山際を流れてゐる溪流の響も雜つてゐるやうに思はれた。

『今でも矢張雪に埋つて了ふことがあるかね?』

『ありますとも——』

女中は蒲團の上に、新しいとは言へない敷布を布きながら、

『去年なんか、十日以上も往來が止りましたもの——』

『山の中は夏は好いけども、冬はいやだね?』

『本當ともな……。だから、來月は、おらは勝木に歸るだよ』

『あつちの方が、海岸だけに雪が少いな……』

『少いともな……。勝木なら、どんなに雪がつもつても、往來のとまるやうなことはねえだでな』

で、女中は床を敷いて、『お休みなさいまし!』と言つて出て行つた。此處にはまだ電氣がなかつた。暗いランプがさびしくあたりを照した。

風は頻りに吹き募つて行つた。ゴォといふ音——その音の中に、この人世は沒して行くのではないか。戀も事業も何も彼も沒して行くのではないか。こんなことを思ひながら、かれはじつとその音に耳を聳てた。山から山へと越えて行く風の音は、何とも言はれないさびしさをかれの心に誘つた。

二五

あくる朝、かれはさびしい、荒凉とした廢驛の中にその身を見出した。かれは朝飯を終らぬ前に、『御散歩ですか?』と言つて若い主人の出して呉れる下駄を穿いて、そのまゝ戸外へと出て行つたが、何處

を見わたしても、昔の驛――榮えた驛としての面影を見出すことは出來なかつた。十の八九は畠になつてゐて、たまさかに殘つてゐるものも、壁が破れて中から腸が出てゐたり、鴨居が傾いて今にも倒れさうになつてゐたりした。昨夜の風はすつかり止んで、靜かに明けた空には朝炊の烟が眞直に上つてゐるのが見えた。

太田屋のあるところまでは行かなかつたけれども、二三町行つて引返して來たかれは、そこで家の前を掃いてゐる若い主人に話しかけた。

『丸で別なところに來たやうな氣がしますね。私が知つてゐる北中は、こんなにさびしいところではなかつた……』

『え、もう……』

若い主人は掃くのを輟めて、

『年々さびれて行くばかりです……。何うにもしやうがありませんな――』

『木材は何うしました？』

『費用ばかりかゝつて、とても間に合はないさうです――』

『さうかな……。一時は……、私の知つてゐる時分には、隨分、村上の方に出したもんですがな？』

『それにS鑛山の潰れたのが、この村に取つては好くなかつたさうです……。あれからすつかりいけ

なくなつて了つたさうですから――』

『あ、さう言へば――』加藤はふと思ひ附いたやうに、『この少し右側に、大きな、何でも北中でも一番とか二番とかいふ金持があつたと思ふけれども――？』

『井上ですか？』

『あゝさうさう、井上ッて言つたね？　あれは何うしたね？』

『皆な死んで了ひましてな……。あれは滅茶滅茶でさ――』

『あのお爺さんがゐたつけがな……白髯の？』

『あれはもうずつと前に死にました。それから、その子息の嘉平と言ふのがあつたんですがな……。御存じですか何うですか？　あれが金をつかつて滅茶滅茶にして了つたのです。何しろ、あの時分には、この山の中も、風儀がわるくつて、あやしい女なんかゞ澤山に入り込んでゐましたでな』

『さうだつたな？　その時分は、お茶屋が澤山にあつて、夜になると、彼方でも此方でも三味線の音がきこえたり何かしたね？　何うしてあの時分はあんな風だつたかね？』

『何でも、年寄りの話では、村にもあゝいふ時があるもんださうでして……熱病か何かのやうなもんですな。つまり小金を持つたものが多かつた。それも自分で働いて拵へたのではなくつて、親とか爺と

かゞ殘して行つた金ですがね。その金がそこにいつまでもゐるのがいやで、出て行かうと思ふやうな時に、あゝいふ風に風儀がわくるなるなんて、年寄なんか申しますけれどもな……。それも變な話しですが――』かう言ひかけて若い主人は笑ひかけた。

『さういふことはあるかも知れんね』加藤も考へずにはゐられなかつた。『何しろ、あの時分はいやに色の白い女どもが多かつた……。熱病のやうなもんかな？　つまり一時の流行だな？　成ほどさう言へば、さういふ理窟もあるかも知れんね？』

二六

『今はもうそんなことはありませんかね？』

かう笑ひながら加藤が訊くと、

『え、もう今は？……今はそんなことは御座いませんな。それに、村はこんなにひどくなつて了ひましたし、そんな女が入つて來たつて何うすることも出來ませんでな。矢張、あゝいふことにも流行があると見えますな？』

『不思議なもんだね？』その賑かであつた遠い昔を思ひ浮かべると言ふやうにして加藤は言つたが、

『それに、もう、あの時代の人も澤山は殘つてゐないだらうからね？』

『え、もう丸で人が違ひました。今では大抵、あの時分騷いだ人達の息子の時代になつてゐますでな』

『さうだらうな』（不思議なもんだな、人生といふものは！）あとの一句は口に出しては言はなかつた。

『その時分、竹屋といふ料理屋があつたね？　あれも、ぢきつぶれて了つたかね？』

『あ、覺えてゐます……。あの向うの端の方にあつた？　あれは代が替つて十年ほど前までありましたけども……。何にせ、村が疲弊して了ひましたでな』

『あの婆さん、死んだらうな？』

『もうとうに死にました……。何でもあの娘に、お駒とか何とかいふのがあつて、大變評判だつたさうですが、それが村の若い者と逃げて、それからあそこはすつかり駄目になりまして、何でも婆さんは生れ故郷の庄内に歸つて、ぢき死んだといふことでした』

『さうかな……。あの家はことに賑やかで、女が五人も六人もゐたのを見たことがあつたがな――』

若い主人はまた手を動かし出した。箒のあとは綺麗に際立つてついて行つた。昨夜の風に何處からともなく吹き寄せられた落葉は、ガサガサと音を立てるほど堆くなつてゐた。

『もう冬だね？』

加藤はまた話しかけた。

『えゝ』

『一體、雪の來るのは、いつだね？　もう來るかね？』

『風が立ちましたからな、もう――？　もう幾日もありませんな……。山の初雪の降るのは、もう十日も經つか經たないでせう？　何うせ來月の初めには、もう大雪が來ますでな……』

『さうかね？　雪を思ふと、うんざりするだらうね？』

『でも馴れてゐますでな……。さうなれば、家に引込んで、火燵ぐらゐしてゐれば好いんですから、のんきはのんきですな……』

『でも、何うも、此處の雪はひどい！　私も經驗があるが、降り出したとなると、一週間も十日も、晴れ間なしに降りつゞいてゐるんだから……』かう言つたが不圖思ひ出したやうに、『君は知らんかね、この向うの峠の上に茶屋があつたのを？』

『存じてをります！』

『何うしたね？　あの爺さん、婆さんは？』

『亡くなりました！……』

『二人とも？』

『え……』

『もう餘程前かね？』

『もう十二三年も前でせうかな？　私が十七八の時でした……』

『孫がゐたね？　あれは何うしたね？』かれは猶ほ訊ねた。

二七

『孫？　あれは今は村にはゐません、東京に行つてゐます……』

『貴方なぞよりは、一時代あとですかしら？』

『さうです、まだ三十にはなりませんから……。しかし、あそこの峠の店をやめてから、暫く此方に來てゐましたで、よく知つてはゐます……』

『峠の茶屋は何うしてやめになつたんですか？』

かれは一歩を進めた。

『何しろ、もう、お客なんかなくなつて了ひましたからな？　それに、爺さんも、婆さんも、年を取つてゐましたし、村の方にゐる婿が、あんな山の中の田地は賣つて引越して來た方が好いと言ふで、それで、あつちをしまつて、此方にやつて來ました……』

『あの孫の親達は何うしました？』

『東京でよくやつてゐるさうです……。何でも淺草あたりで、金物商をやつてゐるんで、そこに、あの孫も行つて手傳つてゐるとかきゝました』

『ふむ……さうかね。淺草あたりにゐるかね？　不思議なもんだな……。あの小さな可愛い男の兒の姿ははつきり今でも覺えてゐるけれど、東京あたりで、突然逢つたつて、わかりやしないからな……』

考へて、『そこで爺さんも婆さんも長くは生きてゐなかつたかね？』

若主人はちよつと躊躇して、『さうでしたな、何方が先きでしたかな……？　さうさうお婆さんの方が先だ。何でもその年の十一月にお婆さんが死ぬと、爺さんはそのあくる年の花の咲く時分に亡くなつて行つたやうでした』

『ふむ――』

すべてが土に歸して了ふさまが、おそかれ早かれ誰でも一度はさうしてこの地上から亡くなつて了ふさまが――否、五六十年も經てば世界にありとある人達が皆な別な人間になつて了ふのであるといふことが、はつきりとかれに考へられて來た。かれはわるく頭が冴えて來たのを感じた。かれは連山の上にキラキラとかゞやきのぼる朝日を眺めた。

『もう、此頃では、この山の中に入つて來るものなどは、滅多にないだらうね？』

若主人は掃集めた落葉の傍に蹲踞んで、マッチをそれに擦らうとしてゐたが、『用でもなければ入つて

來るものは御座いませんな――』

『さびしくなるばかりだね？』

『でも、もう、一番あとまで殘つたものばかりですから、これより少くはなりますまいけれども―』

『それもさうだね？』

こんなことを言ひながら、加藤はそこに立つてゐた。若主人はマッチを三度ほど摩つたが、落葉がいくらか濕つてゐると見えて、火は容易に燃え上らなかつた。煙が少し出たと思つても、すぐまたそれが消えて行つて了つた。若主人はチェと舌打して、そのまゝ傍の小屋に入つて行つて、そこから藁をさがして來た。今度はすぐ燃え出した。煙が眞直に朝の冷たい空氣の中に颺つた。

『眞三や！』

かう奥から母親の呼ぶ聲がした。と若主人は箒を羽目に立てかけたまゝ、急いで店へと入つて行つた。あとに加藤はひとりぼんやりと立つてゐた。その落葉からは、黄い灰色の烟が巴渦のやうに捲きあがつてゐたが、やがてぱつと燃え上つた。

二八

旅舍の若主人が先に立つた。あとからかれは續いた。かれ等は北中の昔の驛の址を見て、それから追

分のところへと來懸りつゝあつた。

到るところ畠になつてゐた。否ある場所は、その畠にすらもならずに、そのまゝ放棄されてあるのなどもあつた。それに、人の住まなくなつた家屋が、庇落ち、軒傾いてところどころに殘つてゐるのが、何とも言へず慘ましい感じを加藤に誘つた。かれは人間廢滅の慘めな縮圖をそこに見たやうな氣がした。

『何うしてかう立ち腐れにして置くんですね？』

かうかれは訊いて見た。若い主人の話すところでは、それは面倒であるからであるといふことであつた。それに、壞すにしても費用がかゝる。それを何處かに持つて行つて建て直すとか何とかいふならば損はないけれど、壞して薪にするのでは、とても間に合はないので、それであのまゝにしてあるといふことであつた。

『でも壞して畠にすれば、あとが何にでもなるぢやありませんか？』

『いや、そんなにまでして畠を拵へなくつても、立派な畠がいくらも空いてゐるんですから……。今では、耕す人の方がぐつと少いんでな』

『ふむ、さうですかね？　そんなになつて了つたんですかね？』

こんなことを言ひながら二人は歩いた。ぽつゝりぽつゝり人家があるばかりで、それも以前のやうに店屋ではなしに、全く百姓の住居らしい家ばかりが續いた。殆んど見覺えのある家はないと言つても好

いくらゐであつた。

何でも、驛の中ほどの右側に、此處等で一番の金持と言はれた人の大きな邸宅があつた筈であつた。たしか寺井と呼ばれた筈だッた。その時分聞いた話では、三百年ほど前には、葡萄から小國まで七里の間、全く人家がなくて、旅客が困つたので――雪に倒れて死ぬものなどが多かつたので、その金持の寺井の先祖が、先祖と言つても五代ほど前の男ださうだが、それが始めてそこに茶店を出し、夥しく繁昌して、時の間に金持になつた。で、それをきいて、人々があちこちから集まつて來たのが北中の驛の出來る始めであつたといふことであつた。加藤はその時分、その話をきいて、面白いと思つてよくその大きな黑塀の邸宅の前を通つたものだッた。

行つても行つても、さうした邸の面影もないので、

『此處に、村一番の金持がゐた筈だが――たしか寺井と言つた――？』

かう言つて加藤が訊くと、

『あ、それはもうありません……。潰れて了ひました』

『潰れましたか？』

若主人はそのまゝ十間ほどあとに戻つて、『さうです……。寺井の邸のあつたところは此處でした。大きなものでしたがな……？　貴方は御存じでしたか？　あそこに、妾がゐたことを……。綺麗な東京生

れの妾が――？』

『いや――』

『綺麗な女でした。寺井の主人は私の子供の頃に、五十ぐらゐでしたが、その妾は二十六ぐらゐでした。佳い女でした。何でもその女のために、寺井の主人は命を縮めたといふことでした。あとでは、丸で人交際などはせずに、全く家にばかり引籠んでゐたさうですから――誰が行つても逢はなかつたさうですから』

二九

『矢張、それぢや女だね？』

『さうです……。御存じありませんかな。それは田舍などでは見たくも見られないやうな美しい女でしたが、すつかりそれに溺れちやつて、たうとう五十六で死んで了ひました。あとには、男の兒が本妻の方にゐましたけれども、何うにもならずに、滅茶滅茶になつて了つたらしいですな……』

『ぢや、その妾が皆な横領して了つたわけかね？』

『何でもすつかり、その女のものになるやうな遺言狀があつたとかでな……。色々人が入りましたけども、何うすることも出來ませなんだ……。さうかうしてゐる中、その女の情夫である辯護士がやつて

來ましてな、すつかり田地でも邸でも賣拂つて、金にして東京に行つて了ひました』

『金持とか、何とか言つても、長くは住つてゐないもんだな？　僅か二十年の間に、さういふ風に、いろいろなことがあるんだからな……』

心から痛感したといふやうにして加藤は言つた。

で、二人は靜かに竝んで歩いた。前には眞直な路がある。午前の日影の明るく照つた路がある。それも以前と比べては、手を入れることは稀であると見えて、草が生えたり石がごろごろしてゐたりしたが、しかもそれだけは、その路だけは、昔のまゝの道であつた。かれが稅を集めに歩いたり、また長兵衞が種々な考へを抱いて歩いたりした道であつた。山の緣に流れてゐる溪流は、昔のまゝにあたりに響きわたつてきこえた。

そこから追分まではもういくらもなかつた。二三町ぐらゐしかなかつた。

しかしあたりはあまりに違つてゐた。此方側はすべて畠になつてゐるばかりではなく、その時分あつた里程標もなく、海岸の方へわかれて行つてゐる路にも、草が一杯に生えてゐた。ちよつと見てはこれが追分とは何うしても思へなかつた。

『此處です！　追分は』

あとから若い主人はかう呼び留めた。

加藤は二三歩あとに戻つて來たが、『あゝ此處か？　此處が追分か？』不思議さうにして、『ぢや此家ですか？　太田屋は？』

『さうです』

かれの前には夥しく破壞された――二階が半分倒れ、下階も三分通り傾いた、大風でも吹けば一度に倒れて了ふであらうと思はれる古い大きな家屋の殘骸が立つてゐた。成ほどさう言はれて見れば、昔見覺えのある太田屋の二階に相違なかつた。

しかしその周圍にあつた土藏や物置や垣などがすつかりなくなつて了つてゐるので、丸で別のものの やうにも思はれないことはなかつた。若い主人が說明して呉れるので、それでわかつたやうなもの〻、ひとりやつて來ては、ちよつと見當が附かなかつたかも知れなかつた。

それでも、さういふ風に夥しく破壞されてあつても、じつと見詰めてゐる中には、戸、壁、入口の扉など、次第にかれに昔の記憶を思ひ出させて來た。かれはたまらなくなつかしくなつて來た。これが、この戸が、壁が、扉が昔のまゝであると思ふと、何とも言はれない氣がした。かれは歩み寄つた。

三〇

そこから半町ほど先になつてゐる分家に行つて、鍵を借りて來た若主人は、やがて其處の扉を明けた。

『此處は昔のまゝですかな？』

却て若主人の方が、かう言つて加藤に訊いた。

『さう、昔のまゝだ――』

『この扉も、戸も、皆さうですか？』

『たしか此方に、もう一つ入口があつた筈だが――』廻つて見て、『さうだ……。壞れてからなくなつたか……此處がその入口だつたんだ……。昔は大名なんかはこの扉から入つたさうだけども、普通の旅客は大抵そつちから入つたもんだ……』

『貴方なぞも、矢張、そつちから入られたんですか？』

『さうだ……』

かう言ひながら加藤は家の中へと入つて行つた。長い年月の塵埃が、扉の格子にも、棧にも、閾にも積つて、ちよつと觸れるにも手が白くなつた。埃の臭ひ――一種言ふに言はれない敗滅の匂ひが夥しくかれ等の鼻を衝いた。

『何年にも、人が入つたことがないと見えるね？』

『え、え、そのまゝでせう？　その事件のあつた後、誰も入つたものは御座いますまいから？』

『ふむ』

で、二人は始めの室から厨、厨から奥の方へと行つて見た。そこには依然としてその大きな圍爐裏が横はつてゐて、いつともわからない榾のもえさしが二つ三つ殘つてゐた。

『此處だよ、その巡査がよく酒を飲んでゐたところは？……』

加藤がかう指し示すと、若主人は始めてそれと知つたらしく、

『貴方は、それぢや、御覽になつたことがあるんですか？』

『あるとも――よく毎日のやうに來てゐたんだよ』その位置を指し示しながら、『此處に此の家の主人が坐つてゐて、それは相對して坐つて酒を飲んでゐたもんだ……。おい、お上さん、もう一本お呉れな！　なんて言つてね。さう言へば、あの時分から變だつたのかも知れないね。よく上さんと戯談口なんかきいてゐたからね』加藤の眼には、その時分のさまが――獵師が二三人來て話をしてゐた時のさまが、はつきりと浮かんで見えた。

『さうですかね？』

『それを考へると、人間といふものは儚ないもんだね？　その實在のものよりも、あとの方が長く殘つてゐるんだからね？』

上さんがちよつと綺麗に身じまひなどをして、そこに立つてゐるのがはつきりと見えるやうな氣がした。

『それにしても、何うしてそんなことになつたのかな？』

『本當ですな』かう言つたが、若主人はその向うの方を指して、『何でも、子供達の殺されてゐたのは、そこだつたさうです？』

『ふむ……』

『何でも、女の子の方がじつとして殺されてゐたといふことです……』

『さうかな……』

こんな話をしながら、二人は奥の方へと行つた。

雨戸一枚明けると、明るい光線がすつと線を成して室の中までさし込んで來た。しかし、その時、すつかり掃除したり拭つたりして了つたと見えて、その慘劇の血の跡は、何處にもはつきりと見當らなかつた。唯それらしく思はれるものが、微に襖に點々として殘つてゐるばかりであつた。

三一

若い主人は自分で見たわけでもなかつたけれども、人から聞いた話をいろいろと話してきかせた。何でも巡査はその緣側に仰向けになつて斬られて死んでゐたといふことであつた。若主人は其上さんの死

んでゐた位置などを示した。

加藤には人間敗滅のあさましさが、種々苦悶に虐まれた揚句、全く塵埃に埋もれて了ふあさましさが、はつきりと眼の前に浮かんで來たやうな氣がした。しかし、かうした跡もさう長くはこの世の中に殘つてゐはしないであらう。もう少し經てば——あと二三年も經てば、そのあとさへもすつかり亡くなつて了ふであらう。そして全く野の畠になつて了ふであらう。麥や草がその上に生えるだらう？　で、かれは悵然として暫く默つてゐたが、ふと思ひ附いたやうに、

『それで、その巡査の方のあとは何うしたね？』

『何でも、上さんがやつて來て泣いてゐたさうです……』

『子供があつたのかね？』

『何でも二人か三人あつたさうです。さう言へば、此間、その總領の娘か何かが、今年二十三四で、鶴岡で女郎をしてゐるツていふことをきゝました……』

『ふむ——』かう言つたが、加藤は深く考へるやうにして、『それといふのも、皆な忍耐が足りないから起るんだ……。太田屋の場合は何ういふ場合だッたかよくわからないけれども、忍耐すれば、こんなことにはならずに、今まで生きてゐることが出來たかも知れない……。しかし、忍耐が出來ないこともあるにはあるけれども、そこをこらえなければいけないんだな……。人間は一つ間違へば、皆なかうい

ふことになつて了ふんだからな……。心といふものは怖い、恐ろしいもんだからな』

『本當で御座いますな……』

『しかし五十歩、百歩だ……。何うせ、人間は一度は死ぬんだ……』かう感傷的に加藤は言つて、そしてそのまゝ此方へと出て來た。あとで若主人の雨戸を閉める氣勢がした。

二階——かれの始終泊つた二階の六疊の間にも入つて見たいと思つたのであつたけれども、階段が壞れてゐて、とてもその上までのぼつて行くことは出來なかつた。それに、塵埃も堆く積つてゐた。かれはのぼりかけて見たが、そのまゝ斷念して下りて來た。

『駄目ですか？』かう下から若主人が言つた。

『無理に行けば、行けないこともないけれども、ところどころ垂木が落てゐて危いからね？』

『そんなにひどいですか？』

『それに、ほこりがひどくつて、とても堪らん……』かう言つて、下に下りて來て、『イヤ、もう澤山だ——』

『さうですか……。見たつて、別にめづらしいこともないでせうから……』

で、二人はそのまゝ入口の方へと出て來た。『こんなにして放つて置いても、無駄には無駄だから、早く壞すなら壞す方が好いんだけども……』若い主人はこんなことを言つて出て來た。やがて扉も、戸も

元のやうに閉められた。寂寞が永久にあたりを鎖した。

そこにかれ等の出て來るのを待つてゐた分家の上さんは、『此の方けえ？　昔來たつて言ふのは？　おら、忘れちやつたな？　何せ、遠い昔のこんだでな！　まあ、おらが家に來さつせ！　茶でも上げるで……』無理にかれ等を其方へ伴れて行つた。

三二

分家の上さんの話は、更に細かなものであつた。かの女の言ふ所に由ると、すべてひよつとした行懸りで、刹那の間にさうした慘劇が行はれたのであるといふことであつた。運わるくそこに巡査が來てゐた。また、運わるくそこに、村上の女に絶望して、いくらかやけに近い心持で長兵衛が歸つて來た。『しかしな、ひよつとさういふことが出來したけども、矢張、平生が肝心だよな。さういふ恐ろしい種は平生に蒔かれてゐることでな？　矢張、村上の女に惚れてゐただな？　そつちで失望して了ふと、もう生きてゐたつてしやうがないやうな氣がしただな、きつと……。それで、あんなことが始まつたゞよ』かう分家の上さんは言つた。

『村上の女は何うしました？』

當然問うべきことを今まで問はなかつたといふやうにして加藤は訊いた。

『一度、お墓參りに内所でやつて來たつけ、おらは行き逢つたけども、そんなにわりい女でもねえだよ』

『まだ村上にゐるのかね？』

『何でも平林の百姓の上さんになつたつていふこんだよ……。もう、今ぢや四十五六だで、藝者もしてゐられめいからな』

『佳い女でしたか？』

『さうだな、此處等にはちよつとあのぐれゐな女はねえだな。お墓の歸りに、こゝに寄つたが、泣いてな、眼を眞赤にしてゐたよ。私が、あの二人の子供さへ引受けてやれば、あんなことは出來なかつたのに……ッて言つてな。何でも長兵衛さん、その前の日にそのことでその女のところに相談に行つただな。すると女はそれをはねつけただ？　そんなことは出來ねえッて言つただよ。それをな、女は非常に申譯がないッて言つてゐたよ。まアかう言つて來る女だで、わるい女ぢやねえ。あゝいふ稼業をしてゐれば、何うしたつて、さういふ風になるでな？』

『人間はそこを注意しなければならんな？　一番そこが怖い。そしてそれは皆なヤケから起つて來る！』加藤は若主人の方を向きながら言つた。

一時間ほどゐて、加藤達はそこを出て來た。加藤はもう一日北中に泊ることに決心して、その一家の

墓のある方へと今度は案内して貰つた。

それは山裾のさびしい寺であつた。村がさびれたと同時に、寺も夥しく大破して、本堂には雨が洩り、落葉が堂の中まで吹き入れられるといふ光景であつた。庫裡からは、汚い法衣を着けた子僧が出て來た。

それでも墓石はちやんと立つてゐた。誰か來て手向けて行くと見えて、花はいつも絶えたことはないといふ話しであつた。矢張『皆な可哀相に思つてゐると見えて、子供の墓には、特に花が多く上げられてありました。その當時は、隨分、お參りするものがありました……。何でも子供の墓にお詣りすると、災難を遁れるとか何とか言つてな――矢張田舍ですからな……。同情の塊かさういふ風になつて行くんですな……』若い主人はこんな風に話した。

加藤は不思議な氣がした。その慘劇がはつきりとその目の前にあらはれて來るやうな氣がした。かれは色濃く染められてある戀愛と、その止み難い心の犧牲になつた人達の運命とを、それからそれへと繰返さずにはゐられなかつた。かれは水を灌いでその墓の前に手を合はせた。

三三

加藤が歸つて行つてから、また年月が經つた。廐屋の娘は小國の金持に嫁ぎ、若主人夫婦には始めは男、次ぎは女、その次は女といふやうにつゞけて子供が出來て育つて行つた。分家の上さんは、加藤が

來た翌々年の夏、心臓がわるいなどと言つてゐたが、その冬にはもう此世の人ではなかつた。

雪は依然として凄じく降つた。此頃では十日も二十日も交通の絶えて了ふことはめづらしくなかつた。汽車のレイルの通つてゐるところは、日に日にひらけて行つて、新しい文化も入つて來てゐるけれども、それから五六里も山の中に入つた地方は、全く顧みられずに、荒廢したまゝにまかせられてあつた。冬は三月の間、全く埋もれ果たやうにして暮した。

追分のところはいつか全く畠になつて了つてゐた。もはやそこには、昔の旅舍のあとも、あの慘劇のあつた二階屋もなかつた。すべて全くもとに歸した。再び自然に戻つて了つた。

その追分から少し行つたところに、地味がわるいので、松を栽えたり甘藷をつくつたりして、いろいろと經營した廣々とした土地があつたが――時には桃畠や梨子畑にしやうとしたことなどもあつたが、驛が荒廢するにつれて、次第に、さうした不毛地は人が構はなくなつて、後には全く篠やら萱やら低い草やらの生えるところとなつて了つた。春先には村の子供達がよくそこに紙鳶を揚げに來た。

『おい！』

『何だ？　何うしたんだ？』

『早く此方に來ろよ！』

などといふ子供の聲がその廣場に響きわたつた。

紙鳶にはいろいろなものがあつた。達磨の繪を描いたのもあれば、おかめをそのまゝ切りぬいたものもあつた。かと思ふと奴凧の形をしたのも揚がつた。風の強い日には、尾を長くつけ、うなりを大空に響かせて、いかにも得意さうに紙鳶を眺めてゐる子供達などもあつた。

時には此方の凧を其方の凧がすくつたりした。と、すくはれた凧は倒になつて眞直に落ちた。子供達はワイワイ言ひながらその方へと一生懸命に走つて行つた。かと思ふと、一方には、遠く離れて、靜かにあがつてゐる紙鳶などもあつた。

夕暮近くなつても、子供達は容易にその廣場から歸つて來なかつた。爲方なしに、子供達の母親だの、兄だのが迎へに行つた。

『定や！』

『正や……もう、御飯だからお歸り！　いつまでゐると、狼や狐に喰はれるだ……』

『おらが家の雄次を呼んでくれや！　そら、そこにゐるで』

こんな聲があたりに滿ちた。で、子供達は紙鳶の尾を長く曳き摺つたり、絲卷の絲をほつたらかしたりして、てんでに自分の家の方へと歸つて行つた。あとはしんとなつた。全く寂寞があたりを領した。やがて夜の帳が空を蔽ふと、今度は天上の星――いつまで經つてもその歡樂とその光彩とを失はない星と月とが、燦爛としてその饗宴をそこに展げて來るのであつた。と、下界では、山の裾を繞つた溪流

が、さながらそれを羨むやうに――その變らないいつもの饗宴を羨むやうに、微に音を立てて流れて行つた。

曠野の戀

曠野の戀

政代には何が何だかわからないやうな氣がした。何うしてかう自分は複雜した運命の中にゐるのか。何うしてかう自分でもわからないやうな人生の巴渦の中に浮きつ沈みつしてゐるのか。それはかの女に取つては、人生は苦痛の世界ばかりではなかつた。また歡樂の世界ばかりでもなかつた。不幸な世間であると共に、このまゝ捨て去つて了ふには惜いやうな氣のする世間であつた。しかし數奇と謂つて好いか、不運と言つて好いか、それともまた不遇と言つて好いか、それは判然とかの女自身にもわからなかつた。

世間は自分について何と言つてゐるか。何と批評してゐるか。それは判然わからなかつたけれども——第三者の言つてゐることは到底完全にわかりやう筈はなかつたけれども、兎に角、餘り好く言つてゐないのはわかり切つてゐることであつた。或は毒婦と言つてゐるかも知れなかつた。或はまた虚榮に富んだ、男を騙すことなどは眼中に置いてゐない、始末に終へない女として眺められてゐるかも知れな

かつた。現にさうした批評は多少耳に挾んだこともあつたし、さうした人達に齒されない冷たい眼色に邂逅したことも、決して一度や二度ではなかつたのである。しかしかの女は、他から、世間の女達からさういふ風に眺められることを寧ろ得意にしてはゐなかつたか。

『尠くとも、自分は美しい』

かう思つて、さうした冷めたい多くの眼色に對しても、思ふ存分振舞ふやうな態度を見せることを得意にしては來なかつたか。否、さうした態度のために益々世間から誤解されるやうな形になつて行つたのではなかつたか。

『そんなことは思ふまい……、いくら思つたつて、しやうがない……』

かう自分に言つて、政代はぴたりとその集まつて來る考へを押へて見た。しかし、それは容易にとゞまらうとはしなかつた。却てあべこべに、いろ〳〵なことが雜然としてかの女の頭の周圍に湧くやうに集まつて來た。

急にかの女自身が可哀相になつて來た。さうした數奇な生活をやつて來たかの女が悲しくなつて來た。かの女とて、決して世間で思つてゐるやうなさうした女ではない……。やさしい心もあれば、眞面目な心もある。涙もあれば眞もある。男のために死なうと思つたことも一度や二度ではない……。否、あのSのためには出來るだけのことを自分は盡した。女として誰に話しても同情され得るだけのまごゝ

ろをかの女は盡した。しかし何うにもならなかつた。いくらまごゝろを見せても、戀心を燃やして見せても、何うにもならなかつた。何故だらう？　かの女が我儘であつた爲か。一本氣に、眞直に、そつちにばかり心を向けてやつて來たためか。その時、Sは言つた。

『矢張さうだ……。お前はさうしてはゐられない女なんだ。家庭をつくつて、子供の面倒を見たり何かしてはゐられない女なんだ。しかし、さう言つたからとて、決してお前を責るには當らない。さうお前は出來てゐるんだから……。まア、爲方がない。各自に行く道を行くより他爲方がない』かうSは言つて、理解して別れて行つて呉れた。

夫からもう十年近い年月は經つて行つた。その間に何があつたか。何ういふことがあつたか。何ういふ運命がかの女と一緒に伴侶になつて行つたか。かう思ふと、政代は堪らなくなつて袖で顔を掩ふやうにした。

『その爲か？　さうした性質が、この自分の體の何處かにひそんでゐるためか。いや、それは性質ではなくて、他に、さうなつて行かなければならない徑路があつたのか？』何は措いても、さうしたことが、その移り易い無條件に新しい戀の方に引張られて行く心と體とが、かの女に、さうした數奇な運命

を齎らして來たに相違なかつた。

丁度それは暗い闇の中に、美しい目も眩ゆくなるやうな、色彩の濃やかな虹を懸けたやうなものであつた。政代はその虹なしにはゐられなかつた。その美しい虹を闇の中に想像せずには生きてゐられなかつた。そのために、そのためにのみ、かの女はその落着いてゐなければならないところから出て來た。そのためにあらゆるものを犧牲にしてそして出て來た。

そのそゞろな、喜びに戰慄するやうな心持――それに比べたなら、その刹那の歡樂に比べたなら、長い、暗い、淋しい一生などは何うでも好いやうな氣がした。二つの心と心との燃燒、魂と魂との抱合、それを頭に浮べると、何うして、世間の多くの人達は、女達は、その歡樂のために、身も世も投げ出して了はないのであらうかと疑はれた。また何うして、その暗いさびしい、長い夜のやうな闇の中に躊躇つて平氣で暮らしてゐるかゞわからないやうな氣がした。

かの女には遠い、遠い滿洲の田舍の停車場が思ひ出されて來てゐた。そこには、高粱は既に刈り取られて、廣漠とした野に夕暮の雲のさびしく赤く靡いてゐるのが見えた。さながら繪のやうに。新しい描法を以て巧みに描き出されたすぐれた繪のやうに――。それを、その野を、その夕暮の雲を、その停車場の窓のところに立つて、凝と深く眺めた時のことをかの女は思ひ出した。

そこから出て行く汽車は、その夜の九時に、その西滿洲のある溫泉に着く筈であつた。そして溫泉

の旅舍には――その設備が滿洲で一番すぐれてゐると言はれてゐるその旅舍には、かの女に逢ふために、かの女と靜かにそこに一夜を語り明すために、反對の方面から、ある男が同時にやつて來ることになつてゐるのであつた。それは譬へて見れば、丁度、一つの直線の上に、二つの燃えかゝつた心があつて、それが兩方から、汽車の進んで行くにつれて、次第に互ひに近づきつゝあるやうなものであつた。政代の心は、そゞろに喜びに慄へずには居られなかつた。

その男はKであつた。滿洲でも若い實業家としてその名を知られてゐるKであつた。かの女は、汽車に乘つてからも、堪らなく胸が躍つた。遂に、そこに、かれがゐた！　かの女を待つてゐたかれがゐた！　といふやうな氣がした。否、かの女の今まで經て來たすべての徑路は、こゝに達するために、そのかれに達するために、長い間準備されてゐたやうにすら政代には思はれた。かの女は、二三人しか客の乘つてゐない二等室の隅のところに、窓の方に向つて坐つて、絶えず動いて行つてゐる荒涼とした野を眺めた。

やがて明るい光線がぱつと室内に張りわたつて來たと思つて、ゆくりなく其方を見た時には、そこには、今しも、大きな、銅の盆のやうな日輪が、廣い淋しい野の地平線の上に光焜もなく淋しく落ちて行くところであつた。かの女は、何とも言はれない心持で、じつとそれを見入つた時のことを思ひ出した。

荒漠とした滿洲の野に、大きな夕日が落ちて行つたさまを政代はつゞいて思ひ起した。平生ならば、とても堪へられないほどのさびしさが身を襲つて來たであらうが、その日はKがその溫泉場に向うから一刻毎に近づきつゝあることを思つて、さびしいとも悲しいとも思はなかつた。かうした異鄕の野にさまよふ數奇な運命をも歎きはしなかつた。かの女は一年に近い間、彼方から此方へと漂泊して行つたことを思ひ出した。いろ〳〵な人にも、いろ〳〵な事件にも、種々な悲喜劇にも逢つたことを思ひ出した。かの女は舞臺にも立つた。自信もない歌を大膽に舞臺で唄つて見た。人形などを持つて行つて、その異鄕の人達に高く賣りつけても見た。北京に行つた時には、その紹介の好かつたのと、そのために好いところに入れたのと、かの女の美貌と、その巧なお世辭とのために、その人形賣の行商が思ひの外に成功して、その間少しも旅費の心配がなかつたばかりでなく、歸つて來た時には、儲けた金が思つたよりも多額に胴卷の中に藏はれてあつたことを思ひ出した。

『あゝもう東京に歸らう。こんなに、いつまでも異鄕にさまよつて、言はばまア、耻辱を曝してゐるよりも、これを機會に、東京に歸らう。さうだ、それが好い』かういふ風に思つて、かの女は北京から大連へと歸つて來た。そこには、豫てかの女の間借をしてゐた二階の一間があつて、一つ二つの行李や

ら、荷物やらがそのまゝそこにあづけて置いてあるのであつた。また、東京の方から來る消息なども、其處でかの女の歸つて來るのを待つてゐるのであつた。しかしそれよりもかの女の心の中に、次第に微かに幻影となりつゝあつたのは、そこの、その大連の市街のB街にあるY商會の大きな建物であつた。政代はその商會の一室にその主人であるKと相見ることを樂んだ。その明るい顏と快活な聲と眞面目な話とに接することを樂んだ。恐らく、その時そこに訪ねて行つた時、いつものやうにKがゐて、莞爾としてかの女を迎へて呉れたなら、假令戀心は起つたにしても、さうした仲になるやうなことはなかつたであらう。しかし、不幸にしてKはゐなかつた。商用で、朝鮮の京城へ出かけて行つてゐて、もう歸つて來る日取にはなつてゐるけれども、いつ歸つて來るかといふことは、よくはつきりわからなかつた。政代は失望した。しかし何うすることも出來なかつた。そこの支配人のAと北京の話などをして歸つて來た。

かの女はその下宿のさびしい後園に、草花の赤や黃や紫が、すつかり初冬の霜に萎れて了つてゐるのを見出した。何とも言はれないさびしい悲しい心持がした。今まで經て來た自分の境涯が一つ一つその前に展げられて來るやうな氣がした。そしてその數奇な美しい繪卷も既にその半を展げ盡したやうな氣がした。かの女は最早三十に近かつた。いつまでその美貌と戀心とを賴りにしてゐることは出來ないやうにも思はれた。それに、冬になつて行く滿洲の空がさびしかつた。懷鄕の心が湧くやうに起つて來

た。政代は久し振で、東京にゐるある新聞記者に手紙などを書く氣にすらなつた。

『もう、冬だわね。これからは寒くなるばかりね』

こんなことを政代は宿の上さんに言つた。その二階の一室から見える碧い海には鷗に似た白い鳥が頻に縱横に飛び交してゐた。夕暮などに聞くボウといふ汽船の音が何とも言はれない悲しい情緒をかの女の心の中に捲き起した。

愈々東京に歸る支度をして、下宿の上さんなどとも別れを惜み、もう一度それとなしに商會に寄つて見ると、この間はゐなかつた書記のM氏が丁度居合せて、

『谷山さん、好いところに來た。大將、歸つて來ますぜ』

かう言つて莞爾して迎へた。

『さう……何時？』

『明日は歸つて來ます』

『さう？　逢つて行きたいわね。私、今日、午後の三時の汽車で立つて行くつもりにしてゐたんだけど……』

『え？』

とM氏は驚いたやうにして、『もう、そんなに早く歸るんですか。ちつとも知らなかつた。何うして、そんなに早く歸ることになつたのです……？　もう少しゐらつしやい』

『でもね』

『懷鄕病ですか？』かう言つてM氏は笑つて、『大將とも話してゐたんですぜ、貴方が北京から歸つて來たら、大いに歡迎しようぢやないかなんて言つてゐたんですぜ。行商は成功でしたッてね？　何うかと思つて、大將も心配して居たんですよ』

『難有う……お蔭で、遊んでて、行商が出來ました。皆さん、めづらしがつて歡迎して呉れたんですもの……。あ、さう言へば、Tさんにも逢ひましたよ。あの人にもいろいろお世話になりました。貴方にもよろしくッて……』

『達者ですか、先生』

『え、元氣だわ……面白い方ね、あの方！　北京をあつちこつちと引張り廻して貰ひましたよ』

『さうでしたか？　それは好う御座んした……』M氏はかう言つたがやがて話をあとに戻して、『何うして貴方は、また、さう早く東京に歸りたくなつたんです？』

『だつて淋しくなつちやつたんですもの！』

『たうとう、本音を吐きましたな……。夫は、これからは滿洲は寒くなりますからね。夫はとても長くはゐられないでせうけれどもね。今日立つは急ですね。まるで足下から鳥が飛び立つやうですね』

『でも、もうすつかり支度して了つたんですもの……』政代は考へて、『何うかして逢ひたいわね、Kさんに？』

『大將も、そんなに早く、貴方が歸つたつて聞くと、殘念がりますよ。此間から、貴方が歸つて來たらなんて、いろ〳〵言つてゐたんですもの』

『私だつて、逢つてお禮を申して行かなければ、義理もすまないんですけれども……』また考へるやうにして『そして、Kさん、今何處にゐらつしやるの？』

『奉天にゐます』

『もう、奉天に來てらつしやるの？』

ある考へが忽ち政代の心頭を微妙に掠めて行つた。

『處はわかつてゐて？』

『何でも、今夜湯崗子あたりに來て泊るらしいですよ』

『さう……？　そんなら、都合が好いわ。あそこで、私、お待ちしてお目にかゝりますわ』

『あゝそれが好い、それが好い』

かう言つたM氏の顏の表情にもさつき政代の心頭を掠めて行つたと同じ考へが微妙に通つて行つたらしかつた。けれどもしかしM氏はそれと口には出さなかつた。

『それぢや、私から奉天に電報を打つて置きます。貴方が今夜湯崗子で待合せるつていふことを……。それが好い、それが好い』

かうM氏は氣さくに言つた。

大きな、火の玉のやうな落日が荒凉とした濶い地平線に沒して了つてからも、野はまだ暫くの間明るかつた。低い丘がなだらかに連つて見えたり、楊柳の村が飛び飛びにさびしさうにあらはれて見えたり、路がうね〳〵と丘から丘へと續いてゐるのが指さゝれたりした。かうしたさびしい野に住む人達にも樂しい夕暮の團欒はあるらしく、小さな四角な白ちやけた民家から、細い煙が絲のやうに靜かに眞直に昇つてゐるのが見えた。

到るところの停車場では、もう既に灯がついてゐた。

突然、ある停車場から乘り込んで來た二人づれの男は、相應な紳士であつたらしかつたけれども、しかも此方を見て、頻に何か含言葉見たいなことを言つてゐるのが、政代には不愉快であつた。獨りで汽

車に乘つてゐる場合、此方が一人で向うが二人である場合さうしたことは、免れないことではあつたけれども――またさうしたことを氣にしてはかうした旅も出來ないわけであつたけれども、しかも、その話が、かの女に對する批評が、久しく經つても容易に止まうとはしなかつた。かれ等はかの女をそこらにざらに出沒してゐる醜業婦の群の一人にして話してゐるらしかつた。政代は益々不愉快になつた。

しかし幸にもそれは長い間ではなかつた。K驛に來ると、その二人は此方を見い〳〵、さも此方に思ひを殘して汽車を下りて行つた。最早あたりはすつかり暗くなつてゐた。此處は、こゝらでは大きな一中心を成してゐる市街であるのに拘らず、灯もぽつ〳〵と二つ三つそこらに見えてゐるばかりで、いかにも曠野の中のさびしい町といふ氣が政代にはした。

さうした目ざはりな、いやな奴が下りたので、政代はほつと溜息をつくやうな氣持になつたが、それと同時に、强く張るやうに押し寄せて來たのは、今夜のことであつた。このさびしいひとりの心を何ういふ風にKが取扱つて呉れるかといふことであつた。M氏が打つて呉れた電報の返電、奉天からのその返電――それは簡單に、＝シヤウチシタ＝の一語であつたけれども、その一語の中にも、此方の戀心と同じやうな戀心が名殘なく藏されてあるやうな心持がした。かの女はくわつと體の震へて來るやうな思ひに滿された。

それに、かうした曠野の中に燃え出して來た戀といふことが、かの女に尠からずロマンチックな心を

誘つた。それも、もし北京からかの女が歸つて來た時、Kがいつものやうにそこにゐて、普通にかの女を迎へて呉れたなら――また時がさうしたさびしい初冬でなく、懷鄕病も起つて來てゐず、港の汽船の音も、さうした心を催し起さなかつたならば、かうした戀は起つて來なかつたかも知れなかつたのであつた。それはかの女は既にあまりに長くそのひとりに倦んではゐた。且張り詰めた心に餘りに多く疲れてはゐた。しかし、猶かうした好機がかの女の眼の前にあらはれて來なかつたならば――兩方から一つの場所へ、夜の溫泉場へ落合ふといふやうなはめになつて行かなかつたならば、かうしたあつい戀心は決して燃えて來なかつたに相違なかつた。かの女は不思議な氣がした。かの女はこれから何うなつて行くかわからない自分の運命を凝と見詰めるやうな氣分になつた。それにしても、その溫泉場は何ういふところであらうか。何ういふ風にかの女の前にあらはれて來るであらうか。また何ういふ一夜がかの女の前に待構へてゐるであらうか。かう思つてゐる間にも、汽車は轟々と闇を衝いて、次第に湯崗子へと向つて駛つた。

湯崗子で下りたのは、かの女と二三人の支那人とだけであつた。曠野の夜の中の停車場、さびしい停車場、改札が眠さうに欠びをしてゐる停車場、それ以上に、其處にかの女は何をも見出すことが出來な

かつた。溫泉場は果して何處にあるのか、その近くにあるのか、それともまたいくらか離れたところにあるのか、それすらはつきりとはわからなかつた。政代は一度切符を渡して、停車場を外に出ては見たが、あたりは唯眞暗な闇で何うすることも出來ないので、そのまゝ引返して、改札に訊いて見た。

『溫泉ですか。それぢや、そこにお行きなさい。そら、そこに、すぐ前に灯の見えてゐる家があるでせう。あそこに、ホテルの番頭か何かが來てゐる筈ですから』

かう敎へて呉れた。しかしそれが十分に呑み込めないといふやうにして、政代が立つて躊躇してゐると、そこは田舍のひまな停車場だけに、また對手が美しい女であるだけに、そのまゝ改札は先に立つて、

『ぢや、私についてゐらつしやい』かう言つてすた〳〵歩き出した。

歩きながら、

『車はないんですか？　此處には？』

かう政代は訊いて見た。

『あるにはあるんですけれども、今日はゐません。何しろ一臺しかありませんからな、さつき支那人が乘つて行つて了ひました。それに近いんですからな』

『溫泉ですか？』

『え――』

『何の位あるんですか？』

『何の位つて、五六町しかありやしませんよ。そら、そこに』かう言つて闇の曠野を指して、『そこに、灯が見えるでせう。ぽつつりと……。あれが溫泉のホテルですよ』

『宿屋はホテル一軒きりなんですか？』

『他にもう一軒、小さい宿屋がありますけれど、大抵此處に來るものは、ホテルに泊りますね……』

『それにしても、淋しいところですね。湯崗子の溫泉ッて、人がよく言ふから、もつと賑かなところかと思ひましたよ』

『何しろ、かういふところですからな』

こんなことを言つてゐる間に、かれ等は旣に廂の低いある小さい家の前に來てゐた。

『おい、ホテルから、誰も來てゐないのかえ？』

かう言つて改札はずか〳〵その家へと入つて行つた。

と、奥から慌てゝ出て來たものの足音がした。

『なまけてゐてはしやうがないぢやないか。お客樣だよ』

かうまた改札は言つた。

やがて出て來た番頭は、脊の低い、いやに言葉の丁寧な四十男であつた。『ホ、今のは下りでしたか。

九時の貨車かと思つた――』かう言つて其處に立つてゐる政代を闇にすかすやうにして見たが、『何うも失禮いたしました』と言つて慌てゝ提灯に灯をつけ出した。

『何うも、此頃は、もうお客樣はないもんですから……』

『でも、汽車のつく度にはちやんと出てなくつては、うそだね。職務怠慢といふことになるよ』

笑ひながら改札が言つた。

『何うもすみませんな』

かう番頭は頭を掻いた。

政代の身に取つては、五六町でも、決して近いとは言はれなかつたけれども、しかし車が一臺もない以上、何うしてもそこまで歩いて行かなければならなかつた。で、爲方なしに、改札には禮を言つて別れて、今度は番頭の提灯について歩いた。

路は凸凹して、注意しないと、躓いて轉びさうであつた。政代はその番頭の提灯の光をたよりに、辛うじてあとからついて行つたけれど、しかもをり〳〵立留つて、もう少し緩りと行つて貰はなければならなかつた。向うにぽつつり見えてゐる灯――それも容易に近くへはやつて來なかつた。

『夏はそれで賑かなの？』

餘り默つて歩いてゐるのも無氣味なので、かう政代は言葉をかけた。

『夏も、春も、かなりに、お客があるんですけれども、これからはどうしてもさびしくなりますな――。つい一月前までは、室も一杯だつたんですけども』

『そんなに賑かだつたの？』

『何しろ、滿洲では、溫泉場と言つては、まア、此處ですからな』

『熊岳城の近くにも、あるッて言ふぢやないの？』

『あそこよりは、何うしても、此方の方が設備がよう御座んすからな』

『それで溫泉宿がホテル一軒きりなんですか』

『他にもあるにはあります』

かう言つたきりで、二人はまた默つて歩いた。

ぽつゝり闇に浮んでゐた灯は次第に近くなつて行つた。次第に、それは大きな旅舍の門の前の赤い硝子の軒燈であることがわかつた。つゞいて、深い闇の中に二階らしい建物の大きく高く立つてゐるのがわかつた。樹の繁みの中に、小さい別な灯が二つ三つチラチラと搖いでゐるのも見えた。

政代は不思議な氣がした。かうしたところに一夜泊るといふことは、それも單に自分一人ではなし

に、あとから男がやつて來るといふことは、またこの二つの心の間に戀の火が燃え始めつゝあるといふことは、數奇なかの女の半生の繪卷の中に、色彩の濃かな一頁を添へる爲に、ゆくりなく展開されて來たシイシである樣にかの女には思はれた。やがて長い砂利を敷いた路がその門の中にあらはれて來た。つゞいて、その盡きたあたりに、內地の旅舍といくらも違はない瀟洒な入口が見え出して來た。

しかもそこには灯がついてゐるだけで誰もゐなかつた。

番頭はチョット舌打したが、『何うぞお上り下さいまし』

かう言つて、持つて來た提灯をそこにかけて置いて、そのまゝ奥へと入つて行つた。やがて何か言つてゐるやうな氣勢がそこからきこえて來たが、時を移さず二十七八のちよつと小綺麗な、內地の料理屋によく見るやうな、絲織などを着た、小さな女中が小走りに走つて出て來た。

『何うも失禮いたしました』

かう早口に言つて、しかも、その客の何ういふ種類の女であるかを、さうした瞬間にも觀察することを忘れないやうにじろりと見て、そして靜かに室の方へと案內すべく先に立つた。

『あとから、まだ一人來る筈になつてゐるんですが、電報は來てゐなかつたでせうか』

政代はかう後から訊いて見た。

女中は振返つて、政代の顏を見返すやうにして、『別に、さういふ電報も參つてはをりませんやうでしたが……』

『あゝ、さうですか。奉天から下りで來るはずになつてゐるんですが、それぢや、すぐやつて來るつもりなんでせう』かう言ひながら政代は女中のあとについて行つた。

そこに政代は四疊半の副室を持つた八疊の靜かな一室を發見した。床にはちやんと花が活けてあり、山水の軸が懸けてあり、大きな字の額の橫に長く長押に懸けてあるのをかの女は目にした。眞中には、欅の一枚板のよく拭き込んだ大きな餉臺が据えられてあつた。思つたよりも立派な、瀟洒な、上等な旅舍の設備がしてあるらしかつた。

わるく疑はれないやうに、また此處等に澤山ある賤しい稼業をしてゐる女達と一緒にされないやうに、婉曲にかの女が說明してゐるのを、默つて點頭いてきいてゐた女中は、やがて、

『それでは、あの、この次の下りでいらつしやいますので御座いませう。それは奉天から特別に立つて來る汽車で御座いますから』

『それが、終列車になるの？』

『いゝえ、まだ、あとに十時三十分に此處を通るのが御座います』

『さう。それでは何方かで來るでせう』

『では、御食事はいかゞ致します？　すぐ支度致しませうか、それとも御一緒に――？』

『いゝえ、もうお腹が空いたの、私……』

かう突放すやうに笑ひながら政代は言つた。

女中はそのまゝ下りて行つた。政代は帶を解いたり、コートを脱いだり、持つて來た綿入を重ねて着たりしたが、今度女中が入つて來た時には、すぐ湯殿に案内して貰へるか何うかを訊いた。

『えゝ、えゝ、いつでも空いてをります。何うぞお召しなすつて……』

かう言つて、女中はそのまゝ政代を階段の下の方へと伴れて行つた。

廊下を歩きながら、

『これからは、こちらは寒いでせうね？』

『えゝ、えゝ、これからはひどいさうで御座います――』

『では、姐さんは、まだ此方に來て、冬を越したことはないの？』

『え、まだ、此間、參つたばかりで御座いますから』

『さう……それは大變ね。來たのは内地から？』

『え』

『何處なの？　姐さんは？』

『田舍で御座います』

『でも上方から此方ではないやうね。東京に近い方ね』

『よくおわかりですね』

『だつて、言葉が上方ぢやないもの……。本當に何處？』

その時、丁度、湯殿の硝子戸の前に來てゐたので、女中はその戸をガラ〳〵と音立てゝ明けた。

『私、隨分遠いところなんですの。山形ですわ……』

『山形？　さう、隨分遠いのね。でも、東京にゐたことはゐたのね？』

『えゝ、東京にゐた方が長いことは長いんです。十六の年から出て、昨年まで東京にゐたんですから』

『だから、東京だと思つた……。かういふところに來ると、東京のものときくと、本當になつかしいものね』

こんなことを言ひながら、政代は着物を脱ぎにかゝつた。浴槽の中は、茫と白く湯氣に籠つて、灯もぼんやりと光焜なしについてゐるのが見られた。（靜かで好いところ）と政代は思つた。かうしたところならば、いかやうに戀心をKに投げかけやうとも、またいかやうに色彩の濃い歡樂にKと耽らうとも、誰にも氣兼するものもないと思つた。Kもまだ來もしないのに、またKが來ても、果してかの女の戀心

を受けるか何うか本當にわかつてもゐもしないのに、それなのに、かの女の體はわな〳〵とある期待に顫へるのを感じた。

溢れ漲るばかりに湧き出してゐる玲瓏とした湯に浸つた時には、政代は生き返つたやうな氣がした。長い間の汽車の動搖も、暗い客車の中のさびしさも、荒凉とした滿洲の曠野にその身が漂泊してゐることも、何も彼も忘れて了つたやうに思はれた。かの女は湯氣の漲りわたつた薄ぼんやりした光線の中に、微白くその體を現し乍ら、光燦のない灯の影に凝と見入つた。

その時のかの女は、決して自己の運命の數奇を歎いてゐる女でもなければ、またこれから先きの生活が何うなつて行くかを憂へてゐる女でもなかつた。(そんなことは何うでも好い。將來やなんかは何うでも好い)こんな風に政代は考へた。

寧ろそれよりも、Kがやがてやつて來るか、何うした顏色をしてやつて來るか、かの女の戀心にその身を寄せかけるやうにしてやつて來るか、それともまた堅く身を持してやつて來るか、それがかの女には心配になつた。無論、Kは此方の心は知つてゐる筈である。それはたしかである。しかし心配なのは、Kの性質がそれほど女ずれがしてゐないことである。存外堅い紳士らしいところを持つてゐることである。しかし、それが、一方にはかの女に取つて賴もしかつた。現に細君もあり子供もあるのを知つて居りながら――またやがてはあの辛い三角關係にならなければならないことを承知して居りながら、かうした戀心に落ちて行つたのは、その賴もしいところがあるからであつた。と、今度は、始めてKに逢つた時のことが繰返して思ひ出されて來た。

それはまだかの女が北京に人形を賣りに行かずに、大連で音樂會などを開いて、柄にない獨唱などを舞臺でやつた時であつた。その時その慰勞見たいな會を土地の有志――有志と言つても、異鄕にゐるさびしさから、またはさうしたかの女のやうな內地の女めづらしさから、好奇に開いて呉れたものであつたが、その席上で始めてかの女はKに逢つたのである。そしてその最初のKは、新しい女としてかの女に對して、盛に議論をしかけて來るやうな人であつたのである。從つてかの女とKとは、人の大勢ゐる中で男女問題などについてかなり聲高く、そこにゐた藝者の中には、目を睜つて此方を見てゐたものもある位に議論を鬪はしたのであつた。

『ふむ、成ほど、わかつた』

後にはかうKは男らしく點頭いたりした。

そのK、その理窟ずきなKとかうした心持にならうなどとは、その時は夢にも思つてゐなかつたことを政代はくり返した。行く先には、なにかがある。屹度、その身に打突かつて來るものがある。未來を

心配する必要はない……。最初の夫であつたSからわかれて來た時に、かう思つてかの女は出て來たが、その言葉はその後にも度々その胸に上つて來た。現に、今もそれが上つて來てゐた。……かう思つてゐると、突然何處から何うしてさうした考へが起つて來たかといふやうに、Sの手に殘して來た二人の子供が強い力で思ひ出されて來た。(もうお勝は十二になつてゐる。保男は十一になつてゐる!)かう思ふと、その後、丸で逢つたことはなかつたけれども、その成人したさまが眼に見えるやうな氣がして、忽ち胸が塞ゐるやうになつた。

(何ッて、不仕合な母親だ?　さうした子供をこの滿洲の曠野のさびしい溫泉場の浴槽の中で思ひ出すとは!?)涙の落ちさうになつて來たのを政代は强て自ら押へて、(だつて、自業自得だもの、仕方がない。かう言ふことがあるのは、あの時からちやんと覺悟してゐた筈だ)續いてかう思つたかの女は其まゝ下唇を咬むやうにした。

しかし、湯からあがつて、鏡の前に立つた時には、さうした考へはすつかり消えて、何方かと言へば、安易な、のんきな氣分になつてゐた。

(宛で生返つたやうだ)

こんなことを獨語しながら、政代は亂れた髪を櫛で梳き上げた。

そのまゝ室に歸つて來ると、其處にゐた女中は、

『お早う御座いますこと』

『さう、これでも早う御座んしたか。隨分長湯をしたつもりなんですけども……。ゆつくり入つたんで、すつかり暖まつた……。よく暖まるお湯ですねえ』

『お湯はよく効きます。胃腸などは、ぢき治つて了ふさうで御座いますから』かう女中は言つて、『もうお支度を出しましてもよろしう御座いませうか』

『さうですね……。もうお腹は空いてゐるんだけども、その前に、ちよつと鏡臺を拜借したいんですがね』

『あ、鏡臺、かしこまりました』

かう言つて女中はバタ〳〵と廊下に草履の音を立てゝ向うに行つたが、そのまゝそこにちよつとした鏡臺を持つて來た。

『こんなのしか御座いませんが、これで宜しう御座いませうか?』

『結構ですとも……』

かう言つて、灯の光線の好いところに政代はその鏡臺を据えて、そして其處に座蒲團を持つて行つて

坐つた。

お腹が空いてゐるにも拘らず、かの女がさうしてその鏡臺の前に坐つてゐたのはかなり長い時間であつた。男を相手にする女と同じやうに、かの女も、一本々々と髪の毛が揃ふやうに鬢を撫でたり、束髪だから日本髪のやうにさう骨折つてつくらなくつても好かつたのにも拘らず、あちこちと隨分長く丹念に梳いたり何かしてゐるのを女中は待ちあぐんだやうにして見てゐた。

しかしそれもすんで、膳の前にちやんと坐つた時には、來た時とは丸で別な人かと思はれるほど、それほど美しくなつてゐるのを女中は見た。

『お上手ですことねえ、まア、何んて美しく……』

流石に心から感心したやうに、かう女中は褒め立てた。

『まア、厭ですこと、さう褒めて下すつても、何も奢りは致しませんよ』

『でも、本當に、お上手で御座いますねえ。矢張、御容色の好い方は、おつくりになる氣にもなるし、またつくつてもつくり榮えが致しますのですねえ』

『まア、厭ですこと』

流石にきまりがわるいといふやうな心持を政代は感じた。

食事をすませて、茶を飲んでゐると、次第に、前のガラス戸が明るくなつて來るのを政代は目にした。

『何でせう、明るくなつて來たのは?』

『さうで御座いますねえ……本當に少し明るくなつて來たやうで御座いますね』

『ほ!　今時分、月が出た!』

かう言つて、政代は意外といふやうにして、其方へと立つて行つた。果してそこには、大きな月が、赤い火の玉のやうな月が、濶い遠い地平線の上にひよつくり誰かに押し上げられでもしたかのやうに美しく見事に浮きあがつてゐた。今まで全く闇に蔽はれた低い丘やら、野やら、路やら、畠やらは、すべてその最初の光に明かに照されて……。

窓のところに立つて、凝とその大きな光燈のない月に眺め入つた政代には、またしても異鄕に彷徨ふ數奇な運命の下にあるその身のことが悲しまれて來た。

それから尠くとも一時間は經つた。月は既に高くなつて、その水のやうな光は、一面に濶々とした曠野の中に漲りわたつた。室内には電氣の灯が明るくついてゐるにも拘らず、硝子戸の外側の方は白く銀のやうに光つて見えた。何處かで水の流れる音がした。

入つて來た女中に、

『もう來ますね？　九時のは？』

『えゝ、もうすぐで御座います』

かう言つて女中は持つて來た熱い湯を急須にさして、『冬なんかは、よく後れますけれど、この頃は、後れたつて五分位ですから……』

『九時何分でしたつけね？』

政代は小形の金時計を出した。

『九時三十五分……』

『ぢや、もう五分ですね』

かう言つて、何となく落着かないやうに、政代は女中のついで呉れた茶を飲んだ。

『大抵入らつしやいませう……』

『え、來るだらうと思ふんですけどもね。電報で返事を取つたわけではないんですけども……』

『いらつしやいますよ』

かう慰めるやうに言つて、そして女中は出て行つた。

それから暫くの間、政代は時計と相對して、二分、三分と經つて行くのを眺めた。やがて五分が七分

になり、十分になつた。それでもまだ汽車の通つて行く氣勢はしなかつた。

（後れたらしいのね）

かう政代は口に出して言つたが、しかしそれから二分と經たない中に、長く引張るやうな汽笛の音がしんとした曠野の夜の空氣に冴えてきこえて、つゞいて汽車の動いて來る音が轟々として次第に此方へと近寄つて來た。

かの女は立つて窓のところに行つて見た。しかしそこからは停車場は見えずに、唯、濶い野と、そこに照り渡つた銀のやうな月光とが見えるばかりであつた。やがて汽車は停車場に着いたらしく、長く轟く響は絶えて、エンジンの釜の湯氣を吐くやうな氣勢が夥しくあたりに漲りわたつてきこえたが、それもさう長い間ではなく、やがて再びその曠野を走る汽車の轟音の起るにつゞいて、その長蛇のやうな列車の白い烟を後に、銀のやうな月光の中に小さく動いて行くのが手に取るやうに見えた。

しかもその汽車の轟きも、次第に微かに、微かに、後には遠い風の音か、でなければ水の流るゝ音か何かのやうになつて、そしていつか聞えなくなつて行つて了つた。

また、暫く經つた。何の音沙汰もなかつた。（來なかつたのかしら？）かう政代は思つて見たが、汽車から此處までやつて來る間のことを考へると、さう早く失望して了ふにも當らないやうな氣がした。（何しろ、歩いて來なければならないのだから）かう政代は自ら慰めた。